

笹本祐一

# カ ン バ トル!

妖精作戦 PART III



新装版

シラズ文庫

創元SF文庫版

2012年3月刊行

学園一帯は戦場と化する。



歴史を変えた四部作を  
一九八四年オリジナル版で贈る

カバーイラスト = D.K  
カバーデザイン = 岩郷重力 + WONDER WORKZ。  
解説 = 谷川 流

カーニバル・ナイト 笹本祐一

創元SF文庫

◆ 詳しくはこちら ◆



ME

RESCUE





ソノラマ文庫

カーニバル・ナイト

笹本祐一



朝日ソノラマ

イラスト／御米 椎

目次

ACT・1	サイコ・クラッシュャー……………	5
ACT・2	転校生……………	29
ACT・3	行動開始……………	54
ACT・4	首都高速追跡戦……………	82
ACT・5	インター・ミッション……………	100
ACT・6	戦闘準備……………	134
ACT・7	国立ランデブー……………	154
ACT・8	戦闘前……………	185
ACT・9	国立市街戦……………	216
	どんちゃん騒ぎの夜のためのがき……………	272



## レギュラー紹介

榊 裕

星南学園高等部二年生。『妖精作戦』において小牧ノブをひっかけることに成功し、以来恋仲である。ダグラス・トランブルを敬愛している。

沖田玲郎

榊の同室者。カワサキ750SSを愛車とし、バリー・シーンを崇拝している。

真田佐助

戸沢白雲斎直系を自称する榊の同室者。十三代目石川五エ門を尊敬している。

鳴海つばさ

女子部の新聞部編集長をつとめている。尊敬する人、アメリカ・イアハート。以下略。

小牧ノブ

つばさの同級生。潜在能力だけは超一流のエスパーだが、今回もろくにその力をつかえない。尊敬する人、チャーリー・チャップリン。

平沢千明

私立探偵、レッドバグとして有名なフリーの作業員。壊し屋。チャック・イェーガーを尊敬している。

## ACT・1 サイコ・クラッシュャー

青い海に白い雲の浮いた地球を背景にして、姿勢制御のための高機動バーニアもなしにシャトルが“舞って”いた。

OV017エンタープライズ型スペースシャトル“シャングリラ”——真空中の宇宙船が、バーニア・ロケットもなしに姿勢を変えることは不可能である。にもかかわらず、“シャングリラ”は他の宇宙戦闘機によるビームやミサイルの攻撃をよけ、宇宙空間を舞っていた。

スクリーンの片隅に表示された対地高度は二〇〇キロを切り、さらに刻々と減っている。やがて、三面のディスプレイに、それぞれ違った角度から映されていたシャトルの映像が静止した。四面目のディスプレイにいくつかのデータが簡単に示される。断続的に減速噴射を続けるシャトルの残存燃料を含めた総重量、地球、月、太陽による重力の影響、高度、降下速度など。静止した映像が、今度はスローで動き出した。地球に向けたメインノズルから噴射炎を噴き出したまま、わずかずつ左へスピニングしていく。

それに同期して、四面目のディスプレイのデータが変化をはじめた。五面目のディスプレイ

に、簡単な線画で描かれた小さなシャトルが出現し、それが実写の映像と同じように動いて一瞬前の画に次々に重なっていく。

一コマごとの動きが重ねられたシャトルの画が、スピニングが終わったところで再び止められた。ディスプレイのシャトルの動きが、短い直線の連続した曲線運動に置き換えられる。シャトルの総運動量がコンピューターによって瞬く間に計算され、ディスプレイに表示された。一〇一・四五三トンのシャトルが、毎秒十二メートルの加速度で五・七秒間移動、総エネルギー量は約六九三九万ワット。これは約一万六千馬力という驚異的な数字になる。

「ふう……」

ディスプレイを見つめていたアイザック・ジルベスター博士は額の汗をぬぐった。スイッチを切ってクッションのよく効いた椅子に沈みこむ。閉じたまぶたに疲労の色が濃い。

人気のないデータ・ルームに、しばらくはかすかなエア・コンディショナーの音だけが聞こえていた。

軽やかな電子チャイムで、博士は目を開いた。コンソールの一番手前にあるインターホンに手を伸ばす。

「ジルベスターだ」

性能のいいカメラで隠し撮りしたらしいスライドがスクリーンに映されていた。風景はどこにでもあるような日本の高校、被写体は一人の女子高生だった。

「ノブ・コマキ、十七歳」

スライドが変わった。食事中の風景らしくトーストを持ったノブが、隣の女の子と何か話している。

「詳しい資料は地球へ戻るシャトルの中で読んでおくように。彼女が今回のターゲットだ」

どうやって撮ったのか、授業中らしいノブのバストショットのあと、ルナベース司令のキーラーはもたれていたデスクにコントローラーを置いた。

月面下五〇メートルにある、司令官の公室である。機能一点張りの殺風景な部屋で、キーラーの前には東洋系の小柄なショートカットの少女が無表情に座っていた。まだ幼さが残っている顔なのに、その瞳は年齢不相応に達観したかのように感情を感じさせない。

「地上任務ははじめてだな、カズサ少尉？」

少女はかすかにうなずいた。

「君は日本の学校制度ではまだ高校の一年だそうだが、二年へ編入することになる」

少女の瞳に、おびえたような光が走った。

「地球へはワルキューレ04で行ってもらおう。出発は十八時間後、高校二年生として星南高校に転入するのは五日後だ。任務の完遂を祈る」

一挙動で立ち上がった少女は、まったく板についでいない敬礼をすると部屋から出て行った。

キーラーはしばらくの間、デスク上のディスプレイに映された少女のデータを見ていた。

——和紗結希、十五歳、国籍・日本。能力・C級テレパス、特記事項・サイコ・クラッシュ

1。

「彼女は、日本でのスターボウ計画で最後に参加した人間だな」

「そうです」

デスクの傍らで、ジルベスター博士は司令に椅子をまわした。

「彼女以外に日本人女性は四人、しかし訓練を終了した者で高校生になれそうなのは彼女一人だけ——Y・カズサを今回の作戦に抜擢したのは、そんな理由でしょう」

「それだけではない」

キーラーはディスプレイから目を離さない。

「訓練期間中、実戦参加後の評定はいずれもAだ。彼女はスターボウ部隊の中で最も若い世代に属するが、最も優秀な隊員でもある。——あの、ノブ・コマキとその一党を相手にするのに、彼女よりふさわしいエスパーはいるかね？」

「やはり、わたしは反対ですな」ジルベスターは、白衣の内ポケットから小さな手帳を取り出した。「あまりに危険です」

「エンタープライズ型のカーゴリフターをサイコキネシスだけで自由に振りまわせるようなエスパーには、彼女でも不足かね？」

「対力量の問題ではありません。第一、今までに能力指数が百を超えるエスパー同士が正面からぶつかった記録はないのです」

「訓練では、何度もあるはずだ」

キーラーは、キーボードでディスプレイの表示を変えた。新しいデータが出てくる。

「シミュレーションも訓練も、実戦ではありません。最悪の場合、司令——あなたは、二度と現れないかもしれない宝石を、一度に二人も失うかもしれないぞ」

「君が手ずから訓練したエスパーが、自身の力も使いこなせないような素人しろウトと相打ちになる、というのか？」

「お忘れなきよう、司令」

ジルベスターの声は、深く沈んでいた。

「今までの全超能力者の訓練の中で、彼女——和紗結希だけが、その力を抑え、少しでも無力化する方向への訓練をうけたのです」

「せっかくの超能力を抑え、無力化しようとした……？」

なぜそんなことを、と言いかけたキーラーは、続けてディスプレイに出てきたデータを見て息を呑んだ。

「TNT換算で二〇トン級の爆発力に相当……何かの間違いではないのか？」

「わたしも、何度もチェックしました。しかし、そのデータは正確です。訓練開始前の彼女の超能力が無制限に解放された場合の破壊力はTNT火薬二〇トン分に相当します。しかも、その能力はまだ上限に達してはいなかった。わたしは、本気で彼女から力を奪おうとしました。結果は、なんとかその力を自由にコントロールできるところになったただけですがね。もう一度言わせていただきます、司令。お忘れなきよう。——サイコ・クラッシュ思念爆発などという超能力は、彼女本来の力ではあ

りません。本来ありうべき超能力の姿ですらない」

「だが、使い方次第では非常に有益な能力だ。彼女自身、有能なエージェントでもある。それに――安心したまえ博士、地上部隊にも彼女にも、人命尊重を第一にするように言っている。彼女の任務は誘拐であって暗殺ではない」

キーラーはもう一度最初のデータを出した。ディスプレイに和紗結希のデータが映る。

「しかし、この年であの仕事ぶりとはな……」

### AGE - 15

年齢、十五歳。特例としてSCFの活動に参加している数少ない少年あるいは少女の天才科学者の中には、彼女より若い者もいる。しかし、実戦に参加している者の中では、若年層揃いのスターボウ部隊の中であってさえ彼女はとび抜けて年少である。

「彼女は、本来テレパスですからな」

ジルベスターは、何でもなさそうに言った。

「たった十五年の人生の中で、他人の数十倍にもあたるような経験をしています。テレパスの精神年齢が高いのは全体的な傾向ですし、彼女の場合サイコ・クラッシュなどという能力が発現する以前は、特別に鋭い特A級のテレパシーを持っていましたから」

「現在はC級の受動型テレパスか……」

なぜ能力が変化したのか、と問うようにキーラーはジルベスターを見た。ジルベスターはあいまいに首を振ってみせた。

マスドライバーによって月面離脱速度にまで加速されたCHC73ワルキューレ型四番機は、徐に月の表側へまわりこんでいった。

月軌道圏内で約十数機が稼働しているワルキューレは、ほぼ五日に一度の割合でルナベース・地球間に“定期便”を飛ばしている。ルナベースと、地球をはさんで月の反対側に位置する機動衛星ブルーサーチでそのほとんどの機体を使っており、フレイヤ型タイプとよばれる現在開発中の新型が投入されるまでは、このままの状態が続くはずである。

交代要員で客室キャビンを満員にし、月面特産の鉱物資源のコンテナと予備のキャビン・ルームまで接続してカーゴ・ベイを満杯にしたワルキューレ04は“直行便”ならぬ“各駅停車”の仇名通り、ブルーサーチに寄ってから地球へ降りることになっていた。総行程七〇時間を越える長旅である。

SCFルナベース所属、少尉という階級を持つ和紗結希かずさゆきは、ワルキューレの観測ドームに一人きりでいた。

試作四号機までに取りつけられ、量産型に入った五号機からは省かれた観測ドームは、機体の前から約三分の一、ブレンデッド・ウィングボディと一体化したダブルデルタ翼のはじまるその上に取りつけられている。大気圏突入時や戦闘中は機内に収納される直径三メートルほどの小さなドームの中で、結希は年齢相応の安らいだ顔で星空を見上げていた。

慣性飛行中の無重力の中で、換気装置サーキュレーターによるかすかな空気の流れに身を任せ、結希は漂いなが



ら薄く目を閉じた。

身長一つ分下の足元には、テスト飛行中にフル稼働していた各種の観測機器が取りはずされた跡があり、わずかに残った光学望遠鏡と簡単なパネルだけが残っている。足元を照らすライトがあることはあるが、結希はドーム内のすべての光を消していた。

星明かりだけの光の中に、寝顔のように静かな、わずかに微笑んだ表情が浮かび上がっている。

だが、結希の一番大切な時間は非常事態を告げるブザーによって破られた。ドームが機内に収納されはじめる。

「操縦はしなくていいって話じゃなかったのかよ！」

コクピットに飛び込んできたスターボウ部隊のパイロット、マイク・ウォーレンは慣れない手つきでワルキューレの自動操縦を解除した。SCFに入って以来、やっとのことではじめての長期休暇を取れた彼は、例によって人手不足のため完全自動操縦にプログラムされたワルキューレの非常乗員クルーに入っていた。

「こんなデカ物で高機動効くのか!？」

「一応、バーニアはひとそろ一揃いについておる」

テクニカル・アドバイザー格のジルベスターがオペレーター席についた。

「エンタープライズ型並みの機動性は確保されとるそうだが」

「訓練の時はろくに動いてくれませんでしたかね。ナビ！ えーと、エリスちゃんだっけ？ 早いところデータ送ってくれ」

「今出ます」

ルナベースの司令室のオペレーターであるエリスが、手慣れた様子でマイクの前のディスプレイにデータを送った。監視衛星ダイアナ二号と三号からリアルタイムで送られてくるデータは、ワルキューレから地球側へわずか一万キロの地点に二機のUFOが出現したことを示している。

「スキャン終了……相対秒速二五キロ、四百秒後に軌道交差」

「ビームとレーザーにエネルギーを……」

送れ、と言いかけて、マイクはフライ・バイ・ファイバーの操縦桿にトリガーがないのに気がついた。これはいつも乗っている戦闘機ではない。

「えーと、博士、こいつの武装は？」

「機体後部にミサイル迎撃用のレーザーが二連装だけ、遅れてごめんなさい！」

マイクと同じスターボウ部隊のノエル・ボーが、操縦室に飛んで入ってきてシートごしに自分のパネルを見た。上からシートに降りながらスイッチを入れていく。

「レーザーが二つだ!? 対<sup>A</sup>ミサイル用<sup>M</sup>レーザー<sup>L</sup>でUFO相手に何しろって……」

「両翼に長距離用のレーザーがあるはずじゃが」

「あれは中期型以降のワルキューレだけです」博士に、ノエルが答えた。「初期型のこの機には装備されていません」

「たく、パイロンはあるのにミサイル一つないんだから。エリスちゃん、地球に戻ったら経理部に文句言っついて」

「はあ……」

「んでノエルちゃん、そのレーザー使えるんだろうね」

ノエルは、二連装のレーザー砲塔と連動しているはずの照準装置に手を触れた。ターレットを動かすスティックの反応はかなり早い。

「大丈夫。——試射、する？」

「やっといってくれ。もつとも規定通りの出力が出ても、UFO相手じゃジャブにもならんか。しかし本気かよエリスちゃん、UFO本気でシャトル狙っているのか？」

「軌道は交差します。最接近時、距離三五〇メートル……そんな」

「シャトルへ直接攻撃なんて、あるんですか博士」

マイクは、肉眼で見えるようになってきた二つの光をにらみつけていた。博士は手元のキーボードで何かを計算しているらしい。

「前例がないことはないが……。補給路を断つのは戦略のABCだ。ユキ、至急操縦室へ来てくれ」

「ユキって、あのパイロット候補生の娘っ子でしょ」

機内放送を入れたジルベスターから、マイクはヘッドホンをうけとった。

「あんな小学生呼んでどーするんです」

「……………」

ジルベスターはこめかみを指でおさえた。

「彼女は小学校はとっくに卒業している。日本人は我々より若く見えるのだよ」

「さいですか」

マイクはインカムをオープンにした。

「こちら機長です。乗客のみなさまにお伝えします。みなさまおなじみの“未確認飛行物体”が当機に熱烈なラブコールを送ってくるため、ただ今よりしばらく当機はゆれますがご了承下さい」

ノエルのヘッドホンを通して、客室でどっとうける気配が感じられた。ノエルはなぜか安心して、目を閉じた。脳裏に、一万キロを大きく割って接近してきたUFOが見える。ノエルは軽く手を動かして、レーザーの照準をごく大雑把おおざっぱにあわせた。トリガーに指をかける。発射。

真空中では発光しない高エネルギー・レーザーが見えない矢となって放たれた。二連装のレーザーが、UFOより一キロばかり離れた所を通過する。

「AMLの調子は？」

高機動バーニアに推進剤を送る片手間にマイクが訊きいた。ノエルはざっとディスプレイに目を通した。

「今ひとつ電圧が上がりきらないみたい。照準も少し甘いし、出力九〇パーセントくらいかしら」

「メカニックの奴らカーゴリフターと思って手を抜きやがったな。エリスちゃん、援軍の方どうなった？」

「ルナベースで緊急発進スクランブルしたそうですが、C I - 40 エリアルでも追いつくには四十分かかりません」

それでも、C I - 40エリアルの前に使われていたC F - 38 ナイトホークよりずいぶん速い。しかしU F Oがシャトルを一機葬るには充分すぎる時間である。

「だから対空火器フル装備にしたフレイヤ型を早いところ使えっただ」

文句を言いながら、マイクは操縦室内へ振り向いた。いつの間にか結希が入り口に現れており、博士の話にうなずいている。

「来ます！ 第一波攻撃！」

「おーし、ケツまくって逃げよー！」

エリスの悲鳴に近い声に呼応して、マイクはワルキューレを反転させた。U F Oからの攻撃——未だにその正体すら判明していない高エネルギー波のパルスが、ワルキューレ下腹部の装甲セラミックをかすめる。

「これはまた、目まいがするような機動性だ」

苦い顔をしたマイクが舌を打った。

「ノエルちゃん、早いところ反撃してくれ」

「一応してるけど」ノエルは深刻な顔で、照準スクリーンを覗き込んでいる。「感じてないみた

い」

「どーせえってんだ」

精一杯バーニアをふかしてもものったりとしか動かないワルキューレに、マイクはコンソールをたたいた。大気圏内であればそれなりの運動性を発揮するワルキューレも、すべての運動をバーニアノズルに頼る宇宙空間ではかなり反応が悪くなる。

「マイク、UFOに出来る限り近づいてくれ」

「なんスって!？」

ジルベスターのいきなりの言葉に、マイクは思わず振り向いた。さっきまで操縦室にいたはずの結希は、気配も感じさせずにどこかへ消えていた。

「カミカゼやれってんですか!？」

ノエルとエリスも、驚いたようにジルベスターを見ている。

「ユキに、少しばかり骨を折ってもらおうよう頼んだ」ジルベスターの口調は、いつもと変わりない。「彼女の能力を使って、UFOを迎撃する」

「彼女のって……サイコ・クラッシュ?」

マイクはやっと結希の能力に思い当たった。アリゾナの岩石砂漠に、彼女が直径五〇メートルのクレーターを作ったという噂うわさを聞いたことがある。

「できるんですか?」

ノエルの声は、少女のように細かった。

「UFOの攻撃に試したことはないが……今ワルキューレを救えるのは彼女しかあるまい？」  
博士は、戦闘態勢に入って機内に収納された観測ドームをパネルを操作してもう一度オープンにした。

「さてと……ノエル、代わってくれ」

ジルベスターはシートから立ち上がった。いきなり名前を呼ばれたノエルは、きよとんとして目の前の照準から目を離し、またディスプレイを見たりする。

「え、でも、レーザーは」

「レーザーよりユキのサイコ・クラッシュの方が有効だろう。こちらから合図したらすぐにドームを収納してくれ」

特殊強化積層ガラスのドームに手をついて、結希は遠い二つの光点を見つめていた。

確かに飛行物体なのに、純粋なエネルギー以外のものを感じることができない。よほど高効率の推進機関を使用しているのだろうが、撃墜されたUFOの残骸を調べてもエネルギー系は不明のままらしい。

結希は、ふと足元の観測室のハッチに目を落とした。気密ハッチが開き、ジルベスターが顔を出した。上がってくる。

「どうだ、出来そうか？」

結希はUFOに目を戻してうなずいた。ジルベスターは観測室の一角の通話装置のヘッドホン

を取った。

「こちらドーム。操縦室、聞こえるか？」

『はい、聞こえますよ。——お守り役ですか』

開放式のヘッドホンなので、声もれ出てくる。

「彼女をドームから引きずり出さねばならんのでな」

『はあ？』

マイクはよくわからないらしい。

「早くUFOに接近してくれ。一瞬でいい。できれば百メートル以内に」

『百メートルですとお!』

声をあげたマイクにかまわず、博士は続けた。

「ノエル、最接近後、即座にドームを収納してくれ。コンマ一秒でも遅れるとこちらが危なくなる」

『了解です』

呑みこみのいいノエルは素直に答えた。マイクはしばらく毒づいたあとで、

『んじゃつつこみませー。神の御加護をーっと』

後部のノズルを開いたらしい。ワルキューレがその長大な機首をぐーっと巡らすようにGがかかった。UFOの一機がゆるいループを描いて接近してくる。結希のうつろに開いた瞳にUFOが映った。到底手が届く距離ではない。



「問題はこのガラスがどれだけ保つか、ということだ」

結希の横に上がってきたジルベスターが、こんこんとドームをたたいた。

『博士、観測ドームぶち壊すおつもりですか』ヘッドホンの向こうからマイクが訊いてくる。

『ガラスの破片で壊れてくれる相手とも思えないんですが』

「壊れてくれん方がありがたいが……余計な心配をしてこの機体を壊さんでくれよ」

『へーい。あらよーっと』

かけ声とともに、ワルキューレが急上昇した。円盤状に光るUFOの一機が見る間に目前に迫る。

結希は目を見開いた。生気のなかった瞳に破壊的な光が宿る。大きく息を吸う。急速に拡大した意識の端から中心に向かい、UFOが飛びこんできた。結希はドームにあてていた手を握りしめた。

集中、そして解放。UFOに向けた体の上半身から白熱したようなショックがつきぬけてUFOに飛ぶ、制服がはじける。

結希の小さな顔の正面から、ドームに一瞬にして放射状の細かいヒビが入った。すぐ目の前に接近したUFOの白い光が大きく震えたかと思うと、大輪の花火を開いたように四散した。続けてもう一発。ドームのヒビがさらに広がる。

「これ以上はまずい！ ノエル、収納だ！」

二機目のUFO破壊も確認しないうちに、ジルベスターが結希の細い腕を握った。引かれるま



まに結希がハッチに押しこめられる。気圧差に耐えかねた空気が風の音をたてて吸い出されていく。

ジルベスターがハッチを閉じると、観測ドームが真空中に砕け散るのが同時だった。『博士、生きていますか!』

下の通路でほっと溜め息をつくジルベスターのヘッドホンから、ノエルの声が聞こえた。

『観測ドームが砕けました。大丈夫ですか』

ジルベスターは、上半身の裂けたルナベースの制服を着たまま無言で通路にうずくまっている結希を見た。

「大丈夫だ。二人とも生きている。心配ない」

『UFOは一機四散、一機は破損して逃げ出しました。——博士、どんな魔法使ったんですか』

「これが彼女の能力だよ」

訊<sup>き</sup>いてきたマイクに、博士は答えた。

「一種の念力<sup>サイコキネシス</sup>だが、彼女はその肉体<sup>からだ</sup>を媒体にして、とてつもなく強力な衝撃波を放出できるのだ。それによって目標物を爆破することができる。もっとも体と目標物の間にある物にまで余計な衝撃を与えてしまうので、宇宙空間では非常に危険だがね」

『ほー』マイクはピューと口笛を吹いた。『大したもんだ。おかげで助かったぜ。ユキちゃん。地球にいたらパフェでもおごらせてくれ』

結希は、うつろな微笑を浮かべた。

「ノエル、制服の替えを持って来てくれ」

博士は苦笑いしながら結希のズタズタになった制服から目をそらした。

「彼女の能力の欠点は、事のついでに自分の服まで裂いてしまうことだな」

その夜、ロンドン市ウエストエンドのソーホーで、ヴィクトリア朝以来の歴史を持つ有名な超高級クラブ「ペニー・レイン」は戦場と化していた。

かの薔薇十字団を母体に持つ犯罪シンジケートとイスラム原理主義の息がかかっているらしいノイエ・ナチスの残党の秘密会談のド真ん中に、イギリス情報部SISが急襲をかけたのである。そして、その中になぜか私立探偵平沢千明氏が混じっていた。

「貴様が悪いんだぞ、ジャック！」

バリケードにした分厚いチーク材のテーブルに身を隠したタキシード姿の平沢は、ガラの悪い英語で喚きながらあらかじめ持ち込んであったM60機関銃を抱え上げた。爆発音と発射音で声もろくに聞こえない。

「こんなパブの中でゲリラ戦でもやらかすつもりだったのか!？」

「情報がもれたらしい」

キングズイングリッシュで言いながら、黒ずくめの男がイングラムM10軽機関銃のサイレンサーをはずした。SISではジャック・ザ・リッパーで通っている実戦向けの凄腕の工作員である。

「もれたらしいで済むか！」

平沢は一度テーブルから出した首をひっこめた。複雑な幾何学模様の描かれた床にはグラスやビンの破片が散らばっていた。敵側の軽機銃の音に消されないように喚く。

「西部劇じゃあるまいし、貴様と二人だけでどうするつもりだ！」

「さてな」

手榴弾ダイナミットの安全ピンをくわえて抜いたジャックが、サイドスローでノイエ・ナチスのバリケードに投げ込んだ。

爆発で椅子やテーブルが吹き飛び、一瞬銃声が途絶える。ここぞとばかりに平沢は、とっくに撃ち尽くしてカラになっていたコンバットマグナムの銃弾をスピード・ローダーで詰め換えた。

「連中、軍用ライフルまで持ち込んでるぞ」

「まったく予想外だ」

再びラウンジを飛びはじめた五・五六ミリ高速弾の音を聞きながら、ジャックは細巻きのシガーにペーパーマッチで火をつけた。その横を、テーブルをつきぬけた高速弾が飛んでいく。カウンターの内側に陣取った薔薇十字の一团がモーゼル・カービンを乱射して平沢たちの後ろに並んだ女神像を片っ端から砕いていく。

平沢は銃声の方向を聞き、テーブルの陰から人数の見当をつけた。

「カウンターの方、行くぞ」

「はいよ」

ジャックが、ショルダー・ホルスターからリボルバーを抜いた。それを見た平沢が顔をしかめる。

「まだピースメーカーなんて骨董品使ってやがるのか」

「弾丸さえ出ればいいのさ」

タイミングを計るまでもない。弾幕が途絶えた隙を狙って立った平沢は、続けざまにカウンタ―にむけてトリガーを引いた。コルト・ピースメーカーなどという旧式拳銃のジャックは、西部劇のヒーローよろしく一発ごとに左手でハンマーを起こしている。

撃ち終えて素早く身を沈めた平沢のバリケードに、いつの間にかびしっと正装を決めたボーイが身をかがめていた。

「あら？ 注文ならしてないぜ」

もう一度マグナムの弾丸を詰め替える平沢に、ボーイは電話機を差し出した。

「平沢様でございませうね？ お電話が入っております」

「電話？——さすが「ペニー・レイン」だ、教育が行き届いてる。ありがとよ」

ポケットから適当にポンド紙幣を出してボーイに渡した平沢は受話器をとった。

「はい、こちら平沢」

肩にあてたまま、シリンダーを元に戻す。

『元気そうだな』

「マスター!? よくここがわかったな」

神戸の喫茶店ダイアナに構えているはずの希代の情報屋、マスターだった。

「何事だ？ こっちはちーと取り込んでる。手短に頼む」

銃撃戦の音は向こうにも聞こえているはずである。マスターはすぐに本題に入った。

『残党どもはほうってすぐに戻れ。極東のSCFが動き出した』

「SCFが!? またか？」

『前回ほどストレートな動きではない。詳しい資料は追って送るが、早く日本へ戻らないと契約違反になる』

平沢が以前、正体不明のスポンサーと交わした契約——小牧ノブのガード——はまだ生きている。たまたま彼女を狙っているらしいSCFに全然動きが見えず、ヒマを持ってあました平沢がマスターを通してバイト代わりの仕事を回してもらっていたのが、今回の銃撃戦であった。

「了解。すぐ戻る。——あー、よかったら事務所の掃除しといてくれ」

『特別料金になるが』

「まけろ」

平沢は返答の間もあたえずに電話を切った。銃弾に負けぬ声でジャックを呼ぶ。

「用事が出来た。抜けるぞ！」

「半分は始末していけ」

「へーへ」

コンバットマグナムをホルスターに戻した平沢は、安全装置を解除したM60を両手で抱え上げ

た。弾丸ベルトがだらりと垂れさがる。

「後始末はS I Sで頼むぞ」

立ち上がりざま機銃弾を乱射する。本来野戦で使用されるべきハイパワーライフル弾が湯水の如くラウンジにばら撒かれた。ノイエ・ナチスのバリケードもローゼンクロイツのカウンターもあつという間に碎け散る。

「ではお先に」

その場にM 60を放り出すと、平沢は「ペニー・レイン」の、着弾痕だらけになった古い階段を一気に駆け上がった。裏道に停めておいたRD 500 LCにキックをかませてサイドスタンドを蹴とばす。エンジンが暖まったままだったRD 500のV型四気筒は一発でかかった。霧雨の中に一直線にヘッドライトの光が伸びる。

平沢はカーナビ・ストリートへ向けてRDをスタートさせた。タキシードから硝煙しょうえんのにおいが流れていく。

西回りの最後の便を、間一髪のタイミングでつかまえることに成功した。

ヒースロー空港から離陸していくらもたたないうちに、スチュワーデスが分厚い書類袋とメッセージカードを届けにきた。書類はマスターから、カードはジャックからである。

レッドバグへ――

敵前逃亡の罪は重い。ペニー・レインの修理代にはおまえの分の報酬をあてるが、そのつも



りで。

PS 次の機会には仕事ぬきでペニーに行こう

ジャック・ザ・リップパー

## ACT・2 転校生

「第六章、明治維新から開戦前夜まで、一九六ページから二二八ページまでが日本史の範囲だ。心して勉強するように」

「鬼イ！」「悪魔！」「死ねー！」「呪<sup>のろ</sup>ってやる、呪い殺してやる」「なんまんだぶなんまんだぶ」  
わっはっはと笑いながら、六時限目の授業のとどめに今年度第六回目にあたる模擬試験の範囲を告げた日本史教師は、星南高校二年B組の教室から出て行った。

「まったくゆー学校だよー」

ぼやきながら、榊裕はルーズリーフを紙袋に放りこんだ。

「全寮制の学校で日曜日に模試って、普通あり？」

「それより一度に五科目ちゅーの何とかしてほしい」

バッグに勉強道具一式を放り込んだ、榊と同室の真田佐助が来た。

「これだけ並んでくれちゃうと、対策も立てられない。やっぱパスするしかねーかい」  
「逃げよっか。よー沖田、なんとかしておくれないかい」

「俺に言ーな俺に！」バンドで教科書とノートをまとめた沖田玲郎が喚いた。「先公呪い殺してやりてエのは俺も同じだ」

「呪わない？」

「ワラ人形、五寸釘、三ツ又と色々揃っておりますが」

バッグの中をかきまわしはじめた真田を沖田が止めた。

「うっかりしたもん出すな。あの手の物は見られると効力が半減する」

「意外とお詳しーよーで」

「それより呪うならテスト業者だ。どーせリベート使ってやがんだから、殺したって文句ゆーことはねえだろ」

「殺して文句ゆーことがねーとは思えんが……」

「わし喜ぶ」真田がしゃあしゃあと、伊達と酔狂で持ち歩いている手裏剣を出した。「立派に殺してこい」

「すな！」

立ち上がった沖田の背を、榊がつんつんした。沖田が向くと、榊は窓の外を指してみせる。

「あのクラシック、見たことない？」

「クラシック？」

沖田は、教室のある三階の窓から顔を出した。隣の女子部の正門横、来客用の駐車スペースにクラシックカーじみたオープンカーが、ほろを上げて停まっている。

「モーガンプラス8……」

ぼそっとつぶやいて、沖田は目を覆った。

「探偵だ」

「探偵って、平沢氏？」

真田が窓からひょいと首を出した。沖田が窓に背を向ける。

「あいつまた動き出したのかよ」

「行く？」

ひょいと女子部の方向を指した榊に、沖田はくっつかかった。

「おまえは命が惜しくないのか！ この前あいつに関わってどーなったか忘れたか！」

「実にエキサイティングかつスリリングな旅行であった」

「行きたいってんなら止めないぜ。ただ今度は月くらいで済むかどーか……火星か木星、ヘタすりゃ太陽系追っ出されるかも」

「……」

榊と真田は顔を見合わせた。

「どーする？」

「パスしよーか」

「もしSCFがらみなら気になるんだけど」

榊が、未練がましく女子部の方を見る。放課後、クラブ活動の生徒たちが校庭に出はじめてい

た。

新品の、どこかなじんでいない制服を着た、和紗結希は、無感動な瞳で星南高校女子部の校舎を見上げた。

ヘアバンドのように鉢巻きを巻いたジャージ姿の少女たちが、笑いさざめきながら校庭に出てくる。校庭に画材用バッグを置いた結希の横を、歓声をあげて駆けぬけていく。

結希は、かすかな頭痛を感じながら溜め息をついた。軽いバッグを肩にかけ、もう一度歩き出す。

事務室のドアに手をかけると、ドアはいきなり向こうから開けられた。結希は出てきた人影にぶつかりそうになった。

「あ、失礼」

結希は、よろけた自分の腕を押さえたたくましい手の主を、うつろな眼で見上げた。薄いサングラスをかけた顔が、記憶の中の写真と一致した。

結希は、大丈夫ですというように頭を下げて身を引いた。

「大丈夫ですか。不注意で、どうも」

平沢は笑ってみせた。病み上がりみたいな女生徒は、もう一度無表情にうなずいた。

結希は、転校前に覚えさせられた写真のデータを思い出した。平沢千明、探偵、要注意人物

——敵。結希は目をそらして事務室に足を向けた。さっきぶつかった時におぼろげに感じた平沢のイメージ——彼の意識の底に抜き身のナイフが光っていた。

事務室のドアが、ばね仕掛けで閉じられた。平沢は校舎の廊下を歩き出した。

「こんなに早く顔を見れるとはね」

和紗結希——SCFの職員は、転校生として星南高校女子部に入る。マスターの情報は確かだった。SCFに入る以前の、経歴というほど長くない彼女の人生についても、彼女の写真にしても。

「しかし、暗い子だ」

平沢は歩きながらスーツのポケットからスナップ写真を取り出した。約一年前の彼女の写真——彼女はボブカットの髪で、中学校の教室からいたずらっぽいやつで空を見上げていた。

「写真とえらくイメージが違うな」

平沢はスナップをポケットに戻した。

駐車場で、いやいやつけたようなモーガンのドアに手をかけた平沢は、何かの気配を感じて振り向いた。

「お、学生か」

「ここまで来たのにあいさつもなしでお帰りですか」

男子部と女子部の境にあるポプラ並木の陰から、沖田、榊、真田が出てきた。

「そういや、おめーらここの学生だったっけな」

「いつもの1100Rどしたん？」沖田が、モーガンの長いボンネットに手をかけた。「転倒したとか？」

「この寒いのにバイクになぞ乗ってられるか」

「軟弱ものー」

かまわずに、平沢はモーガンの低いシートに入った。キーをひねって、KKK製のターボチャージャーを組み込んだV8エンジンを始動させる。もともと暖まっていたエンジンは、簡単に目覚めた。

「も、行っちゃうの？」平沢が閉めようとしたドアを、榊が押さえた。「ちょっと待って、訊きたいことがある」

平沢は、運転席から榊の顔を見上げた。

「また、SCF？」

「さーっかつきくん」

訊きかけた榊に、あさっての方向から声がかかった。小牧ノブだった。

「みいつけた。今日、駅前つきあってくれる約束だったでしょ」

「えーと、そーだったけ？——あ、忘れてた」

「はなさないーっ」と

小走りに榊のそばにきたノブは、榊の腕にからみついた。それから沖田、真田と車の中の平沢

に気づく。

「あれ？ 探偵さん……」

沖田は片手を目にあて、真田はそっぽを向いた。なんとなく静かになった空気の中で、平沢は悠々と煙草をとり出した。

「——んじゃ沖田、あと頼む。すぐ行く？」

榊の顔を見上げたノブは、一度平沢に目を戻した。軽く会釈する。

「行こ。早く行かないと、外出時間終わっちゃう。じゃね」

榊の腕を抱えたまま沖田と真田に軽く手を振ったノブは、そのまま榊を引っ張るように歩き出した。

「んじゃ、おあとよろしく」

引っ張られる榊が残る三人に手を振り、榊はノブに歩調をあわせて歩き出した。

「——あの探偵さん」榊を見ずに歩きながら、ノブが口を開いた。「どうかしたの？」

榊は肩をすくめた。

「何でもないよ。通りがかっただけらしい」

「ほんと？」

横目づかいに、ノブは榊の顔を見た。

「……なんだア、心配して損しちゃった」



「お熱いこって」

なんとなく毒気をぬかれて、沖田たちは榭とノブを見送った。

「探偵、話もとに戻そう。どうしてこんな所に出てきた？」

ジタンをふかした平沢は、ふうーっと煙を吹き出した。

「太平洋地域のSCFにおかした動きがあつてな、また工作人員でも動き出したんじゃないかと様子を見に来ただけだ」

適当にそれらしい話をでっち上げる。

「うそこけ」あっさりと沖田が言った。ドアに肘をつく。「様子見に来て、なんで校舎の中まで入って来なきゃなんねえんだ？」

平沢はジタンを口にしたまま、しばらく考えこんだ。

「わかった。本当のことを言おう。実はな」沖田を指招きする。「ちよっと耳貸せ」  
「ん？」

耳を出した沖田に、平沢は二言三言ささやいた。

「……なに!？」

思わず声をあげた沖田に、平沢は軽く指を振ってみせた。

「そういうわけだ。じゃな」

平沢はモーガンを急発進させた。圧倒的な出力をもつエンジンを一トンを切る車体に載せたクラシックなスポーツカーは、後輪を空転させて駐車場から学校前の検通りへ出ていった。

「どったの？」

モーガンの後ろ姿を見送った真田が、啞然とした顔をしている沖田に訊いた。

「あいつな……」沖田が小声で言った。「ヒマだから、女子の体操部見に来たんだってよ。——ぬあにがレオタードがたまらんだ、あのバカ！」

「ほー」

真田は額に手をかざして、見えなくなったモーガンの方を見た。

「探偵業ってな意外にヒマなんですな」

国立駅前というと、榊ら星南高の生徒にとっては南口を指すことになる。南北に走る広い大学通りと、東南、西南の方向へのびる放射線状の道路及び数多い脇道が駅前を走り、商店街が集中している。

国立駅南口の改札を出てすぐ右へ行くと、この界隈で一番大きなTZ書店がある。

「参考書なら大学の生協の本屋でもかまわんと思うのだが」

「いいのがないんだもーん」

榊は、一階の雑誌売り場をしばらくうろついたらあとノブにつきあわされて二階の楽譜のコーナーにいた。

「わあいサザンの新譜だあ」

「デイドリーム・コーストはないか」

「この曲好きなの、ブラバンでやんないかなあ」

「古いのしかないな……おー、伊福部昭が出ているではないか、どーせならこーゆーのやらない?」

「これ? 好きな先輩、いるけどオ、やったらややこしいでしょ、テンポとか」

「さんざん好き勝手なことを言ってから、やっと本来の目的地である、参考書売り場のある三階へ上がる。」

「だから参考書とマンガの単行本が同じ階にあるってのはいけないよー」

例によってコミックス売り場でひっかかった榊がうめいた。

「また新刊が出てる……うーむ、後でマン研に借りに行こう」

「先行ってるよ、参考書の方」

「あ待って、すぐ行く……えーいこっちの事情も考えずにぼこぼこ出しおって」

「結局単語帳一冊だけ?」

「いいでしょお、別に」

レジで勘定をすませた二人は、帰宅時間で人が多くなってきた駅前通りを歩きはじめた。

「んで、どーする? 茶店サテンでも寄ってく?」

「時間ある?」

榊は、腕時計に目を落とした。

「門限まであと四十……三分」

「あいつらどこでヒマ喰ってるんだ！」寮の自室である405号室で沖田がうなった。「まったくあの連中は……」

「何をぶつぶつ言っとる」

机に背を向けてマンガ誌を読んでいた真田が顔をあげた。

「SCFが動き出してるかもしれないっちゅーのに、榊とノブちゃんどこで遊んでやがるんだ！」

「駅の方で、遊んでるんじゃないかい？」

「あいつらー！ あの二人には訳のわからん巨大組織に追われとる実感とか危機感つーもんはないのか！」

「ないんでない？ 追われてるのは二人ともじゃなくて一人だけだし……ほんとに動いてるの、SCF<sup>あれ</sup>？」

「確証もなしにあの探偵が動いてたまるか」

「ほお、レオタードぐらいではだまされないと」

「たりめーだ！ せめて更衣室かシャワールームくらいでなきや……」

「いいですな。今度見に行く？」

「うん、行こう——と待て！ 何を言わせるなにを！」

「いい場所みつけたんだ」真田はマンガ誌に目を戻した。「今度双眼鏡持って、行く」  
一度真田をにらみつけ、沖田はやにわに座っていたベッドから立ち上がった。真田が少し顔をあげる。

「もう行くのか？ まだ明るいが」

「誰が覗きに行くと言った！」

真田は黙ってマンガを持った手で沖田を指差した。

「だあほー！ 女子部に行くだけじゃ……」

「やっぱり覗きじゃないか……ま待て早まるな、悪かった沖田、話せばわかる！」

部屋の出口の横にたてかけてあった、秋の映画制作に使って以来そのままの銃剣付きのM16を持って迫る沖田に、真田はマンガ誌を楯代わりに両手で前にかざした。

「貴様、命が惜しくないとみえる……」

白光一閃。あっさりマンガ誌を両断した沖田が銃剣を真田につきつけた。

M16の方はエアライフルだから撃ったところでどうなるわけでもないが、銃口に付いている細身のナイフはわざわざ焼きをいれて研といだという危険なシロモノである。

「悪かったって言ってんだろが、落ちつけ沖田！」

「……………」

しばらく真田をにらみつけていた沖田は、ふんと言って目をそらした。ベッドの上に銃剣を放り出して部屋を出ていく。その背に真田が声をかけた。

「一応訊いとく。何しに行くの？」

沖田は肩ごしに振り向いた。くわっと牙をむいてみせて、力まかせにドアを閉じる。

「せっかく女子部行くとゆーのにあの態度だと……」真田は両手を合わせた。「つばさだな、相手は……。なんまんだぶなんまんだぶ」

その日、勇猛をもって鳴る鳴海つばさ編集長を頭アタマにいたたく星南高女子部新聞部室は、例によつて修羅場と化していた。

週刊ペースで発行している学校新聞だけでも「新聞部部室あそこには七日に一度地獄が来る」という伝説があるのに、この上マン研と組んで分厚い増刊を出すつもりらしい。

「このやろ！ 新人のくせにネームもあげずにのーのーと居眠りなんかするなー」

こっくりこっくり船をこぎはじめたマン研の一年生にそこらへんにあったリキッドペーパーを投げつけて、つばさはどんと腰をおろした。

「下割り終わるまで帰さないからね、覚悟しとけ」

「鬼ーッ」「悪魔ー！」「サドの変態会長なんか嫌いだー！」

どつとあがった非難の声を、つばさは愛用の木刀で机をひっぱたいてぴたりと止めた。

「今宵こよひの村雨蘭丸は血にうえておる」

ニヤッと凄みを効かせて、つばさは顔の前に木刀の刀身をかざした。

「犠牲者になりたいっての、誰？」

「しーん……」

部屋にカン詰めになされた新聞部主要スタッフ、及び人数不足のため男子部まで巻きこんでいるマンガ研究部の部員で、未だに原稿をあげていないという不埒者ふちもの一同が、せこせこと目の前の仕事に向かい始める。つばさは木刀を肩にかけたまま腕を組んで目を閉じた。

しばらく、ペンを走らせる音と紙のかすれる音、低いささやき声だけが部屋を満たす。

突然、椅子の倒れる音がした。つばさは目を開け——るなり椅子から飛び出した。

「わっやばい見みつけた」

「逃がすかこのお！」

机の陰にかくれて脱走を計った男子部のマン研部員が、部室の後ろのドアめがけて脱兎だつとの如く駆け出した。追うつばさは愛刀村雨蘭丸の白刃をきらめかせて机を二つ三つ飛びこえる。

「待てこの！」

「ひええ」

ドアをあけて外へ逃げ出そうとするマン研部員めがけ、つばさは飛びかかりざま白木の木刀を幹竹割からたけわりに振り下ろした。

「うわあ!？」

振り下ろされた木刀が、途中でがしっと受けとめられる。

「えらい熱烈な歓迎だな」

目の前に来た木刀をとっさに真剣白刃どりよろしく拝おがみ取った沖田の横を、マン研部員が駆け

抜けた。

「お、沖田、おあとよろしく」

必殺の一撃をあっさり受けとめられたつばさが、沖田の両の掌にはさまれた木刀に力をこめた。

「貴様、何しに……」

「いまの二年B組のマン研だろ。なにをやつとるん、じゃ……」

沖田もすぐ額の前で受けとめた木刀を支える手に力をこめた。

「くぬ大切な時に戦力一人逃がしやがって。脱走幫助で殺してやる」

つばさが歯をくいしばって木刀を振り下ろそうとする。

「早まんじゃねエ……こら、人の話聞かんか」

木刀がぶるぶる震え出した。

「先に殺すてやる……」

「くくく……いつもこれだ……」

女といっても、北辰一刀流の有段者だという噂があるくらいだから、つばさの力が弱いわけがない。

「しゃあねえ……こっちもヒマねえんだ」

沖田は木刀を押さえた腕に力をこめた。気合をいれて、力まかせに木刀を右へ払う。つばさは全身の力をこめていた木刀を流されてもんどりうってつんのめった。



「おっと」

「何すんのよこのスケベ！」

倒れかけたつばさの体を抱きかかえた沖田が耳元に手短にささやく。

「探偵が動き出してる」

つばさはきょとんとして沖田の顔を見上げた。

「な……に？」

「平沢探偵だよ、この前、月まで連れてってくれた。いつまで抱かれてるつもりだ、俺はガリは好みじゃねェ」

「わ、悪かったあねェ！」

つばさはあわてて立ち上がった。ふと視線を感じて振り向くと部室の中の連中が一人残らずこちらを見ている。

「何見てるこら！ えと、十南<sup>な</sup>ちゃん、あとやっというて、すぐ戻る——で、話ってなによ」

「……………」

沖田は溜め息をついた。

「場所変えよう」

「となると探偵が女子部に来る理由はただ一つ」

女子部校舎の自動販売機コーナーの一角で、沖田は手にした紙コップのブレンドを一口も飲ま

ずに柱を背にして事情を説明していた。ベンチに座ったつばさは、口もきかずにココアを両手で持って飲んでる。

「SCFが多分、もう一度動き出してる。今度も狙いは同じはずだ。二度も同じ手使うほどアホな連中とも思えねえから、今度は少しは静かな手を使ってくるはずだろう」

つばさはココアからたちのぼる湯気をふーと吹いた。

「意外としつこいのね。あきらめたと思ってたんだけど」

「探偵の奴、学校の中まで覗きに来てたらしい。だからひょっとしたらSCFの連中、もう学校の中まで入ってるかもしれん」

「臨時教師とか、転校生とか？」

「そう……やけに話が早いな？」

「転校生、一人いるわよ」

「なに!？」

沖田はやっと口をつけたコーヒーを吹き出した。

「明日付で、あたしたちのクラスに一人……」

「……」

深夜の新宿・歌舞伎町も、最近は当局の締め付けがかなり厳しくなっており、一時ほどの活気はない。もっともこれも一時期だけのことで、ほとぼりがさめれば業者たちがまた活動をはじめ

め、夜の無い町や限界も考えずに突っ走る風俗営業が戻ってくるのはわかりきっている。事実、表通りから一步小路に入ってみれば、風営法などものもしない業者たちがいつもと変わらぬ活動が続けていた。

客引きの兄ちゃんや姉ちゃんの誘いを適当にあしらいつつ、平沢は裏通りから、知らなければ見過ごしてしまいそうな細い小路に入った。

都市開発などという言葉からとうにこぼれ落ちた歌舞伎町の中で、どさくさにまぎれて建築基準法などくそくらえとばかりに建てたような雑居ビル。外装だけは安っぽい化粧パネルやネオンでかざりたてであるが、中身はかなり年季の入ったボロビルである。

とつくに壊れて動かなくなり、張られた『修理中』の紙も大分色あせてきたエレベーターを横目で見ながらせまい階段を昇ると、鏡にステンドグラスで描かれた店の名前が目に入ってくる。『カウンター・ミラー』。はやっているパブではない。わずかな常連客と、噂うわさを聞いてやって来るふりの客を相手にしている、ごく小さな酒場である。

『べらぼうに的中率の高い占うらない師がいる——』

そんな噂が新宿一帯に流れてからもう何年にもなる。伝説やラブ・ストーリーには事欠かない新宿だから、ほとんどの者はとつくに忘れていたが、それでもたまに消えたはずの噂を聞きつけて来る者がいる。

長年使われて、かなり貫禄の出てきたステンドグラスのはめこまれたガラスのドアを開けて、平沢は『カウンター・ミラー』へ入っていった。



ビルの構造上、店内に窓は一つもない。スポット式の間接照明だけがぼんやりついているだけで、天井から下がっているほこりだらけのシャンデリアに灯は入っていない。

ウィークデイの夜なのと、特に空く時間を選んできたおかげで、客はあまり入っていないかった。平沢は、すぐ目当ての「占い師」を見つけた。

幹本沙織は、何カ月か前に平沢が来た時と同じ場所にいた。

よく磨かれてはいるものの、傷だらけになって弾痕らしいのも所々にあるようなカウンターの一番隅の目立たない陰で、オンザロックらしいグラスを手に入れている。

カウンターの途中でグラスを磨いていた無愛想なバーテンに、奥の棚に並んでいて真っ先に目についたカルヴァドスを注文して、平沢は占い師の隣に腰をかけた。

沙織は、焦点があっていないような妙に色っぽい瞳を平沢に向けた。くせのない長いつややかな髪が肩から流れおちる。

「また来たのね……探偵さん」

「覚えててくれたの？ そりゃ光栄」

平沢は、カットグラスにストレートで出てきたカルヴァドスをあげてみせた。

「ご一緒に、いかが？」

沙織は、肘をついた手でけだるそうに持っていたオンザロックのグラスをくいとあおって飲みほした。白い顔のまま空のグラスを平沢の方へ置く。平沢は片手で無造作にグラスに半分ほどカルヴァドスを注いだ。相手が減法、酒に強いことは先刻承知している。

「厄介事にかんばあい」

投げやりな口調で、沙織はグラスを上げた。

「とびっきりの美人に」

一口飲んだ沙織が、かすかに笑った。

「この前に来た時も、そう言ったわね」

「さあて、そうだったっけか。最近忙しいもんで細かい事覚えていられなくてね。姫君は元気で  
あらせられますかな？」

沙織は答えるともなしに笑って、グラスを一口飲んだ。

「変わらない……何も」

「変えてあげようか？ 今夜だけでも」

沙織は平沢に顔を向けた。表情に乏しかった瞳が、いたずらっぽいやつぱい輝きを含む。

「わたしは高価いわよ？」

「何でも、お望みのものを」

「それじゃ」沙織はグラスをゆらした。溶けかけた氷が涼やかな音をたてる。「明日を、連れて  
きてくれる？」

「明日を？」

平沢は訊き直した。

「そう。見たこともないような、未来を」

沙織は、グラスに三分の二は残っていたカルヴァドスを一息に飲みほした。

「ごめんなさい。忘れて。言ってみただけだから」

「見たこともないような明日ね……」平沢は空になったグラスにそえていた沙織の手をとった。

「出来る限りご要望にそうよう努力を……」

沙織はあっさり平沢の手を振り払った。

「今日はお仕事で来たんじゃないの？」

「目一杯カタいんだから」

平沢は肩をすくめた。

「はいはい、それじゃ先に厄介事片付けましょう」

平沢は声のトーンを一段落とした。

「色気のない質問で申し訳ないが、サイコ・クラッシュってのは何者だ？」

沙織は眉をひそめた。

「そう……念爆者まで出てきたの」

「ネンバク？　なんだ？」

「ひどいことになりそうね」

平沢が一瞬沙織の顔を見直すほど重苦しい声でそう言って、沙織は目を閉じた。

「念動力者の変種だけ……感情を、物理的な力に変えられるとしたらどうかしら」

「さてね」

超心理学パラサイコロジーなどという、日本では無視されているような分野にはまるきり素人しろうとの平沢は、気のない顔をしてカルヴァドスを沙織のグラスについだ。

「念爆っていうのは、特殊化した念動力の一種よ。早い話が、一点に念動力を集中して、瞬間的に解放するの」

沙織は、平沢の前で握った手をぱっと広げてみせた。

「ばあん。好きな所で、好きなものを好きなように爆発させられるわ」

「そりゃ大変だ」

平沢は煙草を取り出そうとして、やめた。——この姉さん、タバコ苦手だったっけ。

「火薬と起爆装置を持ち歩いてるようなもんだな。とんでもない奴だ」

沙織は苦しそうに笑った。

「そう……とんでもない、わね」

「爆発力は最大でどの程度いくんだ？」

沙織はカルヴァドスを一口飲んだ。

「人によるわ。念爆なんて能力持ってる人、めったにいないし……だけど」また一口飲む。「家

一つが消し飛ぶくらいは珍しくない」

「家一つね」平沢は考えこんだ。「手榴弾の二つか三つ分は軽くいきそうだな」

「メキシコで一九六七年ごろ、リトルピッドっていう小さな街のはずれで原因不明の大爆発が起きたことがあるの」



沙織は目の前でグラスを揺らしている。

「それも、その念爆とかの仕業か？」

「爆発物もなんにも見つからなかったけど……直径一五〇メートルのクレーターが出来たわ」  
平沢は絶句した。

「七八年のアリゾナ砂漠のゴーストタウンになりかけた街のそばでトーキング・ロックっていう百メートルもあるような大岩が粉々に砕け散った時は、州警察がかなり詳しい調査をしたんだけど、硝煙反応も何にもなし、ガイガーカウンターも反応せず、結局原因不明」

「キーラーが気に入りそうな能力だ」

平沢は残りのカルヴァドスを一気にあおった。

「生身の人間が、そんな芸当をできるとはね」

「できるはずないわ」沙織はグラスを持った両手に額をつけて目を閉じた。「破壊だけの能力なんて……あるはずない」

平沢は目をしばたたかせた。

「言ってることの意味がよくわからないが……」

沙織は目を開いた。思いつめたような顔を平沢に向ける。

「超能力って、いろんな種類があるわ。いろんな能力が、いろんなレベルであるけど——念爆だけは違うのよ」

「違うって、何が？」

「念爆だけが、後天的に変化してできるの。元からある能力が、いろんな事で変化して、制御しきれないような破壊だけの力に……」

沙織は、ひどく自棄的に笑った。

「言葉がきれいすぎるわね……念爆って、ねじまげられた超能力なのよ」  
「ほー」

沙織は視線を戻した。

「はじめから念爆なんて能力持ってる人は、いないの」

翌朝、星南高校女子部――

つばさ、ノブたち二年二組の女生徒たちは、担任の教師から、小柄な転校生を紹介された。教師に促されて自分の名前を黒板に書きつけた和紗結希は、無表情なまま軽く会釈をして、教室の隅に指定された自分の席についた。

## ACT・3 行動開始

「さあ困った！」

額を四拍子でシャーペンのお尻でたたき、ついで霧野深雪きりのみゆきは机の上に拡げていた某芸能情報誌のクロスワードパズルの縦の七番目のヒントを、持っていたシャーペンではじいた。

「ね、つばさ、『はじめて大西洋を飛び越えた史上最も有名な女性パイロット』って……」

隣の席のつばさに助けを求めようと、見もせず彼女の二の腕をシャーペンでつついた深雪は、まったく反応がないのに気づいて顔をあげた。

「どうしたの？」

いつもパワフルなつばさが、なぜか落ち込んだように静かである。しおらしく机に肘をついた手の甲に顎あごをのせ、肩ごしにぼんやりと後ろを見ている。

「ねえ……つばさ、つんつん」

擬音つきで、今度は指で背中をつつく。やっと気がついて、つばさはすぐ深雪に顔を向けた。

「なに、姫？」

「あのね、大西洋はじめて横断した……何見てたの？」

つばさはあわてて首を振った。深雪の手もとの本を覗き込む。

「なに？ クロスワードパズル？ 9の縦のヒントなに」

「ごまかすな、こら！」 深雪は広げた雑誌の上に両腕をおいて記事をかくした。「白状しろオ、何見てた」

——沈黙。つばさは、シリアスな顔でじつと深雪の顔を見つめる。妙な気配を感じて、深雪はわずかに身をひいた。

「姫えん……」

突然、つばさは深雪の首筋に手をはわせた。

「最近一段とかーいくなっちゃって。ホレてしまいそーよん♡」

つばさがしなをつくって、深雪の首筋に腕をからませた。

「今晚、空あいてるん？」

「ななな何考えてるのつばさ……」

一瞬、あっけに取られた深雪は、肩をぶるぶる震わせながらつばさを見た。半ば唇をひらいたつばさの顔が、深雪に急接近する。

「愛しちゃったの、姫……」

「やめんか馬鹿ものお」

とっさにシャーペンを逆手に握りなおした深雪は、先をつばさの背中につきたてた。

「うぐ」

背中に杭くならぬシャーペンを刺されたつばさのけぞる。

「どーだ参ったか」

胸の前でこぶしを握ったつばさに、深雪がシャーペンをかざした。

「は、灰になる」

「こら、こらこらこらこら！」

背中を押さえて悶もたえるつばさの首に、深雪は両手をかけた。軽く絞めてぐらぐら揺さぶる。

「話とばそーたア太さてエ奴だ！ 何考えてる、吐けこのォ！」

「ゆゆゆ揺すらないでええ！ わわわかった、話すはなす！」

「よろしい」手を離れた深雪が、つばさの肩に手を置いて席に座らせる。「たっぷり一ページ分も遊んだおとしまえ、つけてもらいましょう」

「へえ」

うなだれて考えこんでいたつばさは、黙って自分が見ていた方向を肩ごしに指差した。教室の後ろ、廊下側の隅――

「ノブがどうしたの？」

深雪は、つばさの斜め後ろの席で、今までの騒ぎも無視して静かに編あみ物なんぞしているノブを見てちょこんと首を傾かしげた。

「姫のその鈍さが好き……」

つばさは気が抜けた顔で机に突っ伏した。  
「編み物？」

深雪が重ねて訊く。ノブは棒針二本を持って、愛おしそうな顔で柔らかい白の毛糸を編んでいる。つばさは突っ伏したまま、力なく顔を深雪の方に向けた。

「そーゆー事にしとく」

「へえ……ね、何編んでんのかな？」

「決まっているでしょ。セーター。パターンよ」

「プレゼント？」

つばさはうなずいた。

「へえ」深雪がうれしそうな笑顔を見せる。「挫折してマフラーにならなきゃいいけど」

「いいんだけどね」

つばさは相槌を打って、体を起こした。視線を戻す。見ていたのはノブではない。その一直線上、視線の先に、所在なげに教科書を広げ、ペンでチェックしている転校生がいる。

ショートカットの黒髪の下の瞳は、ごく普通の転校生のようにおとなしい。行動もごく控え目で、昼食後の昼休みの今まで、見ても不審なところなどない。

「沖田のバカの勘違いかしらね」

つばさは、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。大体、視線の手前で安らかな顔で編み物をしているノブを見ると、SCFのエージェントなどという事を考えるのがアホらしくなっ

くる。

「はーあ」

予鈴よれいが鳴った。溜め息をついて、つばさは机の横のスポーツバッグを取った。

「更衣室行こ……。次、体育でしよう」

同じころ、男子部二年B組の男ども三人も、悩んでいた。

「悩んでんのは俺だけだアホ！」

「オレも悩んでるよ」

「あっしも悩んでおりませ」

鉛筆を鼻の下にはさんでいた真田は、目の前の方眼紙に黒丸を描いた。

「四・三と来ましたな」机に両手をついていた榊が、耳にはさんでいたシャーペンをとる。「なかなかアジな真似をなさる……。さればこんな手でどーだ」

「うつく……」

榊は真田の作った四連を白丸で止め、ついでに飛び四四を作る。

「さーチェックメイトだ」

「のどかに五目並べなんぞやってる場合かあ！」

「負けたからって騒がないの。ほれ、どーだうりうり負けを認めろ」

「コーヒーが賭かってんのに、そー簡単に負けられるか。どっかに四出来てないかなあ」

「出来てるわけないだろ」

「あのなあ」

沖田は椅子に沈みこんで額に手をあてた。

「ウソでもいいから悩むふりしたらどーだ？ SCFのエージェントがお前の彼女のクラスに潜りこんでんだぞ」

「SCFかもしれない女の子でっしやる」

真田は負けを認めた印に榊に両手を上げた。

「折しも次の現国は自習とか。転校生、見に行ってみる？ 二の二の五時限目は体育だそーだけど」

「おのれは何を考えるとんじゃ」

「和田の情報によると創作ダンスのテストやるそーよ」

「行こう」

沖田はあっさりと立ち上がった。真田は頭を抱えた。

「あかん……ヤブヘビった……」

あわてて腰を浮かした榊が、沖田を止めようと肩に手をかける。

「ちょ、ちょい待ち沖田、本気で女子部に忍び込むつもり？」

「言い出しっぺはそちらの忍びの者でござるぜ。更衣室が見えるいい場所見つけたって言ったろ」



「見つけたのはシャワールームと風呂であって、まさか昼日中にやるなんて、あわわ」  
「何の話？」

耳ざとく話を聞きつけた南部が首を突っこんできた。真田があわてて口に手をあてて言わ猿のポーズを取る。

「ちよーどいや南部、よく来た」

むんずとばかりに沖田は南部のワイシャツの襟首をつかんで引き寄せた。

「へあれー、手荒なことはおやめになってエ」

「次の時間、俺たち三人消えるから何ぞあったら代返頼む」

「代返？ 何やるんじゃない」

「おあとよろしくー。オラ行くぞ」

「ひえー」「本気かよお」

南部に問い返す間も与えず、沖田は袖と真田をひたたてて教室を出ていった。

「めっかったらまず外出禁止だ」女子部校舎裏の植木の中を、目立たないように校舎にびったりついて移動する袖がつぶやいた。「おーこわ」

「外禁くらいで済むかなあ……自室謹慎食らいそーでこあい」

「いや、無理矢理誘われたとゆーことにすればなんとか」

「てめェらなあ！」勝手なことを吐かす袖と真田を、振り向いた沖田がにらみつけた。「事は重

大なのだぞ！ もしSCFがむぐや」

喚き出した沖田に、榊と神田が飛びかかって押さえつけた。真田がゲリラの要領で声をたてないよう口を押さえつけながら、

「猛り狂うんじゃない！ んな所でバレたらどーすんだ！」

「このヒマラヤ杉を三階まで登り、そこから窓伝いに校舎の西側へ出る。そこで二階の渡り廊下の屋根を伝って体育館の壁にはりついて、開いてる窓さがして……どったの？」

真田は、げんなりしている榊と沖田を見て説明をやめた。

「いや……どーでもいいけどな」

女子部の校舎にもたれて話を聞いていた沖田が三階の窓を見上げた。

「お前、そーゆー事やって遊んでるのか？」

「最近よく消えると思ったら……」

「ご冗談を」真田は軽く手を振った。「授業時間内だから廊下側には誰もいねーたあ思うけど、もし見つかったら見捨てていくから素直に犠牲になるよーに。んじゃお先に」

十三代目戸沢白雲斎の自称に違わず、真田は四階建ての校舎より高いヒマラヤ杉にするすると登りはじめた。

「……山岳部に顔出しといてよかったぜ」

後について、沖田が太い枝に足をかける。

「お、落ちたら命がない」

どん尻の榊が危なっかしく枝を登っていく。三階の窓にはりついて、閉じられた窓の棧さんと梁はりを頼りに移動を開始したところで、真田が頭下げろの指示を出した。

「どったの？」

「どっかの先生が来る、隠れろ」

「隠れろったって、どこに」

沖田と榊が足元を見回す。高度七、八メートルの三階、窓の外に隠れる場所があるはずがない。榊が蒼あおくなる。

「どーすんだよ！」

「喚くな。バレる」

真田は手慣れた様子で腰をおとして窓枠にぶらさがった。沖田らも真田に倣ならって窓枠にぶらさがる。

「お、落ちるおちる」

「黙ってる、バカ」

「まだ通り過ぎんか、落ちたら命が」

「骨折るくらいで済むよ、骨は拾ってやる」

「よーし行き過ぎた、行こー」

よっと体を持ちあげた真田が、横歩きに動き出す。

「どこぞを思い出すな」

ほうっておかれているはずなのに、不思議とほこりのない通気筒の中を四つ足で動く真田が言った。続く沖田が、

「ミサイルなんか来るわけない。安心しろ」

「いやーわからんよ。侵入者くせものよけに……」

「何の話？」

しんがりの榊が訊いた。真田が答える。

「ちよっと昔話。……あ、屁へが出る」

「なに？ ちよちよと待てこの」

「出た」「うわ、やりやあった、この！」「うわ、押すな、わ、わ」「うわ、すげ……」「早く行けこの！」「い、息が詰まる」

「見えるか？」

「見えるみえる。わー、姫ってプロポーションいいんだ」

「オレにも見せろ」

「あ、押すな、見えるから」

体育館下、体育倉庫から裏のボイラー室につながっているスチームパイプ点検用らしい半地下

式の細い通路は、ほとんど忘れ去られていた。体育倉庫側の入り口は壊れた跳び箱と古マットの山で塞がれており、ボイラー室側のドアは何年か前の体育館改築の際になぜか壁に塗りこめられ、ボイラー室の伝説となっている。

この、パイプだらけで明かりもなく、すれ違うのがやっとなという通路が去年の文化祭で見えられた。よりによって見つけたのが体育館ディスコ大会の飾りつけで配線のため電線の束を持ってうろついていた男子部の電気研究部とワンダーフォーゲル部のスタッフだったため、部外秘の穴場として今に伝えられている。通気口のパイプを通過して出入りが出来るのと、体育館の壁の下の通気用スリットから中が見えるので、その存在を知ったヒマ人が時々もぐりこんでいるらしい。一説によると更衣室につながる穴もあるというが、定かではない。

「で、転校生ちゅーのはどなたでっかいなーと」

床と同じ高さのスリットから、カラフルなレオタード姿の女生徒たちを眺めていた真田は小さな双眼鏡をポケットから出した。

「御用達を着てる奴だろ」

遠視の沖田が眼鏡をとって目をこらす。体育服同様、レオタードも学校指定のものがあるが、高校二年生も終わりになってくると、好き勝手なものを着て来るようになる。

「おー、小牧さん見っけ」

「わ、見せろ」

榊は真田から双眼鏡をひったくって目にあてた。プリズムの型がわかるような、ごつい金属製

である。

「おー、いたいた……倍率高いなー、これ」

向こう側の壁ぎわで、ひとかたまりになっているグループにノブが混じっていた。視界の中に、ちょうど全身が入る。学校御用達の青いレオタードの上にジャージをはおっている。

一番目のグループが、体育館の中央に出てきた。五人のグループがポジションをとって離れる。持ち込んだらしい大型のステレオカセットから、原由子の『公私御多忙申し上げます』の軽快なイントロが流れ出した。

「探さないんなら早く返せ！」

「わーってるよ」

真田に言われて、榊は未練を感じながらノブを視界からはずした。ゆっくり右に移動する。

「あ、いた……あれかな」

学校指定のトレーニングウェアを身につけた、見慣れない女生徒が少し離れた所で壁にうずくまっていた。

「沖田、ノブから右にいったところの……」

「見せろ」

沖田の向こう側から、真田が双眼鏡をひったくって言った。外から射しこむ光に目のまわりを浮かび上がらせた沖田は視線を動かさない。

「あいつ……だな。見覚えがない」

「あのー」榊は沖田に疑わし気な目を向けた。「お訊きしますけど、姫と編集長とノブ以外で、この組で知っている人って、沖田いる？」

「……悪かったな」

二年二組ではその三人以外名前を覚えていないのを思い出して、沖田は眉間にしわをよせた。真田を肘でこづく。

「確かてめェ、この前の映画撮影の時に顔と名前全員覚えてたって言ってたな」

「言った。出席簿順に石井さんから渡部女史まで全部言えるぞ」

「その中に、彼女いるか？」

真田は双眼鏡から目を離して沖田と榊に顔を向けた。うなずく。

「いない。一人でいるし、レオタード着てないのは転校生でテスト受けないからだろう。多分あれだ、転校生」

「何てったっけ、名前」

「和紗結希」

沖田は、昨夜つばさから聞いた名前をその顔に合わせてみた。少なくとも、エージェントには見えないが――。

「違うんでないかい？」真田は沖田に双眼鏡を渡した。「スパイにしちゃかわいすぎる」

「あ、言える」榊が同調した。「けっこうかわいい顔してるよ。あんまり強くなさそうだし、あれやっぱSCFじゃないんじゃない」

沖田はうつむいて頭を押さえた。

「すると何か。かわいけりや敵じゃないってのか」

「敵だったらもう少し悪役らしい顔してるんじゃないかと……」

「大した選択基準だよ。だったらつばさはSCFの悪役か」

榊と真田は顔を見合わせた。肩をすくめる。

「個人的感情持ち込むのよくないと思う」

「てめエが持ち込んでんだろが！」さすがに声のトーンは落として、沖田が榊に牙をむいた。

「かわいけりや敵じゃねエってな、どーゆー了見だりようけん」

「んなもん一目見れば……」

「確信を持って言うな……ん？」

榊の肩ごしに通路の奥の闇を見た沖田が目を細めた。ひょうと口をとがらせる。

「先客がいたぜ」

つられて榊と真田が沖田の視線を追いかけた。闇夜のカラスが見えるゼイと豪語している真田が影を認める。思わず声をあげかけた。

「探偵!？」

「た、たんでー？ 平沢氏？」

「ほーらバレた。でーておーいで」

沖田が軽く指招きする。一つ奥の壁のスリットから射しこむ光の中に、ゆらりと長身の人影が



立ち上がった。

「お前ら、どうしてここに来た」

「あ……」沖田はこけた。「セリフとられた」

「探偵さんこそ、なしてこないな場所に？ 覗きにしちゃえらい本格的に装備してまん」

珍しく黒いジャケットにスターライトスコープを持ち、肩にはライフルでも分解して持ち歩いているのかカンバス地のバッグまでかけた平沢を見た真田が、わざとらしく腕を組む。平沢は苦い顔をして咳払いする。

「見ての通り……覗きだ」

真田がほおと口を丸くした。沖田が平沢にかみつく。

「信じられるかアホ！」

「レオタードくらいではだまされない」

したり顔の真田がつけ加えた。

「当然だバカ！」

「せめて更衣室かシャワールームでなければ信じられない」

「そうだ白状しろ探偵！ 狙いは更衣室かそれとも——ちがう！、乗せるな真田！」

「自分で言ったろ、俺はだまされないうって」

「喚かないように」

低い声で横目をくれて沖田と真田を黙らせて、榊は平沢に視線を戻した。

「で、探偵さんがここにいてってことは、あの転校生がSCFと見て間違いないわけね」

「だとしたら——」探偵は表情も変えない。「どうする？」

言われて三人は顔を見合わせた。

「手もなしに鼻突っこんでくるんじゃない」

言い捨てて、平沢は歩き出した。そのまま三人の横を歩き過ぎようとするその裾すそを、沖田がつまんで引きとめる。

「勝手に退場しないよーに」

立ち止まった平沢が振り向いた。三人の顔を見る。沖田が何か言いかけるのを、平沢は手を上げて止めた。

「今回はやめとけ。過激派学生がどうこう出来るレベルじゃない」

「どーゆー意味だよ！」

沖田が突っかかる。平沢はなげやりにジャケットのポケットにスコープを放り込み、両手をズボンのポケットに突っ込んで壁にもたれかかった。

「正直な話、こっちも困ってたんだ。正面切った誘拐作戦ならいくらでも動きようがあるが、こんな地味な搦め手からじゃ直接手を出すわけにいかない」

「えらい下手したてに出とりまんない」

「いっそのこと狙撃してやろうかとも思ったんだがね」平沢はスリットごしに、和紗結希のいる方向を指した。「相手があれじゃな」

女の子が撃てないという意味ではない。サイコ・クラッシャーを狙撃しても、弾丸そのものはじき飛ばされるから無駄なのである。だが沖田はそうとらなかつた。

「ずいぶんと甘いすな」

平沢は肩をすくめてそれに答えると、三人に背を向けて歩き出した。立ち止まる。

「一つだけ忠告しといてやる。不用意に近づかない方がいい。あいつは爆発物のプロだ」

「ハツパ屋さんですか」

訳のわからない事を言つて真田が納得する。

「そういうわけだ」

平沢は背を向けたまま、あいさつ代わりに軽く手をあげて歩き出した。

「不用意に手を出すと吹き飛ばされる。じゃあな」

黒いジャケットが闇に溶けて見えなくなるまで、そう時間はかからなかつた。

平沢が見えなくなつてから、沖田は大きく息をついた。

「爆弾の専門家ね……」

「そうは見えないが」真田がもう一度、双眼鏡のピントを結希にあわせた。「えらい危険なコだね」

「部屋にダイナマイトでも持ち込んでるのかなあ」

「手引書マニュアルがありゃ小学生だって理科室もぐりこんで爆弾作れる。もっとも、SCFがらみならとつくに持ち込んでるか」

「手榴弾とか？」

「もっと伝統的なやつ。はみがきのチューブの中にプラスチック爆弾とか、火をつける爆発する紙とか、液体火薬入りシャンプーとか」

「スパイ映画ですな」

三人は力なく笑った。

「どこに行ってたんだよ」

自習時間を十分ほど残した教室に、意気消沈した顔で戻ってきた三人を見つけた南部がエロ本を見ていた輪から離れた。

「今度来た女子部の転校生見てきた」

気のない声で返事をした沖田は、自分の席にどっかと腰をおろした。

「なんて事を……。で、どうだった？ ブス？」

「いや、そーゆーわけでは」

「わりとかわいかったよ、沖田好みで」

まるつきりセリフを棒読みした榊が、机に突っ伏した。南部が不思議そうな顔をする。

「じゃ、また何でそー景気の悪い顔してんだ？……先生にでも見つかって？」

「十三代目戸沢白雲齋殿がご一緒だぜ。そんなドジやるか」

「んじゃまたなんで？ 鬼編集長にでも出くわしたの？」

「つばさは着やせするタイプだ……」

ぽろっと言った沖田は、はっとして顔を上げた。南部——のみならず榊と真田までもが妙な顔で沖田を見ている。

「ほー」榊が面白そうな顔をしてうなずいた。「意外と、見る所は見えてらっしやるよーで」  
「しまった」

沖田は頭を抱えた。あわてて立ち上がる。

「和田ーっ！ 和田はどこで遊んでる!？」

「おーお、必死で話題変えよーとしとるわ」

「やかあしい！」

真田を左ストレートで黙らせた沖田が、和田を探して教室中を見回す。南部が階下の方向を指差した。

「さっき写真部に行くとかいって出てったけど……」

がらっと教室の前のドアが開いた。教師でも入ってきたかと、一瞬教室の中がシーンとなる。

「おどかさすんじゃねーばかやろー」「あーびっくりした」

罵声ばせいを浴びて、箱を抱えた和田が入ってきた。教卓に陣取る。

「騒ぐなさわぐな。さーて知っている人は知ってるが知らない人は全然知らない転校生。女子部の二年二組に、夏休み明けの小牧のノブちゃんに続いてまた転校生がやってきた」

ガマの油売りよろしく、和田が口上をはじめた。何だなんだとヒマ人どもが寄ってくる。

「我が新聞部の偉大なる情報網によると、こいつが飛びっきりのかわいこちゃんときた！ 急拠取材に飛び出した我が新聞部と写真部の突撃アクションカメラ班合同取材による特写！ 転校生和紗の結希ちゃん生写真集八枚五百円。さー買え！ 今定着液からあげたてのヌレヌレのほやほや！」

「あた……」

沖田ら三人は頭を抱えた。

行動が素早いことと、その特攻精神には定評のある新聞部と写真部である。美人で知られる、姫こと霧野深雪の水着写真は一年最初の水泳の直後に出回ったし、小牧ノブの場合は転校後三日でスナップ写真カラー五枚組が出た。今回は何と転校初日というスピードである。

「どーしょーもねエ奴らだ」

沖田はのろのろと立ち上がった。あつという間に商売の始まった教卓へ動き出す。

「はーい毎度、部費に協力おありがとうござい——と、まからんぞ。八枚組五百円でも採算ギリギリなんだ」

「おい和田」

「あれ沖田も買うの？ 硬派の看板おろすんだ」

「ずいぶんともうけてるよーで」

「手間入れりゃそーもーからん。はい五百円」和田はビニール袋にパックした写真を沖田に渡した。「まじど」

「ちがうー。買いに来たんじゃない」

沖田はあわてて和田が持ってきた箱の中にパックを放り込んだ。

「ほお、買いにきたんじゃない？ んじゃ商売のじゃまだ、はよ消えろ」

「訊きたいこと訊いたらすぐ消えるよ。この写真の彼女の部屋、何号室だ？」

「おー、手順はしよって直接夜這いかけるか」

「殺すぞてめェ！」

「443号室よ。桂木荘の」

「同室者は誰だ？」

女子部二年二組は全部で三九人いて、三人部屋だから——と沖田が暗算しながら訊くと、和田はあっさりと答えた。

「彼女一人部屋だい」

「一人？」

「桂木荘、ちよーど部屋が埋まっててねー、閉めてあった部屋一つ開けたそうだ。三人部屋に一人で入ってる。夜這いするなら絶好の環境よ」

「夜這いじゃねェってるのがわからんか……」

「んじゃゴーカーン？」

「殺すぞてめェ！」

「これ買わない？ 新聞部の⑧特別文書『夜の桂木荘レポート』VOL・I、Ⅲまで出とります」

が

「いらんての！——IVはまだ出んのか？」

「鋭意編集集中、乞う御期待、はい」

和田は沖田に手を出した。

「なんだこの手は？」

「情報料」

「つけといてくれ」

群がる野郎どもをかきわけて、沖田は席に戻ってきた。ヒマそうな顔で窓の外を見ていた榊が顔を向ける。

「何訊いてたの？」

「転校生の部屋番号。けーどなあ」

よっと椅子をずらして腰をおろした沖田は、さらにもう一段腰をずらして両足を机の上にあげて頭の上で手を組んだ。

「確証あったって動ける相手じゃないしなあ」榊が情けない顔で両肘をつく。「沖田、どーしよお」

「俺に訊くな俺に！」

沖田はタバコを探してブレザーのポケットに手を入れ——教室内である事を思い出して、窓の外の、冬の高い青空に目を向ける。



「マジで443号に夜這いかけるっきゃねエかな」

今年度に入ってから、ずっと閉じられていた扉の上には、女子寮らしい飾り文字でルームナンバーが示されている。つばさは、複雑な顔で443の数字を見上げていた。

決心したように息をついて、つばさは443号室の扉をノックした。

返事はない。つばさは扉のノブに手をかけた。鍵穴から室内が覗けるような前時代的なカギは、かけられていない。

まだ、夕食前である。外出時間は過ぎているから、学内をうろついているのでなければ住人は部屋にいるはずである。

「和紗——さん？」

声をかけながら、つばさはおそるおそる扉を開けた。もう外はすっかり暗くなっているのに、部屋の明かりはついていない。

「……いるの？」

かすかに部屋の空気が動いたような気がして、つばさは部屋の中に足を踏み入れた。

しばらく閉められていた部屋に特有の、ほこりっぽいにおいがまだ残っている。つばさは照明のスイッチを探してドアの向こうの壁ぞいに手をあてながら、暗い室内に転校生の姿を探した。

「あたし、鳴海つばさ……いるんでしょ？」

突然、一陣の風がつばさに吹きつけた。ドアがボタンと閉じる。ワンテンポ遅れて、スイッチ

の入る音とともに鬼火のような蛍光灯の子備灯の青白い灯ひがつく。はっとして横を向いたつばさの目の前に、スイッチに手をあてた転校生の姿がマネキン人形みたいに浮かび上がった。

大分古くなった天井のすりガラスごしの蛍光灯が、二、三度瞬いてから室内を白い光で満たした。思わず息を呑んだつばさに、和紗結希は口元だけの微笑を浮かべてみせた。

「あーびっくりした」つばさは胸に手をあてて息をついた。「おどかさないでよ、もう」

答える代わりに軽く眉をあげた結希は、つばさに背を向けて、窓ぎわに二つずつ並んでいる四つの机の一つへ行った。そこだけ散らかっている机の前に腰をおろし、椅子をまわしてつばさに向きなおる。

「あ、あたし、あなたと同じクラスの鳴海つばさ。知ってた？」

結希はうなずいた。一つだけメイクしてある二段ベッドの下段を手で示す。勧めすすめられるままに、つばさはベッドに腰をおろした。あらためて部屋の中を見回す。

見慣れた、自分の部屋と同じ構造なのに、ひどく殺風景な部屋に見えた。何もない。

「一人で、淋さみしくない？」

結希は嗤わらって、ゆっくり首を振った。

「まあ、また四月になれば部屋替え、あるしね」

悪いことを訊いてしまったような気がして、つばさはあわてて言葉を重ねた。一瞬、うなずいたように目を伏せた結希は、肩ごしに振り返って窓の外を見上げた。

「クラス替えて進路別になるけど——何見てるの？」

つばさに視線を戻した結希は、机の前の窓に手をのばした。軽く手をひねって窓を開け放つ。セントラルヒーティングのチームで暖かかった室内に夜の冷気が流れこんできた。

「なに？」

つばさが、机に手をついて首をのばす。ガス灯風の街灯に照らされた、壊れた噴水のある、きれいな中庭が一望できる。レンガの小径や古いづくりのベンチなどがあるのでデートコースに最適とされているが、女子寮の真正面という場所のため、ここで堂々と逢い引きするような猛者は滅多にいない。

「——庭、見てたの？」

つばさは結希に訊いた。結希は黙って空を指差した。

「うえ？」

つばさは窓の外を見上げた。

部屋の明かりが消えた。よく冴えた夜空に冬の星座が瞬いている。

「星見てたの？ うわー、ロマンチスト」

東京郊外といっても、市街地で明かりが多いからそれほどよく見えるわけではない。久し振りに見上げた星空に、つばさは月—地球間のシャトルで見た宇宙を思い出して、ぞっとして結希の顔を見た。

星明かりに浮かぶ無表情な目がつばさに向いている。SCFの超能力セクションがあるという月から来たのなら、つばさが見たのと同じ宇宙を見ているはず——

つばさの不信感を読み取ったように、結希は目をそらした。椅子から立って、明かりをつけに行く。つばさは目を落とした。

「――？」

地学の資料集、日本史の教科書のカラーページなどがファッション雑誌などと一緒に机の上に脈絡もなく拡げられている。一番上には白紙のルーズリーフ、欄外には無意識に描いたような少女マンガタッチの女の子の横顔――

ノブに似てる、と思ってつばさは本題を思い出した。途端に白い手がルーズリーフを裏返す。見上げると、困ったような顔の結希と目があった。

「あ、あの、話があるの」

ちらっと見たいたずら描きから、編集長の頭で画力を推定しながらつばさは切り出した。

「今、うちの新聞部でマン研と組んで増刊号出すんだけど、割り付けミスしちゃって四ページまるごと空<sup>あ</sup>いちゃったの。半分はなんとかあったんだけど、見開きの二ページ頼めない？」

結希は驚いたように目を見開いた。つばさは、ここぞとばかりにたたみかける。

「前の学校で美術部やってたんでしょ。イラストエッセイでも四コママンガでも何でもいいから」

編集長の地位を利用して、事務室の書類はできる限り調べてある。目をそらしてしまった結希につばさは両手を合わせた。

「お願い！ もう美術部もマン研も総動員しちゃって頼める人いないの」

困り果てたという顔で、結希はつばさから離れた。空いている方のベッドに腰をおろして考えこむ。

「お願い！」つばさはさらに迫った。「引き受けてくれたら何でもする！ 画材、足りなかったらこっちで揃えるし、必要な助手もつける！」

結希はゆっくりとつばさの顔を見上げた。もう一度顔を伏せる。

「お願い！ 助けると思っ

やがて顔を上げた結希は、左手でOKサインを出してうなずいた。

「うっわありがと、助かる！」

半分は本音で、つばさは結希の両手をとって揺さぶった。

「じゃ、明日までに下書き描いて見せてね」

バイバイと手を振って、つばさは443号室のドアを閉じた。

「ふー」

張りつめていた神経が一気にゆるむ。つばさは音をたてないようにドアにもたれかかり、汚れた天井の蛍光灯を見上げた。

相手の正体を知るには、身内に巻きこむのが一番手っ取り早い。とっくに最終締め切りを過ぎた特別号に穴があいた時に真っ先に頭に浮かんだのが、前夜沖田に会ったその足でもぐりこんだ事務室の転校生の資料だった。クラブ活動等の欄に美術部、趣味イラスト。女子部の美術部に、

和紗結希はまだ近づきもしていないが、うそを書いてあったわけでもないらしい。

「さてと……」

なんとなく胸のつかえを感じながら、つばさは歩きだした。SCFのエージェント（かもしれ  
ない）が相手とはいえ、演技づくで話をするのは気持ちのいいものではない。

「まア、相手が本物ならしゃあないか」

## A C T ・ 4 首都高速追跡戦

厚木、米軍基地。関東近海に米第七艦隊の機動部隊が来ているため、日没後になっても艦載機の群れが飛び回っている。太平洋側から市街地を飛び越えてきたトムキャットの四機編隊が、夜間離着陸訓練のために夜の基地にライトで浮かびあがっているB滑走路めがけて最終進入に入った。

管制指揮所のあるビルの後方、昭和三〇年代初頭に建てられたため外観は相当くたびれているものの、内部は電子機器とその付帯設備が詰まっているため基地内で一番高価たかいといわれる情報集積センターの地下。ベトナム戦争当時拡張に拡張を重ね、アツギ地底都市の異名をとっていた地下センターは、メガトンクラスの核なら充分シェルターとして使えることもあってベトナム戦終結後もいろいろなセクションが入っていた。

第七艦隊所属の潜水艦群との極超長波通信を行う通信室、CIAやDNAの支所をはじめとして、NORADが統括している軍事衛星のデータをリアルタイムで解析するコンピューター室、

まだ、実戦には一度も使われていない日本列島のモデルがあるシミュレーションルーム。

そしてこの地下センターの一角に、NASA関連の、軍に顔が効く政府機関の支部ということでSCFの支所の一つがあった。

将校クラスになれば、SCFの名くらいは知っている。しかしその正体を知る者は、佐官以上の階級を持つ者でも数少なく、全容を把握している者は誰もいない。

分厚いコンクリートと電子機器に守られた地下要塞の一室、衛星回線を通じて衛星軌道上のブーサーチ、あるいは月の裏側にあるルナベースと直接交信できる設備まで備えた情報センターのブースの一つで、ジルベスター博士は、調査班のチーフである日系三世とディスプレイに向かっていた。

「今度の検出は楽ですよ」

昔、西海岸で無制限クラスアンリミテッドのエアレーサーをやっていたC・マツキというチーフは、軽い手つきでキーボードをたたいた。

「スターボウ部隊の少尉自らがセンサーを持ち歩いて有効半径内レシジョンにターゲットを入れてくれますからね。これが転校初日のデータです」

暗いブース内のディスプレイに、いくつかのデータ表とグラフが浮かび上がった。

「ご覧の通りです」

「むう」

博士は唸うなった。



「右がカズサ少尉の指数、左がノブ・コマキのものですが……測定期間の空白は半年にもなっていないのに、こういう事はあるんですか？」

博士は答えなかった。データから目を離さずに腕を組む。

「十三時から十四時のデータが抜けているな？」

「その時間は確か……」

マツキはジャケットのポケットからしわくちゃのメモの束を取り出した。

「体育実技です。センサーは身につけられるほど小さくありませんからね。時間がなかったので、学生カバンに仕込むくらいの小型化が精一杯で……」

「なるほど」博士はあらためてデータを見た。「しかし……」

和紗結希のESP指数は、一三〇前後でほぼ安定している。早朝と午後で振幅の最大幅はプラスマイナス六以内に収まっている。

対する小牧ノブの指数は、以前の測定からは信じられないような数値を示していた。

「測定ミスではないのだな？」

博士はマツキに確認した。マツキは結希のデータを軽くはじいた。

「この数値が丸ごと間違っているのでなければ」

つまり、センサーは正確な数値を示していることになる。

ノブの指数は、ほとんど数値に出ていなかった。ESP指数が一〇以下になると測定限界の下限を割るため測定不能の結果が出るが、午前中はほとんど結果が数値になっていない。わずかに

午後になって一〇と一一が一度ずつ測定されているだけで、あとはすべて測定不能を示すラインマークだけが並んでいる。

「彼女、超能力を失いでもしたんですか？」

「わからん」

博士は首を振った。

無重力状態とはいえ、スペースシャトルをあのスピードで振りまわすのに使われたサイコキネシスをESP指数に直すと、現在使われているスケールをはるかにオーバーしてしまう。それが現在、彼女の指数は普通人とほとんど変わっていない。

「何もなしに、これだけ急激に能力が失われた例は今までにはないが……わからん。意識的に超能力をおさえつけたのならともかく、これだけ数値が落ちると……自然消滅でも、こんなことはありえないが……」

「珍しいですね、ドクターがわからないというのは」

博士は苦笑した。

「わからん事だらけだよ、ESPというものは。年を重ねるほど謎が多くなる」

「では、ぼくはこれで」左腕のごついナビタイマーを見たマツキがスツールから立ち上がった。

「ちょっと大捕物がありますので」

「色々を持ち出しているようだな？」

マツキは、小牧ノブのESP測定にハイマットのモデル実験機を飛ばした男である。それが最

近、SCFの地上部隊で厚木を根城としている作業員を集めて、在日米軍から色々と機材を借り出して何事かたくらんでいるらしい。

「何、ただの虫取りですよ」

ニヤリと笑って、マツキはブースから出て行った。

平沢は、寒々とした星空の下、愛車CB1100Rで高速一号線を北上していた。

「まったくこの寒いのに、英車ってのは肝心かんじんなところでおかしくなりやがるから」

フルフェイスのヘルメットの下でぶつぶつ愚痴ぐちをたれながら、平沢は夜の冷気を切り裂いていた。フルカウルだから風をまともにはうけて走るわけではないにしても、とにかく寒い。

平沢は、好き好んでCB1100Rをこの寒空に乗り出したわけではなかった。モーガンプラズ8が入院したのである。

平沢のモーガンは、ロンドンの南のケーターハムのそばにある小さなチューナーに持ち込んでいじくりまわしたものである。ローバー製のエンジンとターボチャージのついでに取り換えたウエーバーの四連装キャブレターとの相性があまり良くないらしく、年を越してからエンジンの吹けがめっきり悪くなった。

一度、事務所地下のガレージで一晩かけて調節したのだが、今度はどうしたわけか電装系に不調が続ぎ、エンジンも本調子に戻らず、結果として渋谷のなじみのモーターズへ入院ということになった。かくして平沢は、冬の寒空をバイクでとばす破目になったのである。

「今度はデルタかFB110でも……」

とつづく帰宅ラッシュの時間は過ぎていく。乗用車より大型トラックの数の方が多い。八〇キロ以上で流れる車の中を、平沢は例によってアベレージ一五〇キロを保って流していた。タコは六〇〇〇から七〇〇〇RPM、パワーよりは耐久性重視のチューンをされた一〇七六CC並列四気筒エンジンは充分パワーに乗っているものの、やっと本格的なパワーバンドの入り口というところである。トラックや一般車両をよけて次々に車線を変更していく。

東京湾上空から羽田空港めがけ、国内便のトライスターが降下してくる。高速一号線で多摩川を越え、右手に空港の整備場が見えてきたところ、平沢は追走してくる二台のバイクに気がついた。低く構えた感じの、角型ハロゲンのシャコタンバイク――

タービンが高速回転するような排気音で、平沢は無意識に後続車の車種に思い当たった。カワサキGPZ――音の太さから750ではなく900R。

一、二段ギアをたたき落としたように、GPZのエンジン音がいきなり高くなった。ノーマルでも九〇八CC水冷四気筒DOHC四バルブから一一五馬力を出す高回転高出力型のエンジンだが、さらに手を加えてパワーアップしているらしい。羽田ランプのすぐ後の右カーブを、大型トレーラーをかわしながらクリアした平沢のCBRに仕掛けるように近づいてくる。

「ぬあにい!？」

風を切る音に銃声が混じったような気がして、平沢はカウルのバックミラーに目を走らせる。斜め後ろにぴったりつけてきたGPZのフロントカウルのすぐ上で、四五口径らしい発射光が見

えた。

「何だ、いったい」

平沢はギアを落としてアクセルを全開にした。よたよた走る軽のワゴンを内側から抜いて全力加速のまま車体をねじ伏せ、ゆるい左コーナーを抜け、海老取川をくぐるトンネルへ急降下する。

バックミラー越しに、流れ去る白いトンネルライトに浮かび上がったライムグリーン・マックスターが並んで見えた。

車体に合わせたカワサキのジャンパーを着たライダーたちは左手にイングラム・マック10らしい軽機銃を握っている。スモークシールドのため、agvメットをかぶった顔は見えない。クラッチを使わずアクセルワークだけでギアチェンジをこなしているところから見て、バイクに頼るだけの飛ばし屋ではない。

あっという間にトンネルが終わる。夜空へ昇るような坂を一気に駆け上がり、右にモノレールを見ながら、頂上でジャンプ。ダークブルーのCB1100Rに続き、ライムグリーンのGPZ900Rがわずかにタイミングをずらして片手運転で着地する。

メーターはあっけなく二〇〇キロを越えた。他車の赤いテールランプが何本もの線になって飛んでいく。

昭和島埋め立て地から平和島ランプへのゆるいS字をスピードを殺さずに切りかえしながら、平沢はジャケットの奥のショルダーホルスターからコンバットマグナムを引き抜いた。全弾装填そうてん

済みなのを手で持った重さで確かめ、左手一本で後続の900Rに向ける。バックミラーで狙いをつけようとして――。

「うわっ」

進路を大型の冷凍トラックで塞がれて、平沢は急ブレーキをかけた。左側の路肩に滑り込んで追い越す。その間に、追走する900Rが右からトラックを抜いて平沢を待ちかまえていた。舌打ちして、平沢はカウルに身を沈めた。

二丁の四五口径SMGが火を噴いた。オリジナルのABS樹脂製から、ギョんター・クルップ特注の防弾用特殊合金に換えた1100Rのフルカウルとヘッドライトの防弾ガラスが、鋭い音をたてて機銃弾をはじく。

「まあ、操縦性を犠牲にしただけのことではあった」

オートバイのほぼ前半分を覆うフルカウリングを、防弾のためにすべて特殊合金製にしたため、1100Rはいわゆるフロントヘビーになっている。このためノーマルよりも動きは重い<sup>ハンドリング</sup>が、それは腕でカバーするしかない。大井競馬場を左へ曲がりこむカーブで車体をフルバンクさせたまま、平沢は右の脇の下から後ろの900Rのラジエーターへ二連射した。

フロントに十六インチの小径タイヤを採用した900Rは旋回性能が高い。米国仕様でニンジャと呼ばれる900Rは、魔法じみた動きでさらにカーブの内側へ回り込もうとして、フェアリングから白煙を噴き出した。あえなくスローダウンして視界外へ消える。

「さてと……」

平沢は前方へ目を戻した。勝島ランプを越え、京浜運河沿いのストレートに出る。

「こいつらSCFか」

平沢は溜め息をついた。コストも考えずにとにかく何でも出してくる連中である。前の一台を片づけたら、今度は首都高速に戦車を繰り出してくるくらいの事はやりかねない。

羽田空港から離陸したらしいジェット機の音が急に大きく聞こえた。アフターバーナーの、腹に響く重低音が高速一号線の高架を揺るがす。

「ちよっと待て、ちよっと！」

大井北埠頭への橋をくぐるなり、並行する京浜運河の黒い水面から翼を一杯に拡げた怪鳥が浮かび上がってきた。

夜の空間にジェットが青白い炎を噴き出し、機体上部の赤い衝突防止灯と翼端灯がきらめく。スピードブレーキに着陸脚まで出して、平沢の1100Rにあわせてスピードを落としたそれは米軍の現用艦載戦闘機、F-14Bトムキャットだった。機体ナンバーを見た平沢はうめいた。

「なんでインディペンデンスの艦載機が首都高を飛んでいる……」

双垂直尾翼のバーニーマークをひらめかせ、大型トラックの倍近い全長の戦闘機が可変翼を最大に展張したまま高速道路の上へ横転してくる。

「えーい戦闘爆撃機相手に何をしろってんだ！」

拳銃弾なら楽にはじくカウルも、トムキャットの二〇ミリ機関砲の前ではものの役に立たない。ロールをうって上昇したトムキャットの主翼のパイロンに対戦車ミサイルポッドを見た平沢





は、力のない声で笑い出した。

「ははは、反撃のしようがない」

モーガンにならバズーカや地对空ミサイルランチャーぐらい常備してあるが、オートバイではかさばる大型火器など持ち歩けない。

平沢は先行する900Rをにらみつけた。浜崎橋インターから高速環状まではほとんど直線<sup>ストレート</sup>、ランプのシケイン以外に大したコーナーはない。平沢は二〇〇キロプラスに保っていたスロットルを全開にした。右手の東京湾と左の埋め立て地が飛ぶように流れていく。荒れた路面で暴れようとする車体を巧みにコントロールして、平沢は前を走るGPZ900Rの横に割り込んだ。得意の早射ちでリヤタイヤを撃つ——跳弾！

「防弾<sup>なんなん</sup>タイヤ使うな！」

とりあえずライダーのM10を吹き飛ばすと平沢はマグナムをホルスターに戻してハンドルに手をそえた。全開でGPZを振りきる。黒いビロードに明かりをちりばめた市街にそびえ立つ、光のチェス盤を立てたような貿易センタービルが見えてきた。

カウリングが切り裂く空気の流れから少しでも体を出すと、まるで壁のように風がぶちあたってくる。浜崎橋インターのジャンクションの分岐路が急激に迫ってくる。フルブレーキ。二五〇キロフルスケールのスピードメーターを振り切っていた指針がはね落ちる。

限界ぎりぎりまでスピードを殺さず、平沢は高速環状外廻りへの急カーブへ突っ込んだ。フルバンクさせた車体のステップが路面をこすって火花を散らす。しばらく遠ざかっていたトムキャ

ットの双発ジェットたの音が近づいてきた。インターチェンジの左カーブから三速全開で立ち上がる。

「一般道たへ降りてまくなら次のランプだが……うわあ！」

ジェット音がひととき大きくなった、と思うなり平沢の左を翼が風を巻いて通り抜けた。平沢はとっさにタンクに身を伏せた。スクリーンごしに排気熱で陽炎かげろうのように後ろ姿リヤビューをゆがませたトムキャットが斜めに上昇していくのが見えた。

「野郎、遊んでやがる」

高架の右側に黒く広がる芝増上寺の森の上へトムキャットが飛んでいく。いくら旋回性がいとはいえ、巨大な戦闘機を市街地で超低空でふりまわすにはアクロバットパイロット以上のテクニックが要る。一つ間違えば自分が死にかねない。

「地上部隊との全面对決か……」平沢は、半年近く前に神戸の喫茶店でマスターが言った台詞せりふを思い出した。「奴ら、いよいよ本気を出して来たな」

夜空に鋭く立っている東京タワーを回り込んで、トムキャットが再び現れた。一ノ橋インターチェンジが近づいてくる。

「どわあ！」

インターチェンジの陰から、ローターの音も高らかに武骨なヘリが浮上してきた。バカみたいに照度の高いサーチライトが真正面からダークブルーのCB1100Rを射る。腹に抱えた三〇ミリチェーリングガンが火を噴いた。機関砲弾の十字砲火が、攻撃ヘリとトムキャットから平沢を襲

う。

「えーい、うるさい！」

ブレーキングドリフトをかけて、平沢はろくに減速せずに右コーナーへ突っ込んだ。花火の中へ突入したように、曳光弾えいこうだんが縦横無尽に飛び交う中でコーナーをクリアする。頭上をトムキャットの影が通過フライパスした。

「バーニー・ファイター及びアパッチI、レッドバグを捉えました」

霞が関上空三〇〇〇フィートに滞空している、二重反転コントラのメインローターを持つUH-7SC司令ヘリコプター、ツタンカーメンのキャビンでマツキはナビゲーターの報告を聞いた。

「一ノ橋インターより先、道路封鎖で一般車は、新宿まで両車線ともありません」

次世代の高速汎用ヘリから派生したSC型のツタンカーメンは、電子機器を満載している分、居住性が奪われている。コンピュータ詰めかんおけの棺桶かんとけといわれるSC型ツタンカーメンの定員はパイロットを含めて五名、パイロット席の後ろに背中合わせに二座席ずつ配列されたキャビンは、ディスプレイとコンソールで埋められ、立ち歩く余裕も窓もない。

「谷町インター上空でアパッチIIが待機しています」

SC型に限って、ツタンカーメンヘリの胴体下部はまるで爆弾倉のように異様に膨らんでいる。各種の探査機が納められたバルジだが、その中のレーザー・スキャナーと対地レーダーは高速環状を時速二〇〇キロ以上でとばすCB1100Rを捉えていた。

メーターパネルの淡い光とディスプレイの映像だけが浮かぶ暗いキャビンで、マツキは滞空中の作戦機全部に通じているはずのヘッドフォンのマイクに口を開いた。

「ファラオ・リーダーよりアパッチⅡ、朝倉トンネル出口でターゲットへ攻撃開始せよ。ファラオ・リーダーよりバーニー・ファイター、霞が関上空へ」

軍用機間用のUHFバンドから了解ラジヤの声が聞こえると同時に、二万五千分の一の地図が重ねられたディスプレイから、バーニー・ファイターことトムキャットを示すジェット機のシンボルマークと、谷町インター上空で待機していたアパッチ攻撃ヘリのマークが動き出した。

外回り線だけの朝倉トンネルが平沢の前に迫ってきた。背後からジェットタービンの音を絞り出したながら、戦闘ヘリが迫ってくる。一般車両がないのを幸いに、平沢は水銀灯で照らされた白い高速道路を一杯に使って蛇行した。

鮮やかな白色の、光るパイプのような軌跡をひく曳光弾が乱舞している。射線が急激に上昇し、ヘリが朝倉トンネルの上を飛び越そうと高度をとると同時に、平沢はオレンジ色の光で満たされたトンネルの中へ突っ込んだ。

低空では戦闘機以上の機動性を持つ武装ヘリも、さすがにトンネルの中までは追ってこなかった。平沢は手製のアクセルスロットパーをにかけてスロットルを固定すると、ホルスターのコンバットマガナムをひっぱり出した。

「見てろ」

トンネルの出口までそんなに距離があるわけではない。左手でリボルバー拳銃のシリンダーを振り出して空薬莖を道にばら撒いた平沢は、右のポケットの特殊弾用のケースから特別製の弾頭のないカートリッジ四発を取り出し、シリンダーに詰めてコンバットマガナムを持ち換えた。

マツキの前のディスプレイに浮かび上がった、光の線で描かれた地図の上で、ターゲットを示す白い三角形とアパッチⅡを示す十字を背負った矢印とが接触する。同時にアパッチⅡの射手<sup>ガンナー</sup>から報告が入った。

『アパッチⅡよりアラオ・リーダー、やられた！』

マツキは思わず、テキサスなまりの米語が飛び出してくるヘッドホンに手をあてた。

『やられた——レーザーサーチャーに喰らって、エンジンにも吸いこんだらしい』

「平沢は何をしたんだ？」マツキは訊き返した。「まだ飛べるか？」

『わからん。ミサイルでもぶっ放されたように……』

『飛行は可能だ』パイロットのキングズイングリッシュが割りこんできた。『だが、作戦続行は不可能——帰投許可を乞う』

「了解、帰投せよ」

マツキは、信じられないといった顔で、レーダースクリーンから飛び去るアパッチⅡの機影から目を離した。

「レッドバグは、何をしたんだ……」

「日本で使う破目になるとは思わなかったぜ」

M19 マグナムを握った右手をハンドルにそえた平沢は、カウルの内側にガムテープで貼りつけてあった二発目の秘密兵器をはぎとった。

四〇ミリ・グレネードランチャー。太い弾頭を持つミサイルのようなグレネードランチャーを、平沢は自分で改造したマグナムの四インチ銃身の銃口にねじこんだ。

本来アサルトライフルにつけて使用する、対戦車用がまあ普通の使い途である大型弾である。コンバットマグナム本体より大きいようなサイズのものを銃口につけるため、バランスも反動も無茶苦茶になる。アベレージ二〇〇キロを保ったまま、CB1100Rは霞が関トンネルに入った。

水銀灯に照らされたトンネルから切り通しのような霞が関ランプを抜け、左へのカーブをきる。外側一杯へパワースライドをかけて後輪を滑らせ、コーナー出口へ一直線に車体に向けた平沢はもう一度アクセルストッパーをかけた。

闇が口を開いたようなトンネル出口に、星が降ってきた。急降下したアパッチ攻撃ヘリが逆制動をかけながら、大光量のサーチライトで1100Rごと平沢を灼く。平沢はハンドルから手を放し、正面の光へ向けてグレネードランチャーを構えた。腰をシートカウルにあて、力まかせにタンクをひざではさみ目を細める。

アパッチはトンネル内へ曳光弾を乱射した。乱舞する白光の光跡の中で、平沢はトリガーをひ

く。通常の三倍近い発射薬を詰めこんだグレネードランチャー用のカートリッジが大きな炎を噴き出し、平沢を支えるバイクがきしむほどの反動がくる。

発射と同時に、平沢はタンクに身を伏せた。超低空のアパッチの、極限まで前面投影面積を削られた細い角ばった鼻面でグレネードが爆発した。

頭上わずか二〇メートルから瞬時に膨らむ爆発炎のその下を、平沢は照り返しと爆風を浴びながら走り抜けた。間髪入れずに次の三宅坂トンネルに入る。グレネードランチャー一発で墜落するほどやわなヘリコプターではないが、市街地で精密攻撃をする能力くらいは奪えたはずである。

無機的な壁が飛ぶような勢いで流れていく。わざわざ道路封鎖までしたらしく、一般車の消えた高速道路内で、平沢は三発目のグレネードランチャーを取り付けにかかった。左右のカウルの内側に残っているのは二発、待ち構えているはずのトムキャット相手に何発必要か――

「なにい!？」

トンネル全体を揺るがすような大音響にバックミラーに目を走らせた平沢は、信じられずじかに振り返った。

「そんなバカな……」

タッチアンドゴーもくそもない。フロントランディングギア タキシング・ライト前着陸脚の前照灯も爛々と、トムキャットが背後から迫ってくる。

トンネルの壁から、まぎれもない双発ジェットの音が反響してくる。主翼を、最大速度飛行時

より全幅が狭くなる格納モードにまで角度を鋭くしてたたんだトムキャットが、トンネル内を“滑走”している。

「何考えてんだ、こいつらは！」

ただでさえ図体の大きいトムキャットを、日本のせまい高速道路のトンネル内で走らせるパイロットとナビゲーターの技量に、平沢は驚くより先にあきれた。寸法的に、ろくな余裕はないはずである。

しかし、トムキャットが機首のM61バルカン砲を発射しはじめると、平沢は逃げ出した。アクセルストップパーをかけて上半身を後ろにひねり、トムキャットの機首両側の空気取り入れ口を狙い撃つ。

「あ、まずい」

飛んでいったグレネードランチャーはバルカンの射線に捕らえられて、1100Rとトムキャットの間で爆発した。トンネル一杯の爆発炎をくぐり抜けてトムキャットが再び姿を現す。

「本気でやばくなってきた……」

平沢はトンネルの出口へ向け、アクセルを開けた。



## ACT・5 インター・ミッション

その夜、歌舞伎町のパブ「カウンター・ミラー」に來た客は異様な風体をしていた。「戦争でもして來たの？」

あちこち焼け焦げてズタボロになり、左の二の腕は血で赤黒くなった平沢の姿を見た幹本沙織は、カウンターのスツールから目を見開いてこう言った。

「いい勘だ」

平沢はステンドグラスのドアを入れてすぐ左側にある、古風な造りの電話ボックスのドアを開けた。

「エスプレッソを」

バーテンに注文して、平沢はボックスのドアにもたれかかった。ピンク電話にコインを放り込み、受話器を持った手でダイヤルを回す。コールを聞きながら顔をあげると、ボックスの色ガラスの赤い格子ごしにバーテンに何か箱を出してもらっている占い師が見えた。

相手が出た。平沢はボックスの反対側にもたれて店に背を向けた。ドアが閉まる。

「マスターか？ 平沢だ」

『ああ、まだ生きていたか』

「なに？」

『よく改造バイク一台で逃げきれたな——まあ死ぬとも思っていないが』

「おまえ、知ってやがったな！」

喚いた平沢は、誰かがドアをノックしたのに気がついた。見ると、救急箱をかかえた沙織がドアを開けた。

「左手、出して。ケガしてるでしょう」

言われてはじめて、平沢は傷を負った方の手で受話器を握っていることに気がついた。あわてて受話器を持ち換える、沙織に目でありがとうと言って手をあげて、平沢はもう一度電話の向このマスターに喚いた。

「何が “前回ほどストレートな動きではない” だ！ テルアビブで戦車と追っかけっこした時だつてこれほど無茶苦茶じゃなかったぞ！」

『その元気なら心配はなさそうだな。——ああ、できれば事務所に戻るのもやめた方がいい。連中が手を回してるはずだ』

「目の前でやさ、吹き飛ばされたよ！ おまえか手引きしたのは？」

『わたしなら、もっと使える情報を流すがね』

「それもそうだ……あ痛っ」

テキーラのびんを呷<sup>あお</sup>った沙織が、平沢の左腕の火傷と裂傷にぷーっと吹きかけたのである。

「消毒液、ないの？」

いささか情けない声で平沢が訊くと、沙織は首を振った。

「ごめんなさい。きらしてるの」

出血量が多いように見えるが、深い傷ではない。手際よく治療してくれる沙織に腕をまかせて、平沢は電話に戻った。

「連中、何を考えてトムキャットなんぞ引っ張り出した？」

『……おまえさん、何をしとるのだ？』

「ん？ いいこと」受話器を首にはさんで沙織の細い肩に右手を回そうとしたら、あっさり手をはたかれた。「できるよう頑張ってるよ——あ痛ッ」

今度は傷口をはたかれる。

『前途多難のようだな。幸運を祈ってやる』

「あんがとよ。教えろ、何が起きた？」

返事が戻ってくるまでに少し間があった。

『よくある、“状況の急激な変化”ってやつだ。最近一カ月間に、主要基地間の重要通信に猛烈な暗号変換がかけられるようになった。宇宙基地間の連絡艇の往復も、地上—宇宙間のシャトルの往復も異様なペースで増えている』

「UFO軍団が地球に総攻撃でもしかけようってのか？ ——看護婦で食えるな」

慣れた手つきで傷口に抗生物質をぬる沙織の動作を目で追いながら、平沢はどうでもいいような口調で言った。

『一方、SCFの緊急発進を含む戦術・防衛行動はこの三週間にわずか二回、しかも一回は定期便のシャトルが作戦にもなっていない攻撃を喰らっただけで、大きな戦闘は一つもない。最後の大規模戦闘が、おまえさんがルナベース月から脱出する時のものだ。どう思うね?』

「地上部隊がヒマになってしょうがねえな。——連中ヒマつぶしにあんな派手なの繰り出してきたのか!？」

『言っただろう、状況の急変だと。わたしの情報網をフル回転させても確証はとれんのだが、CセETIチに成功したらしい』

「珍しいな、マスターがてこずるとは」

CIAやSISあたりと互角以上、多国籍企業並みの情報収集能力を持っているマスターである。確証がとれないなど、平沢がはじめて聞く言葉だった。

「で、駅がどうしたって?」

『エキじゃない、CセETIチだ。C、E、T、I——知らんか?』

「知らん」平沢はあっさり答えた。「あまり聞かん」

『動かすだけならシャトルを軌道に乗せる事もできるのに、宇宙は管轄外だというのは本当だな。Communicate with Extra Terrestrial Intelligence ——地球外知性体接触計画だ』

「コンタクトに成功したのか!？」

平沢は思わず声をあげかけた。ちらっと目を上げた沙織に気兼ねしてトーンを落とす。

『わからんのだ』

マスターはそれだけ言った。

『どういう訳だ?』

『民間でも、同じ計画はいくつもある。もったも、まだ接触すべき異星人を探索している状態だが。』

知っての通り、SCFはこの分野の専門家だ。しかし、SCFに所属するものが宇宙人と接触した記録は、公式には存在しない。メンフィス計画——つまり、SCF創設計画の当初から、この種の計画が行われている。しかし、その成果は知っての通りだ』

沙織が包帯を巻き終えた。電話帳の上に置いた救急箱を閉じて電話ボックスから出ていこうとする。平沢は肩をつかまえた。

『ありがとう』

ついでに引き寄せてキスしようとする。

『うわあっ痛!』

包帯の上から傷をはじめた沙織が、表情も変えずに平沢の腕をすり抜けた。平沢は顔をしかめて電話に戻った。

『冷たく無視されたんだろ。淋しいね』

『SCFは問答無用のUFOと戦いながら、物言わぬ敵とやっきになってコミュニケートしよう

としていたのだ。それが、戦闘行為が日常茶飯時になった今ごろになって成功したとしたら、当然、一分の隙もないほど厳密な機密保持体制をとることになる』

「あやかりたいよ。何年かかったにしろ、とにかくラブコールに返事があったんだろう」

平沢はカウンターに戻った沙織に、ボックスの中から投げキスを試してみた。沙織は平沢から目をそらしてしまふ。

「で、UFOは<sup>あちらさん</sup>何て言ってきたんだ？ SCFにだって、おたくの末端はいるんだろう？」

『コンタクトがあった事自体、上層部のほんの一握りしか知らんトップシークレットだ。具体的なメッセージの内容にしても、とにかく何らかの有意信号が送られてきて、その解析にスーパーコンピューターを何台も使っているような状況らしい。この事に関する情報はこれで全部だ』

「ありがとよ、と言いたいところだが、直接役に立つ情報じゃないな。もっとなんか他に情報はないか？」

『おまえさんの役に立ちそうな情報がある。今日の作戦はほんの小手調べで、これから極東地区の地上部隊が総がかりでおまえさんを狙うことになった。一般市民に迷惑をかけんよう、立ち回り先には気をつけるように』

「確かかよ」平沢はげんなりした顔をした。「冗談じゃない」

『冗談だ』

「なに？」

『だが、今日のが小手調べだというのは本当だ。国立市近辺には足を踏み入れない方がいい。S

CFの人員が集まっている』

「出来る限りご忠告に従うよう努力するよ。それと、前のとそう遠くない所で事務所になりそうな部屋を見つけてくれ、じゃあな」

『ツケがたまっている。払わんうちに死なんように』

平沢は電話に白眼をむいてみせてから受話器を置いた。

「さてと……」

平沢は電話ボックスのドアを押して出た。タイミングを計ったように、バーテンが湯気のたっているコーヒーカップをカウンターに置いた。

「はい、どーも」

ソーサーごとカップを持った平沢が、沙織の横に来た。ソーサーを置いてスツールに腰をおろす。

「とにかく、助かった」言いながら、平沢はジャケットの袖に左腕を通した。「ついでに今夜もかくまってくれ」

「お仕事で来たんでしょ」

「こればっか。本当にカタいんだから、もう。はい、それじゃ本日の講義はテレパシーについて……」

「前略、愛しい恋しい和紗結希様、不肖、私め、あなた様に一目惚れてしまいました。つきまし

てはあなた様に逢い引きなど申し込みたく……」

「あの、どーでもいいけど真田、今年、何年か知ってる？」

「どっか悪い所でも？」

「今年は文明開化の明治元年でも、花のお江戸の元禄時代でもないんだぜえ。ちーとクラシカル過ぎるんでないかい？」

「そーかなあ。ラブレターなんて小学生の時冗談で書いて以来だから……」

「ラブレターちゅーよりや恋文ちゅー雰囲気だ。もそつとナウくならんかい」

「ナウくね。——んじゃこんな感じで……あなたはぼくの月だ太陽だお星様だ、あなたなくしてこの世に朝も夜も来るものか、何ものもぼくのあなたへの想いを止めることなどできはしない」

「今度もえらく大時代的に出たな」

「まずいか？」

「まずかないけど、ハリウッド黄金時代のミュージカルちゅーか、宝塚ちゅーか」

「では最新のムードで行ってみよう、いええい、おいらのはあと、君にびんびんに感じてるぜい」

「つくづくロックの似合わん奴」

「じゃ、どーせいつちゅーんじゃ！」

鉛筆を放り出した真田が、椅子を回してベッドの櫛に向きなおった。

「だから、こう、もっとさりげなくね……」



手真似で榊が説明する。真田はレポート用紙を榊の方に突きつけた。

「おぬし、自分で書け」

「め、めっそうもない。俺は生まれてこのかたラブレターなぞ書いた経験がないから、ここは少しでも経験のある真田に……」

「小学生の時の冗談だってんだろが」

真田はレポート用紙を机に投げ出した。

「いっその事、沖田にでも書かせっかなー」

「やめた方がいい、それだけはやめといた方がいい」榊があわてて止める。「あの欲求不満の朴<sup>ぼく</sup>念<sup>ねん</sup>仁<sup>じん</sup>が、まともなラブレター書ける訳もない」

「沖田の書いたラブレターちゅーのを見てみたい気もするんだが」

「誰のラブレターだって？」

ノックもなしに405号室のドアが開いた。少女マンガ雑誌を山と抱え、上にこれまた少女趣味のイラスト付きのカセットケースを二つ三つ重ねた沖田が足でドアを開けて入ってくる。

「ほれ、マン研と軽音行って少女マンガとラブソングのテープ借りてきた」

ベッドに座っている榊の横にどさっと山を作った沖田が、肘にかけてきたスーツのハンガーをベッドの二段目にかけた。

「おユキちゃんから衣裳も借りて来た」

おユキちゃんとは演劇部の宮崎由紀<sup>よしのり</sup>のことである。沖田は積み重ねられた少女マンガの山をた

たいた。

「こいつで女の子の心理研究すれば準備は完璧かんぺき」

「どうでもいいーけどさ、沖田、誰がそんな山読むの？」

「手分けすれば何とかなる」

「冗談だろお」三人の中で、まがりなりにも少女マンガに手を出している榊がどてーっとベッドに倒れこんだ。「オレはその昔一晩でなかよし一年分読んで寝こんだ事があるんだ」

「やけにパワーがないな？」

「当然でしょー」

榊は二段ベッドの上段に貼った「ダーク・クリスタル」のポスターを見たまま言った。

「何も知らない女の子ラブレターでひっかけてデート仕組もーってんだぜ。ラブレターの文句なんか思いつけるか。ったく、こんな衣裳まで借りてきて」

「てめエしか相手持ちはいねエんだがな。誰の名前で出すかも決めてないし……」

とたんに、榊と真田のジト目が合計四つ、沖田に突き刺さった。沖田は悪寒おかんを感じて思わず後じさる。

「なんだその目は……」

「うわさでは女子部に隠れファンクラブがあるとゆー……」

ふくみ笑いの真田に続いて、榊がとんと沖田の肩をたたいた。

「とーとー硬派の看板を降ろす時が来たよーですな。沖、観念しましょう」

「じょ冗談じゃない。そうだ、おユキちゃんスカウトしてこよう」

くるりと背を向けて逃げ出そうとした沖田の服の裾すそを、今度は榊さかきがつかまえた。

「これ以上関わる人間増やすつもり？ 收拾しゅうじつかなくなるぜ」

「文面がひらめいたーっと」真田がくるりと椅子を回して机に向きなおった。「自己紹介から入ろう。ぼくは二年B組の、と……」

ぎゃーすか喚く沖田を無視して鉛筆を走らせる。

「どうどう、よしよし」

吠えたてる沖田をなだめてベッドに座らせた榊が、本の山から抜き出した一冊を突きつけた。

「作戦計画の主演としては、がちり女性心理を把握するよーに」

「まずった……つくづくまずった」沖田は頭を抱えた。「てめえら遊んでやがるな」

「悪いか」間髪入れずに榊がうなずいた。笑いながら、「イライザ手に入れたヒギンズ教授の気分もこんなもんだったのかな。さー、この自称硬派め、どーやって一流のフェミニストに仕上げてやるーか」

「俺はマイ・フェア・レディーか」

どーでもいいような声で、沖田は少女マンガを拵しらげた。

「大好きだ、君だけ愛してる……うっく、どんな顔してこんなセリフ言えってんだ」

「おー寒さぶ」

制服の上にとてらを羽織った榊は、男子部と女子部の境にあるポプラの並木道を吹き抜けた一陣の風に震え上がった。起床時間前の早朝、夜明けの遅い冬の空は、まだ半分しか白くならない。

「いっちばん冷え込む時間……おーあ」

どてらのふところに手を突っ込んで背中を丸め、榊は女子寮へ歩き出した。

ポケットから無地の白い封筒が顔を出している。三人の中で一番まともな字が書ける真田が便せん三枚を埋めるのに丸一晚かけた労作と、自然研の大幹部である「ドクトル」こと「マッド」こと松田を真夜中にたたき起こして調達したラベンダー・ポプリがひとつまみ入っている。

制作者の真田は表書きを書くと同時にダウン。沖田は今まで触れたこともなかった少女マンガに、一晚浸ったおかげでグロッキー。しかたなく生存者の榊が愛のメッセージとしてラブレターを届けに来た。

校舎裏、女子寮前の中庭の噴水には氷が張っていた、榊はふところから手を出して腕時計を見た。五時過ぎ。体育系クラブの早朝練習に女子部員が起き出してくるまで、まだ間がある。

「さてと……」

榊はポケットから封筒を取り出した。表書きは小さく二行「ステキな転校生に／愛を込めて」。

「今頃になってラブコメやる破目になるとは思わなかった——さて、どーすっかねえ」

宛名のない手紙をポストに放り込むわけにはいかない。手渡しか、最低限ドアの下にでも滑り込ませる必要がある。

榊は女子寮を見上げた。テキは443号室、突破しなければならぬ関門は玄関、舎監室前、廊下をはじめとして数多い。

「しゃーない、祈りつつ正攻法で」

正面玄関に向かって歩き出すなり、聞き覚えのある声がかげられた。

「珍しいじゃない、おはよう」

榊はぎくっとして顔を上げた。正面玄関の段の上ではんてんを着たつばさが伸びをしていた。

「おはよ……どしたのこんな朝早く」

「そりゃこっちのセリフだわ。榊こそ何しに来たのよ」

つばさが榊に向く。こちらにも徹夜明けらしく眼が赤い。耳に赤ペンをはさんでいる。

「何かの編集？」

「あたり。次の増刊、三年生が最後だから……何これ？」

榊が出した封筒を、つばさが覗き込んだ。

「ステキな転校生——何これ？」

「ご覧の通り、ラブレター」

「あの転校生に？ ちょっと、誰が？」

ひょいと榊の手から封筒を抜きとったつばさが裏を返した。名前なし。榊は面白そうに笑ってみせた。

「聞いて驚くなよ。沖田」

「沖田って、……あのバカ何とち狂ってるの!? 相手が誰だかわかってもの考えてんでしょーね、むぐや」

喚き出したつばさの口を、あわてて榊が押さえた。

「騒ぐな、頼むから大声出さんでほしい」

「懽然とした表情でつばさはうなずいた。

「悪かったわよ。であのバカ何考えてるの」

「あのバカ、デートに引っぱり出すの。面白いでしょー」

面白いと言われ、つばさは考え込んでしまった。

「まったくイメージが浮かばない……あのバカがどんな顔してそんな事するのか……」

「そらそーだ。で、とにかくあのバカ——じゃなくて沖田に転校生誘わせよーとゆー作戦ですよ

これは」

「まったく何を考えてるんだか……」

「渡すのお願いできる?」

「いいわよ」

あっさり請け負ったつばさは、封筒をはんてんのポケットに入れた。

朝六時半。女子寮の全室に、起床時間を告げる“乙女の祈り”のオルゴールが流れる。これで目を覚ますような殊勝な女生徒は、いることはない。しかし、これで起き出すような真面目人間

は、学年が進むほど加速度的に少なくなる。

大部分は、暖かいベッドの魔力から逃れられずに怠惰な時を過ごし、ぎりぎりまで粘った揚げ句に食堂へ、さらに剛の者はもっと粘って教室へと走ることになる。

一時限目の授業まで一寝入りできるのをあきらめて、木刀片手に徹夜で上げさせたマンガ原稿のチェックをしていたつばさは、食堂が開く七時半を少し回ったところで443号室のドアをノックした。預かった手紙を片手に、徹夜明けの頭で何時限目の授業で居眠りするか考える。

「和紗さん——結希さん？」

もう一度ノックをしようと手を上げたらドアが開いた。内側から、結希の眠そうな顔が出てくる。

「おはよ。あの、これ……」

頼まれたんだけど、と手紙を差し出したつばさはあとのセリフを呑みこんだ。開けたドアにひきずられて、部屋の入り口に色も大きさもかなりバラエティに富んだ封筒が散らばった。

「何これ？」

和紗結希様、結希ちゃん江……エトセトラ、一目で男文字とわかる宛名がいくつか読めた。

「……何これえ？」

感嘆符に近いつばさの質問に、寮生には珍しくこの時間にきちんと制服を着ている結希はかみこんで手紙を拾い集めた。びっくりしていたつばさが、途中からあわてて手伝って残りを集めて手渡す。結希は立ち上がって、どうぞと言うようにドアを押さえて入るスペースを空けた。

「あっおじやま」

つばさは手紙を持ったまま部屋へ入った。真っ先に、空いている机の上に並べられたいくつもの手紙に気づく。

「あの……」つばさは目を点にして訊いた。「あれも、——その、ラブレター？」

結希は照れたような顔で肩をすくめてみせた。つばさは軽い頭痛を感じて手紙を持った手を頭にあてた。

「星南高の男どもは何考えてんだ……」

昨夜の就寝時刻まで十通以上、夜から今までに七、八通。さらにもう一通をつばさ自身が持っている。

「こりゃ競争率が高いわ。あなたたってもてるのね」

結希は困ったような顔をした。

「ま、これも読んだげて」

つばさは、ひょいと手紙を突き出した。結希はさらに困った顔をして手を出さない。

「悪い奴じゃないから」

あいつより悪いのはそういないと思いつつ、つばさは言った。

「読んでみて。おすすめ品よ」

言葉を出すのに、ムチャクチャな抵抗を感じる。ぎこちなくひきつった笑いを浮かべたつばさは猛烈な自己嫌悪に陥って、話題を変えた。



「頼んだ原稿、どんな感じ？」

机に戻った結希は、ぱたんとF4サイズのクロッキー帳を閉じた。

「今日中にラフななんとかなりそう？」

机にもたれて考え込んだ結希は、慎重な面持ちでうなずいた。

「じゃ、お願いね。——あと、これ」

無理矢理に結希に手紙を受け取らせると、つばさは部屋から出ようとした。思い出して立ち止まる。

「よかったら朝御飯、一緒にどう？ 姫もノブもまだ寝てんのよ」

一瞬迷って視線をそらしてから結希はうなずいた。

「あ、お花がひらひら、お目々ぱっちり、あよいよい」

「な、なんだなんだ、何が起きた？」

「髪の毛さらさら、心ふわふわ、光ちらちら、頭くらくら」

「どおした沖田、しっかりしろ！」

本来教室で聞くべき予鈴を、ねぐらである405号室で聞いてしまった真田は、あわてて授業の仕度をして飛び出そうとした。ところが、どうも沖田の様子がおかしい。あまつさえ何かぶつぶつ言いながら踊りはじめた。まるで麻薬服用のような症状である。

「ほっとけ」榊は驚きもせずにはバッグを持った。「少女マンガの中毒症状だ。一晩であれだけ読

みや、はじめは誰でもああなる」

「本当かよ」

「丸一日安静にしていれば立ち直れるよ」

「保健室に何て言って届け書いてもらうんだよ」

「んじゃ、ショック療法でもやってみる？」

「電撃でもやるのか？」

「かえって悪化するわい。少女マンガには熱血青春ドラマがよく効く」

「さよでっか。どーせなら熱血少年劇画の方が効きそうな気がするが」

「あれは特效薬だけど、ケガ人が出るから……やる？」

「うんにゃ、青春ドラマでええ」

「んじゃ窓開けて。ほれ沖田、おいで」

「おー、よー冷えとるわ」

真田は窓を開け放った。セントラルヒーティングの部屋に風が吹き込んでくる。榊は立たせた沖田を窓ぎわに連れていった。

「うまい具合に天気は快晴と。んじゃはじめっか」

榊は、うつろな目をしている沖田の肩を揺さぶった。

「沖田、あの夕陽を見ろ！ あの赤く燃える夕陽を見るんだ」

「あれ朝日だぜ」

「うるさい。さあ沖田、あれがオレたちの青春だ」

「やけに短絡たんらくしたな」

「黙ってるっての。さあ、沖田、走るんだ。オレたちの青春めがけて、走って行け——」

「うおー」

沖田をくるりとドアに向けた榊がその背を押すと、沖田はどどどど——と走り出した。ドアから外へ飛び出していく。

「行き先は教室だ、忘れんなよー」

榊は足音も高く走り去っていく沖田の背に声をかけた。真田が日の丸の扇を手にとって、

「あっぱれあっぱれ。見事」

「ただ、これ副作用があつてね」

榊は深刻な顔でこめかみを押さえた。

「やったあとで自己嫌悪に陥るとゆー……」

再び地響きが聞こえたかと思うと、沖田が再びドアに姿を現した。蒼い顔をしている。

「ちょうど、あんな感じに」

「致命的に重大な事を思い出した」

不吉な声で、沖田が言った。そのあまりの暗さに、榊と真田が沖田を見直す。

「どったの？」

「真田おまえ、デート申し込みの日、いつにした？」

「えーと、確か今度の日曜——何か大切な用事でもあったか？」

「おまえ完全に忘れてんな。次の日曜、二年生模試だろが」

「さあーっと音をたてて、榊と真田の血の気がひいていく。たたみかける如く、今度は授業開始を告げる本鈴チャイムが聞こえてきた。

「この状態を俗に前方のブラックホール、後方のインベーターという」

「したり顔で講釈しとる場合か、このスカ！」

「一生やっつれ」

榊など無視して、それぞれのバッグを持った沖田と真田が部屋を飛び出す。榊はあわててあとを追った。

「二十八通？」

「いや、それは朝までの集計で、昼休みまでにさらに六通届いたから……」

「トータル三十四通——冗談だろ、おい」

「ついさっき女子部から入ったばかりの最新情報だが」

「男子部ちの連中は何を考えてるんだ」

自分の手紙もその三十四通に入っているのも無視して、沖田は頭を抱えた。

「だからうちの男子、軽薄だって言われんだぜ。誰だよトップ切ったのは」

「おれー」和田が自分自身を親指で差した。「どーだ参ったか」

「てめェー何を考えとる！　せっかく一冬かけて良い仲になったとかゆー一年の女の子はどーした！」

「冗談だよ。差出人の名前まで知るか。——やっぱり沖田も出したの？」

「なに？」

「やっぱ手を出したな？　白状しろ、こいつう」

沖田は黙って和田の前に拳骨けんこつを突き出した。

「ストレートがいいか、それともアッパー、フック、何でも好きなの選びな」

「暴力反対」和田は胸の前に手を上げた。「つまり、出したってわけ？　幸運祈ったげよーか」

「俺が出したんじゃねェ！」

名前は俺でも、書いたのは真田、出したのは榊だ、嘘じゃないと辻褄つじつま合わせながら沖田は怒鳴った。和田はわざとらしくそっぽを向く。

「珍しく色気づいているから協力してやってんのに」

「俺は盛りのついた猫か何かか」

「犬だと思ってる」

「このやろ！」

わっはっはーと笑いながら、和田は密談の場所としては使い古された場所である便所の個室から逃げ出した。

沖田は追う気力もなく出て来て、天井の愛想のない蛍光灯を見上げた。

「三十四通だって……国立医大並みの確率」

「おい聞いたか」教室の席に戻るなり、沖田は榊に引き寄せられた。「例の転校生にラブレター出した奴の数」

「今、和田に聞いたばっかだよ。こーなると知ってたら昨日のうちに何とかしとくべきだった」  
「何とかって？」

「つまり」言いかけて、沖田は榊の疑惑の眼差しに気づいた。「よば——知るか！」  
「で、どーする？ どーやって競争率突破する？」

「運を天にまかせるか……転校生がいちいち全部相手してくれりゃ万々歳なんだが」  
「どして？」

「男子生徒三ダースもとっかえひっかえ相手してればSCFの任務などやっとなるヒマなくなるだろ」

「そこまで律義りちぎとも思えないけど」

「ほんじゃどーするね？」

「オレあ知らないよ。沖田の相手でしょ」

「誰の相手だ、だれの！」

「今さらジタバタするない！」

後ろから、いきなり沖田の両肩にどんと手が置かれた。なんじゃと後ろを見上げた沖田に、真

田がクリップで止めたレポート用紙を突きつける。

「何だこれは？」

「見ての通り、桂木荘と443号室周辺の見取り図」

紙をめくって見た沖田は妙な顔で紙束をひらひらさせた。

「何に使うんだ、こんなもん」

「んなこた決まっていますがな。競争相手がバカみたいに多い以上、直接行動に出るしかないんでないかい」

「直接行動だ？」

「具体的に言ってほしいか、あん？ 手っ取り早く誘拐するとか、夜這いをかけるとか、本気で愛をささやいてみるとか」

「おまえ、完全に少女マンガの読み過ぎだ」

素っ気なく言って、沖田は真田に紙を戻した。

「ロープは？」

「ある」

「懐中電灯は？」

「ある」

「電池は？」

「ある」

「三つ又またのイカリは？」

「ある」

「煙玉は？」

「ある」

「プラスとマイナスのドライバーは？」

「ある」

「ナイフは？」

「ある」

「火薬は？」

「ない」

沖田は泥棒でもするような道具一式を並べた机から顔をあげて、リストを読み上げていた真田を見た。

「金庫破りしよーってんじゃないんだ。たかが桂木荘忍び込むのに火薬使うか？」

「一介のドロボーが姫君に一目会わんとして強敵の待ち受ける城に潜りこもーってんでしょ」  
女子寮の見取り図をためつすがめつ眺めていた榊が顔をあげる。

「対戦車ライフルくらい用意しといても間違いないと思うけど」

「誰がドロボーで誰が姫君だ、あん？」



「不倶戴天の仇敵がおるじゃろ。で、準備完了？」

「終わるには終わったが……」

沖田は、あらためて自分の衣装を見直した。演劇部の宮崎から借り出した、パーティーにでも行くような白いスーツ。

「忍び込みやる格好じゃないぜこれは」

「ほい忘れ物」

榊は沖田の横から花束を出して行く手をさえぎった。しつかりメッセージカードまでそえてある。

沖田は額に手をあてて溜め息をついた。

「行き先をモンテカルロのカジノかコートダジュールのホテルに変更出来んか？」

「行ってらっしゃーい」花束を抱えた沖田に、榊はにこやかに手を振った。「どんな手段でもいーから、とにかく目的を達成するよーに」

「何の因果だ、うー」

花束を持ったスーツ姿の沖田が顔をあげた。意を決してハイライトの箱を取り出し、一本くわえる。ニヤリと笑い、声を低くした。

「行ってくるぜ」

「行ってらっしゃーい」

榊と真田は手を振って、沖田を405号室から送り出した。

夜空に、いくつもの窓明かりをちりばめた女子寮桂木荘が建っている。時刻は消灯前、灯りの点<sup>つ</sup>いていない窓があるはずがない。

古風な造りの街灯に、壊れた噴水のある中庭が照らされている。

「さてと」沖田は、気の乗らない顔で桂木荘を見上げた。「消灯と同時に潜入、寝込みを襲い、敵SCFのエージェントを直接口説<sup>くど</sup>く。ったく、何て作戦だ……」

ぶつくさ言いながら、沖田は小石を二つ三つ拾った。腕時計に目を落とす。中庭の脇の小徑に、夜光塗料の文字盤が浮かぶ。わざわざ時報に合わせたスピードマスターの秒針が消灯時刻の十一時ジャストになるまで、まだ半周残っている。

秒針が上を向くまで、沖田は煙草をふかしながら腕時計をにらみつけていた。

秒針が十二時を振り切ると同時に、とっくの昔にマンネリ化している、ドヴォルザークの“新世界”をモチーフにしたオルゴールが流れはじめ。窓からもれる明かりが、あちこちで消えていく。中庭の街灯が、音もなくすーっと暗くなる。

とてつもなく重い溜め息をついて、沖田は煙草を投げ捨てた。鉄筋コンクリート五階建ての桂木荘の横に立って屋上を見上げる。

「443号室に押し入るには、と」

放課後に榊が街に出て、値段だけで買ってきた花束をくわえると、沖田は壁を登りはじめた。

「なんか変な音しなかった？」

消灯時間を過ぎてしまったため、机のライトだけをつけていたつばさが顔をあげた。机の上にあるのは、濃い鉛筆の慣れた線で簡単に下描きを描いてあるクロッキー帳の紙が一枚。

常夜灯だけの明かりの下でつばさを見ていた結希は、うなずく代わりに外を見た。

女子寮のすぐ外にある木の枝が揺れる音にまじって、窓のガラスをはじくような音がした。

「はあ……？」

どちらからともなく、つばさと結希は顔を見合わせた。窓に小石を当てて開けさせるなんてのはロミオとジュリエット以来の古い手だが、それもここ桂木荘では二階止まりである。それより高くなると喚かないと声が届かず、喚いたとすれば――

また、小石がガラスに当たった。ここは四階である。

「どっかの勇氣ある男子生徒が、キミに愛をささやきに來たらしいぞお」

からかうような口調で言っ、立ち上がったつばさは、カーテンをひいて窓を片方だけ開けた。街灯が消された中庭を見下ろす。噴水の水に月明かりが反射しているが、それらしい人影は見えない。

「――！」

つばさは、はっとして顔を上げた。風を巻いて、白い影が正面から飛んでくる。とっさに飛びさがったつばさは反射的に空手の構えをとり、しかるのち、自分の目を疑った。

「なによあんだ？」

スーツ姿で窓枠に飛び降りた沖田は、ザイルの残りを部屋内に投げ入れて、くわえた花束を手を持った。

「部屋間違えたか」それから、妙な顔をしている和紗結希に気づく。「あ、こんばんは……」スタイル、出現の仕方、場所の、ものの見事にちぐはぐな組み合わせに、とっさにつばさは反応できなかつた。

数秒間のストップモーションの後、窓枠に腰かけてエナメルの靴を脱ぎはじめた沖田をちよいちよいとつばさが引っ張った。

「今日はおめエと遊びに来たんじゃねエ」

「いーからちよっと来なさい」

ドアを開けて首を出し、外の廊下に人影がないのを確かめてからつばさは沖田を部屋から引っ張り出した。

「どっから本気で、どこまで冗談よ！」

常夜灯の下の壁に押しつけた沖田の左右に手をついて逃げ道を塞いで詰め寄る。行き場をなくした沖田は花束を肩にかついだ。

「なんでお前があんな所いるんだよ」

「うるさい、質問に答えろ！ てめえどこまで本気だ！」

沖田はちらっと443号室の方向を見た。

「安心しろ、百パーセント冗談だ」

何か言おうとしたつばさは、足音に気づいて横を向いた。うつむき加減に廊下の角を見透かす。暗い廊下に非常口のランプが緑に輝いている。

「やばい」

同じ方向を見た沖田がつぶやいた。数人分の話し声と足音が近づいてくる。

「やいつばさー!」「なによ!」「何で消灯時間過ぎたのにうろついてんだ!」「あたしが知るか!」「不用意に引っ張り出しやがって何とかしろこの!」「どーしろってのよ!」

角の向こうから、どんどん話し声が近づいてくる。あわてて443号室へ駆け出したつばさの肩を沖田はがしとつかんだ。

「バカもう間に合わん」「どーすんのよ」「えーと……」

二人の目が合った。最悪の対策が頭をよぎる。

「ちょっと、やだ何考えてんの!」

「テレパスかおのれは! 他にどーしろって……」

言っている間に一人目の人影が角から現れた。

一瞬だけ踊ってから、沖田とつばさはひしと抱き合った。壁伝いに横歩きして暗がりにも移動して、はたからみればいかにキスしている風に顔を重ねる。接近してくる足音からぴたりと話し声が消えた。

「見ないフリするぐらいの礼儀わきまえてんだろな!」

「知らないわよ。黙って!」



横目で来る方向を見ていたつばさが目を閉じた。

沖田は、数人分の気配が抜き足差し足で通り抜けるのを背で感じた。通り過ぎると、逃げるように足音が去っていき、聞こえなくなった。

ほっと息をつき、はじかれるように二人は離れた。

「おえー」

二人は互いに背を向けて胸に手をあてた。

「あー不気味悪い。寝る前にもう一度シャワー浴びなきゃ」

「怪奇映画三本立て——うー、物体Xの方がまだいい、帰って寝よう」

「ちよっと待てい」

反対方向に行きかけた沖田の首根っこにつばさが手をかけた。443号室を指差す。

「直接口説きに来たんだろが、男ならやることやってけ！」

沖田は、世にも情けない顔をしてから姿勢を正した。花束をしっかりと胸の前に持ってドアの前に立つ。

「ちよっとたんま」

「なんだよ」

声をかけたつばさに、沖田は腹立たし気に振り向いた。つばさは値踏みするような目で沖田を頭のとっぺんから足の先まで見る。

「髪の毛とかして。ネクタイゆがんでる。シャツにアイロンかけたの。チョッキの第二ボタンが

はずれてる。ハンカチがはみ出てる。ズボンの裾直して」

「ひええ」

思わず花束を小脇にかかえ、沖田は指摘されたところを直していった。もう一度ざっとチェックしたつばさは、花束に手をのばしてバラを折り、沖田のスーツの襟えりにつけた。

「よし、一応合格」

「……………」

「しっかり任務を達成しろよ」

「てめえ何か、結託して陰謀画策したのか」

ぶつくさ言いながら、沖田は花束を構えてドアを開けた。斜め前に、机のスタンドのライトを背にした結希が伏し目がちに机にもたれてこちらを見ている。

「やあ、待たせたね」

目一杯シリアスぶった声で用意した台詞せりふを言って歩き出した沖田は、あわてて振り向いた。つばさが当然のような顔で沖田について部屋に入ってドアを閉めようとしている。

「用事が済むまで外で待ってる！」

つばさは目を剥むいた。

「消灯時間後の廊下に出ろっての!？」

「何とでも言い訳しろ！」

力まかせに部屋の外へつばさを押し出し、乱暴にドアを閉める。沖田は結希に向き直った。結



希はおかしそうな顔で、口に手をあてて必死に笑いをこらえている。沖田は、花束を持った手の甲を額にあてた。

「結局、決まらねエ運命らしいな。はい、プレゼント」

沖田は無造作に結希に花束を渡した。ドアの外で聞き耳をたてていたつばさが頭を抱える。

結希は、片手で口にこぶしをあてたまま花束を受け取った。笑いをこらえていた表情がうれしそうな顔に変わる。

「で、だ……」

いかにも女の子らしい表情の結希に、不思議な違和感を感じながら沖田は切り出した。

「まず自己紹介。沖田玲郎、男子部二年B組、出席番号は……」

話を聞きながら自分の机の上の手紙の束に手をのばした結希は、手探りで一通を出した。開けた封筒を沖田にかざして見せる。見覚えのある宛名を見た沖田は頭に手をあてた。

「読んだわけ……なら話が早い」

今すぐにも消えたいのをぐっところえて、沖田は可能な限りシリアスな顔で結希を覗き込んだ。

「今度の日曜、つきあって欲しい」

ドアの外から聞き耳をたてているつばさが吹いた。思わずドアを細目にあけて覗く。とたんに分厚いマンガ雑誌が飛んできた。

「覗くんじゃねェ！」

手近にあったマンガ本を投げつけた沖田は結希に向き直った。結希は困ったようにうつむいてしまっている。沖田は目をそらした。

使っていない机の上の、リボンか何かで束ねられた手紙の分厚い束が目に入った。

——抜け駆けがバレたら命が危ないかな。

と考えて、沖田は間をもてあまして部屋を見回した。四人部屋に住人は一人。消灯後でスタンドくらいしか明かりがないため、暗い。

沖田は結希に目を戻した。

「空あいてる？ 次の日曜。なんか用事ある？」

結希はさらに悩んで口元に握った手をあてた。

「えー」女を口説くというのは何と面倒臭いのだろうと考えながら、沖田は結希の耳に口を近づけた。「ステキな一日を、約束するよ」

困ったような顔で沖田を見上げる結希。キザさ加減に自分で耐え兼ねてまともに顔をみられなくなりそうなのを必死にこらえている沖田に、結希ははにかんでうなずいた。

「やった……」

## ACT・6 戦闘準備

返事のないスチールのドアを細目に開けると、<sup>レミントン</sup>散弾銃の銃口と目があった。

荻窪の安アパートである。自前の情報網（と言うほど大したものではない）をフル回転させて占い師沙織のアパートを突き止めた平沢は、さっそく訪ねてきた。

表札の出ていないドアのインターホンを押したのだが反応がない。室内に人の気配は感じられないが、彼女はもともとあまり気配のない人間である。ノブに手をかけてみたら鍵はかかってないので、ゆっくりドアを開いてみた。隙間から中を覗くと、レミントンの太い銃口が目の前にあったのである。

視線を上げると、ショットガンを向けた相手の正体に全然驚いていない表情の沙織がいた。平沢は両手を上げた。

「こんな熱烈な歓迎ははじめてだよ」

沙織は無表情に銃口をおろした。平沢はほっとして手をおろした。

「誰が来るかくらいわかるんだろ。敵が攻めて来るとでも思ってたのか？」

「あなただから、よ」

沙織は、その細腕に似つかわしくないレミントンM870の金属製肩当てを折りたたんだ。平沢は頭の後ろをかいた。

「この優男つかまえて危険人物扱いはないと思うんだけど。まさか実弾入りかい？」

「ばん」

ストックをたたんだレミントンを平沢に向けた沙織は、そう言ってからドアを広く開けた。

「今日はお仕事じゃないの？」

「野暮な事は言いつこなし。どう、ちよつと遠出してみないか？」

レミントンを下駄箱の上に置いた沙織が、平沢に指鉄砲を向けた。

「ばん」

「ずぎん」

平沢はわざとらしく胸を押さえる。平沢の服装を上から下まで見た沙織は、平沢から体の向きをそらしてドアにもたれかかった。

「この寒いのにオートバイなんかやだ」

革ジャンにブーツ姿の平沢は、革手袋を握った手を胸にあててうやうやしく頭を下げた。

「この平沢、愛しい人に寒い思いをさせるほど不粋な男ではありません」

「だって、そんな格好じゃ、自動車は乗らないんでしょ？」

「夜までには帰れる。海に行こうと思っただけだも？」

平沢は沙織にウインクしてみせた。沙織は戸惑ったような口調で目を伏せた。

「今日はお店休みだけど……」

「ちょうどいい。都市まちの中の生活ばかりじゃ息が詰まっちゃうぜ」

「しようがないわね」

沙織は、微笑しながら顔を上げた。

「行きましょ」

「物騒なものは持っていかないよーに」

平沢がまた両手ホールドアップを上げる。

「着替えるから待ってて」

「道路したで待ってる。急がなくていいよ」

平沢が乗ってきたのは、サイドカーだった。

「なかなか、面白いのに乗ってらっしゃるのね」

Gパンに組み合わせたハーフコートの襟をあわせた沙織が不思議そうな目で言った。

フロントをアールズ・フォークに改造した前後十六インチタイヤのR100CSのBMW純正のサイドカーが、アパートの前の私道に停まっていた。

「お手をどうぞ」

黒いBMWの左側につけたサイドカーの風防をはね上げて、平沢は沙織の手をとった。エンジン

ンはかかっており、水平対向二気筒のエンジンは今にも止まりそうな排気音で、それでも確実に二拍子で回っている。

スポーツカーのような低いシートにすんなり収まった沙織に、平沢は軽飛行機用のような軽いヘルメットをかぶせた。沙織が手袋をはめていたので、おとがいに手をあてて上を向かせてアゴひもを締める。

「サイドカーは、はじめて?」

「ええ」

猫のように平沢に白いのどを見せたまま、目だけで沙織がうなずいた。

平沢は、クラブをはめるとサイドカーを発進させた。クラウザーの四バルブ・ヘッドにサンホセ仕様のデロルトキャブレター、独米混血チェーンの水平対向エンジンはサイドカーを楽にスピードに乗せる。

まだ昼前だが、都内の道路はいつも通り車でいっぱいだった。バイクと違って車と車の間を走り抜けられないため、流れに乗って走る。一般道を選び、首都高速へのランプを一つ過ぎた平沢に、沙織は不思議そうな顔をした。

「高速使わないの?」

「のんびり行こう」

この前の夜のような事があるから、逃げ場のない高速道路はあまり使いたくなかった。しかし、数十分後には平沢は第三京浜をアウトバーンでも走るような速度で南下していた。

そして、同じ日、珍しい飛行機が米軍厚木基地に飛んできた。

外形は、ごくポピュラーな戦略輸送機C-130ハーキュリーズである。しかしタンデム配置の主脚をおろしてB滑走路に進入してきたその四発ターボプロップのずんぐりした機は、全身をまるで軍艦のような灰色で包んでいた。

「よくもあんな化け物を借り出せたものだ」

冬にしては暖かい陽射しの中、散歩代わりにセフティゾーンの芝生に出ていたジルベスター博士は、聞き慣れた四発プロペラの音を響かせて降りてくる飛行機に手をかざした。

「今年のチームスピリットでフィリピンのアンダースン基地に来ていたのを、本国に戻る寸前で押さえました」

民間人のような私服に航空無線用のヘッドホンをつけたマツキが説明した。

「ハールバートの第一飛行師団には知り合いがいましたね。それで乗員揃えて送ってもらったんです」

AC-130H2、米空軍所属の「ガンシップ」のタイヤが接地した。

「しかし、ゲリラ掃討か基地奇襲作戦でも組まんかぎり、あんな化け物は使い途みちがないと思うが」

「対地攻撃用にA-10を借り出しそこねましてね」

マツキは事もなげに肩をすくめた。

「本国からでも空輸フエリーしてもらおうかとも思ったんですが、手間がかかりすぎるんですね。しかし、自衛隊のAH-1Sコップラだけじゃ戦力が手薄になるので」

ガンシップは、着陸を終わってタキシングに入った。

「アパッチはどうしたのかね？」

マツキは苦笑いした。

「ギアシャフトのテストとデモ用に來てたのを無理に借り出したのに、傷つけちゃいましたからねえ。基地司令ベースコマンドに大目玉くらいました、今、修理中です」

目の前の誘導路タキシング・ウェイに、ガンシップの巨体がステアリングしてくる。

「しかし、あんなものを何に使うのだ？」

ガンシップ、現用では世界最大の戦闘爆撃機。機体の左側面にずらりと重火器を備えた姿はまさに砲艦ガンシップである。

事もあろうに、戦車と同じ一〇五ミリ砲、海軍艦艇用の四〇ミリ機関砲を各一門、二〇ミリ砲二門を各種電子兵装とともに搭載、原形が輸送機のため積載量は空飛ぶ弾薬庫といわれるほど多い。

目の前を誘導されていくガンシップの機首のガラス張りのコクピットから、大きなヘッドホンをつけた赤ら顔のパイロットがマツキに手を振った。親指サムアップを立てるサインを返して、マツキはガンシップを見送った。パワーを落としたターボプロップのエンジン音を聞きながら、ジルベスタは口を開いた。



「日本中の基地を空っぽにするような勢いで戦闘機を集めとるようだが」

「S C Fから飛行中隊でも借り出そうと思っただんですがね」

マツキはシニカルな笑いを浮かべた。

「イエローサーチには基地司令から直接断られました、潜水艦隊にもあたってみたんですがカサンドラもナウシカも南半球、それもニュージールランドあたりまで出掛けてるんです。やっとアルテミスがベーリング海にいるのをつかまえましたら、あれはアンドロメダ級の最新艦で就航したばかりでしょう。哨戒任務だけの訓練航海中で、哨戒機しか積んどらんというわけです。仕方ないんで現地調達してるだけで、規定通り直接防衛に使うわけじゃありません」

「各基地から色々と文句が来とるようだな」

マツキは肩をすくめて両手を広げた。

「厚木の整備部も悲鳴あげてますよ、妙な機が次々と来るんで。まあ、それでもS C Fには地球を守るという大義名分がありますから」

「ははは……」

使い古された冗談に、博士は力なく笑った。

防空というその任務の性格上、S C Fには対地戦闘能力はない。S C Fの戦力は大部分が宇宙空間に在り、地球上にあるのは迎撃型潜水艦を主力とする、各国の空軍の水準をはるかに超えた能力を持つ航空兵力だけである。地上軍の構想もS C F創立の初期にはあったのだが、あまり必要が認められなかったのと、S C Fが必要以上に強大な力を持つ事を嫌った各国軍部の反対によ

り実現しなかった。

このため、幻となった地上軍と引き換えに、SCFはロシアの三軍、海兵隊及び州兵<sup>ナショナル・ガード</sup>を含む米五軍、NATO軍などのほとんどの世界の軍の装備と人員を、各国の支部の自由裁量で借用できる権利を得た。これはSCFの対地球非干渉の原則——これがあるためにSCFが超国家組織として存在できる——に触れるとして、とくに超大国の政府が最後まで抵抗し、結局、特殊条項第二項と呼ばれる条件をつけて妥協した。つまり、SCFが各国軍隊の装備を使用する場合、敵機迎撃（つまりUFOの迎撃）にはこれを使用できない。

もとより、UFOの迎撃に各国軍の現用戦闘機は使えない。高速格闘戦のみを考えて設計された戦闘機、UFOに対した時に最高の破壊力を発揮する対空兵装をもつてしても、戦闘を互角にもちこむのがやっとなのである。UFOは二〇ミリ機関砲やホーミングミサイルで片が付くような相手ではない。

ガンシップに続いて、米空軍のC-141スターリフターが着陸態勢に入った。博士は目を細めて暗緑色の四発ジェット機を見た。

「艦隊の大部分が南太平洋に行つとるようだな」

「南半球に、というべきでしょうね」

マツキは、航空無線の周波数を切り換えながら言った。

「正規の迎撃ミッションは最近になって激減しているのに、艦艇を特定の海域に張りつけっぱなしにしているようです。バミューダ（SCFの本部がある）は何を考えてるんでしょう」

「敵が会見を求めて来たという噂は、やはり事実らしいの」

博士は太陽を見上げた。まぶしくて、とても正視できない。

「それで、南天の探査をやりなおしとると聞いたが」

「詳しい事はわかりませんが、宇宙空間の方じゃ大騒ぎになってるようですね。それじゃ連中の母星は南半球の星座の中にあるんですか？」

マツキも、雲一つない空を見上げた。博士は首を振った。

「たまたま、その方向から信号が送られて来たというだけで、確証はないらしい。それに、もし仮に母星を発見しても、何年もかけて光速の何パーセントかに加速するような宇宙船で本土攻撃という訳にもいくまい」

SCFの有人宇宙船は、行方不明になったものを除けばまだ土星軌道の内側にまでしか到達していない。地球から火星への飛行でさえ、最接近時にタイミングをあわせても優に三カ月を越える。

「もし、異星人たちとのコンタクトが成功したら、どうなるんでしょうかねえ」

「コンタクトに成功する事が、即停戦につながるには限るまい」

博士は、空を見上げているマツキを見た。

「今まで宣戦布告もなしに戦争をしてきた相手だ。簡単に手を取りあえるとは考えない方がいい」

マツキは不思議そうな顔を博士に向けた。

「博士が悲観論者とは知りませんでしたよ」

「あまり希望というものを持たん性質でな」

博士はもう一度空を見上げた。

「飛行機でも見れば気分転換になるかと思つたが……基地内で軍用機を見ても駄目だな。君はまだここに居るのかね？」

「ガンシップの連中と顔を合わせてきます」

マツキは第三格納庫前に駐機したガンシップを指差した。

「では、わしは先に戻っておる。次の定時報告は午後だったな」

「基地外に出るのなら、無線か携帯電話を忘れないで下さいよ」

腕時計以外の機械を身に付けようとしないう博士に、マツキは肩から下げたハンディ無線をかざしてみせた。わかっているというように手を上げると、コートのポケットに手を入れて博士は歩き出した。四発ジェットエンジンの轟音を響かせて、スターリフターが着陸した。

太平洋高気圧のためからりと晴れた冬の空の下で、海は濃い青色をしていた。細かい砂の浜に、白い波頭を見せて波が寄せている。

まるで子供のような表情で、沙織は波打ち際で波と遊んでいた。平沢は、少し離れた所で煙草を吸いながらそんな沙織を見ている。

「——女の歳はわからん」

聞こえたように、沙織が顔を上げた。平沢に向くとニコッと笑った。

「わかられてたまるもんですか。べー」

手を後ろに組んで舌を出す。平沢は軽いショックを感じて目に手をあてた。

「まずい」

長いストレートヘアを海風に流した沙織が、たっぷりしたハーフコートのポケットに両手を入れてまっすぐに立っている。

間がもたないの、適当に手でも振った平沢の所へ沙織が小走りに来た。わずかに顔を上気させながら、ささやくように口を開く。

「この近くにおいしい店があるの。——行かない？ お昼御飯」  
「参りましょ」

古都・鎌倉。

由比ヶ浜から、鎌倉のメインストリートである若宮大路を経て八雲神社方面への脇道に入る。隣り合う八雲神社、別願寺、安養院の前を過ぎて左に折れると、観光マップからも忘れられたような古い街並みが続く。

すり切れて文字も読めなくなってしまうような道標の建っている三叉路の、相当に古ぼけたそば屋の前に、平沢のサイドカーが駐めてある。もとは紫色だったのだからとつくに色褪せて白くすりきれたのれんには、達筆な行書で筑紫庵と書いてある。

今にも破れ傘<sup>かさ</sup>の素浪人や旅姿の薬売りが出てきそうな時代がかった店の中で、平沢はすっかり黄色くなった畳の上のせんべい座蒲団にあぐらをかき、焼き杉の卓をはさんで沙織と向かい合っていた。

「この手の店にお詳しいとは存じませんでしたか」

「そーお？」

卓に両肘をついたセーター姿の沙織が面白そうに答える。平沢は、すっかり頭の中を見透<sup>す</sup>かされていくように感じながら話を続けた。

「暗いバーで酒ガブ飲みしてるのしか見たことがないもんで」

沙織は目を閉じて首を傾<sup>かし</sup>げた。

「どーせ」

「一般庶民の食い物には縁がないんじゃないかと」

「それじゃあたし、かすみでも食べて生きてるのかしら？」

沙織は、番茶を一口飲んだ。平沢は沙織を見つめたまま腕を組んだ。

「そう見えないこともない」

「本気で言ってくれてるのかしら。だとしたら、ありがと」

京友禅の着物を着たおかみさんが、鎌倉彫の盆に益子焼の井を運んできた。

「で……」

割りばしを割った平沢は、月見そばを食べはじめた。

「占い師の前は、何をしてたんだ？」

「ご想像におまかせ」

沙織はとりあわない。ごく普通の女子大生のような顔をしてたぬきうどんを食べる。うどんを食べてもさまになる女性など、めったにいるものではない。

「外国にいた？」

平沢は、頭に浮かんだイメージを、そのまま口に出してみた。

「香港か、上海か——」

うどんを食べかけて、沙織は顔をあげた。飲みこんでから、口を開く。

「そんな風に見える？」

「どこにいても合いそうだけどね」

平沢は、自分が今までに行った事がある場所のイメージに、彼女をあてはめてみた。北ヨーロッパ、中東、南米——

「月なんてどうかしら？」

まるで平沢の考えを読み取ったように、沙織が悪戯いたづらっぽい瞳で訊きいた。平沢はどきっとして、そばをかきこんだ。

「かぐや姫とは知らなかった。それとも、天女かな」

「お姫さま？ まさか」

笑いながら顔を伏せた沙織の頭の動きにつれて、長いつややかな黒髪が流れ落ちる。平沢は溜

め息をついて、残りのそばを片付けはじめた。

材木座沿いの湘南道路から市街へ入った古道具屋に、平沢と沙織はいた。

例によって薄暗く、ほこりっぽくかびくさい店内には、古伊万里の大きな絵皿、うるしの剝げかかった鞘に収められた日本刀、白鍵がすっかり黄色くなった自動ピアノなどがぎっしり並んでいる。

「意外とクラシックなのね」

壁のかなり高い所にかけてある、相当に退色した浮世絵の横の火縄銃を見上げた沙織が言った。

「火縄や短筒で戦争やるつもり？」

「まさか。じーさん、いねえのかあ」

平沢は薄暗い店の奥に呼びかけた。沙織は平沢から離れて、フランスの大道芸人が使いそうな手回しオルガンに近づいた。

「色々と妙なもんがあるから気をつけて」

オルガンの上に、小さなシャネルの香水のビンが何本か転がっている。その一つをとった沙織は、夜間飛行のラベルを読み取ってフタに手をかけた。

「今日はまた、えらい別嬪さんと一緒じゃの」

しわがれた声とともに、沙織の手からビンが消えた。



「こいつはただの香水じゃない。うっかり吸い込むととんでもない事になるでの」  
骨ばった手が小さなビンをもてあそんでいる。人のよさそうな老人が、沙織から平沢に目を移した。

「ずいぶんと久し振りだの。親父さんは元気かね」

「しばらく会ってない。じーさんの方が詳しいだろ」

平沢は肩をすくめて老人に向き直った。

「注文の品は入ってるか？」

「うちで揃そろわん物はない、とゆうとるじゃろ。入っとるよ」

老人は、綿入れのふところから大福帳を取り出した。ちよつと失礼と言いながらびんを元の場所に戻す。

「一丁前に色気づきおって、このエロガキが」

「じーさん」

平沢が苦い顔をするのも気にせず、老人は沙織をじろじろと見上げた。

「この坊主には気をつけた方がいいぞ。陰で何人泣かしたるか、見当もつかん」

沙織は微笑してうなずいた。

「気をつけます」

「じーさん！」

つかみかかろうとする平沢を軽く大福帳ではたいて、老人は歩き出した。

「自分の目で確かめてみるがいい。ついて来い」

「あいよ。——じーさん、ついでにさっきの香水もくれないか？」

平沢に振り向いた老人は、ヒッヒッと笑い出した。

「邪道な奴じゃの」

あとについて歩き出した平沢に、沙織が追いついてくる。

「さっきの香水の中身って、何なの？」

平沢は困ったような顔をした。

「いや、何でもない」

「何なの？ もし開けてたら、あたし、どうなったのかしら？」

困り果てたという顔で、平沢は沙織の耳に口をよせた。一言だけささやく。

「媚薬」

んま、と目を見開いた沙織は、ついでのこと自分の肩に回っていた平沢の手をいやというほどつねりあげた。

「吸ってた方がよかったと思ったんでしょ」

「もちろん、あ、いやそんな、ははは」

店の裏手にある、古い土蔵を改造したらしい倉庫の中は、これも例によってほこりっぽい匂いがした。ただ、店の中と違ってそれに鉄の匂いとかすかな火薬の匂いが機械油らしい匂いととも

に闇の中に漂っている。

本能的に、そこにあるものの危険を感じ取った沙織は、はっとして天井を見上げた。かすかな火花の音とともに、天井に照明が入った。

「……あきれた」

沙織は目を丸くした。

「どこの国と戦争やるつもり」

頑丈そうな木組みの棚がいくつも並んでいる。その中に、一見無秩序に各種の火器が並んでいた。箱の各種弾丸、ピストル、ライフル、軽機関銃。

反対側の棚にはバズーカ砲、手榴弾に対戦車ライフルらしいのまで転がっている。平沢は沙織に振り向くと、両手を広げてみせた。

「あのじーさんに頼めば、核ミサイルだろうが中性子爆弾だろうが手に入れてくれるぜ」

「戦略兵器となると、相当に高くつくがの」

明かりをつけた老人が現れた。棚の上の段から、手許を見もせずてもとに小さなピストルをとる。

「しかし、護身用ならば安い。デリンジャーなどいらんかの？」

「飛び道具って、得意じゃないから」

「ほれじーさん、余計なモノ勧めないでくれ、彼女は平和主義者なんだから」

「そりゃあ悪かった」

老人はデリンジャーを棚の上に放り上げた。平沢をこづいて小声でいう。

「坊主の相手にしちゃ珍しいタイプだの」

「うるせっての。早く品物見せてくれ」

「こっちじゃ」

「あなた、何考えてるの？」

沙織が平沢に流し目をくれた。平沢はあさっての方を向いて口笛を吹いている。

「M 67九〇ミリ無反動砲四門、対戦車榴弾十二発、XM一七四オートマチックグレネードランチャー二門、十発入り弾倉四つ、M 19六〇ミリ迫撃砲五門、榴弾十五発」

むき出しのコンクリートの上に、太い砲身を持つ重火器が並べられていた。バズーカにロケット弾らしいものまである。老人は大福帳をめくって、リストの読み上げを続けた。

「手榴弾は四ダース、そっちのダンボールに入っとる。MG 34機関銃一丁、こいつは中古だが手入れは充分してある。いきなり大戦時のドイツ製が欲しいなどと言って来るからびっくりしたぞ。弾丸は五十発装弾の金属ベルトが五つ——もっとあった方がいいかな？」

「注文通りのタマなら充分だが？」

「注文通りの高速徹甲弾じゃ。並の装甲板なら楽に貫けるが、銃身の方はベルト四つ分以上の保証はできん」

「まあ、そんなもんだらうな。それでいい」

「M 60機関銃一丁、弾丸五百発、とりあえず今日揃っとるのはここまでじゃ。残りも明日いっば

いには入る」

「ちゃんと入るんだらうね」

「まかせておけ。——これは、持って帰るかね？」

「冗談じゃない」

小型トラック一杯分はありそうな武器の山を見た平沢は、げんなりした顔をした。

「例の所に届けといてくれ。配置はこっちでやる」

「よからう。それでじゃが……」

老人は、平沢から離れて他の所に置いてある武器を博物館の陳列物でも見てるように眺めている。平沢の袖をひいて声をひそめる。

「坊主、お前さんエライの相手にしてるようだな」

「熱烈でね、困ってるんだ」

「米空軍のF-16Cが三沢から厚木に来るし、北海道にいるはずのAH-1Sが入間に一個小隊ばかりおる。朝霞の七四式戦車も妙な具合にスタンバイしとるそうじゃ」

平沢は顔をしかめただけだった。

「まあ、M1戦車やレオポルドⅡでも持ちこまんだけ平和だかの。どんな化け物が出てこんともかぎらん、気をつけるがいい」

「おや、珍しく温かいお言葉。肝に銘じときましょ。さてと」

小柄な老人の顔の高さにあわせてかがんでいた平沢は立ち上がった。

「いつまでに届けておいてくれる？」

「今日の夜までには新宿の事務所に置いといてやろう——そうそう、新宿はぶっ壊されたんだっ  
たのう」

「思い出させないでくれ」

「新しいねぐらは渋谷だとか言っておったな。まかせておけ」

「頼んだ。それじゃ」

老人と握手して、平沢は沙織に声をかけた。

「どれか試射してみるか？」

棚の向こうから顔をあげた沙織は、肩をすくめるとぶるぶると首を振った。

## ACT・7 国立ランデブー

「はっくしょん！」

ノブは大きなくしゃみをした。そばで榊が心配そうな顔をしている。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫——はっくしょん、くちゅん、くしゃん、っくしょん」

ノブが立て続けにむせかえる。

「ほんとーに、大丈夫か？」

驚いた顔をしている榊に、はれぼったい目をしたノブは自信なさそうにうなずいた。

「くちゅん」

鼻の頭が真っ赤になっている。榊は熱をみるようにノブの額に手をあてた。

「今年の風邪は性質悪<sup>たち</sup>いってよー。大丈夫かい？」

「あんまり大丈夫くない……」

暖かそうな白いマフラーを巻いたノブが、手袋をはめた手のひらを額に重ねた。

「熱、ある？」

今度は自分の額に手をあててみた榊が首を傾げる。

「熱っぽいのは確かだけど……帰って寝てた方がいいんじゃない……」

「大丈夫、わたし健康！」榊の台詞をぶった切って、ノブはきっぱりと宣言した。「くしょん」

「言葉に説得力とゆーものがまったくないんだけど」

「絶対帰らないんだからあ」

力一杯首を振る。榊は溜め息をついた。両手をあげる。

「はいはい、負け。それじゃどっかあったかい所でも入ろう」

午後といっても、国立駅前は学生でごった返していた。沖田のデートコースの下見という名目で、ノブを連れて駅前の『明夢』と木彫りの看板の下がっているガラス張りの喫茶店に入った。

「出かけてったあ!？」

新聞部部室から432号室に戻ってきたつばさは声を上げた。同室者で、宿題のレポートに手をつけていた霧野深雪は、あぐらに座っていた椅子を回して振り向いた。

「そだよ。彼氏と駅前行くんだーって張り切って出てった。元気なのはいい事だ、うん……どしたの、つばさ？」

つばさは頭を抱えた。

「まったくあの子ってば、自分の立場とか状態とか全然考えないで突っ走るんだから。風邪だアレ



だって騒いでいたのはどーした!？」

「あ、あたしに迫らないでほしい」

迫力のつばさに姫こと深雪がたじつと後ずさる。思わず笑顔をひきつらせながら、

「榊くんと会うってんで、どっか飛んでっちゃったんじゃない?」

「その程度でどっかに飛んでくよーなもんか! ったくあのガキやあ……」

「時と場合によると飛んでっちゃうんじゃない?」

「飛ぶかー!？」

「つばさも彼氏作れば? 少しはその感じわかるかも」

つばさは姫の襟首をつかみあげた。

「あたしが欲求不満だとしても言いたいのかー」

「だから、そう言ってる」

「あたしや、沖田か!」

「わ、沖田くん欲求不満なの! わーい、今度ユーワクしちやおっと」

「ちがうー!」

「そーなんでしょ」

巨大組織がどうのこうのという話には、SFマンガよりも縁のない姫は、醒めた眼をつばさに向けた。

「他人のデートが気になるなんて欲求不満がたまってるショーコよ。沖田くんでも誰でも迫って

みたら？」

「あーん、そーじゃないんだってのにー」

「そーに決まってるんだ」

「ちがーとゆーとんのがわからんのかきさま！ ええい、転校生はどうした」

姫の前で駄々をこねてたつばさが、突然窓から首を出した。443号室は同じ階のはじにある。

「転校生？」 姫が妙な顔をした。「和紗さんが、どうかしたの？」

「あ、いた……」

つばさが気の抜けた声を出した。和紗結希は桂木荘の前の中庭で、石造りの壊れた噴水をスケッチしていた。つばさは窓枠に肘をついた。

「つばさでしょ、あの人に原稿の依頼したの」

「そーですよ」

「なんか最近、いっつもイラスト描いてるよ。たくさんもらったラブレターの返事も書かないで」

「本気でやってくれろといんだけど……」

つばさは結希を見て溜め息をついた。

「なんか忘れてる気分だなー。何だろ……あーっ忘れてた！」

「な、なに、どうしたの？」

あまりの大声に、レポートに戻っていた姫が思わず椅子から立ち上がった。

ノブを狙ってるSCFには、転校生しかいないわけではない。あわてて部屋から飛び出そうとして——つばさは思い直した。

「やめた。んなのまで相手にしてたら体がいくつあっても保もちやしない」

「誰を相手にするの？」

話がまったく見えない姫が、実に不思議そうな顔をしてつばさに訊いた。

「だあれ？」

「誰もいない、だれも」

そうそうSCFが三多摩をうろつくはずがないと考えて、つばさは自分を納得させた。

「どうして日本の街ってな、こんなにゴチャゴチャしてやがるんでい！」

テキサス訛なまりの乱暴な米語スラングで、SCFスターボウ部隊七〇四宇宙戦術戦闘機小隊所属パイロッ

ト、マイク・ウォーレンはマツキにかみついた。

「LAで攻撃アタックヘリに追い回された時だって、ビルとビルの間はもっと開いてたぞ」

「今回は、敵機は全部こちらで引き受けるっていうてるだろう」

マツキが慣れた調子で応じた。

「手近にサンダーバーズ級のファルコン・パイロットパイロットが君しかいなかったんだ」

「だからって慣熟飛行も下見もなしで夜間飛行ってのは……」

米空軍の曲技飛行チームと同じ腕といわれて気分が悪いはずがない。マイクのトーンはあっさり  
と落ちた。

「セスナ172か206でも貸そうか。下見くらいはできる」

「ファイティング・ファルコンは貸してもらえんのか」

マツキは苦い顔をした。

「練習飛行でもおまえがやると戦闘飛行コンバットフライトになるだろう。まして下見だとこの街のすぐ上で超音速  
やりかねん」

「高度一〇〇はとるが」

「一〇〇フィート（約三〇メートル）とってどーなる！」

「それでもって……ねえ」

榊は話を中断してノブをちょいちょいとつついた。さっきから気になっていた、カウンター  
で声高に英語で話し合っている二人連れを指差す。

「あれ、どっちか見覚えはない？」

ノブは、はれぼったい目で二人を見た。外人と日本人の二人連れで、二人ともかなり背が高  
い。

「外人さんの方？」

「じゃなくて日本人っぽい方。どっかで見たよーな顔なんだけれど……」

「そうかしら？」

「そうだ、X-29の実戦テスト型をエドワースから空輸<sup>フェリー</sup>してもらって……」

マイクは空軍時代から索敵能力に異常に優れていた。背中に目があるという噂からESPが発覚したくらいで、気配には敏感である。視線を感じたマイクは、振り向いた。通路の観葉植物越しにこちらを見ていたカップルがあわてて目をそらす。

「おいマツキ」

マイクは、煙草に火をつけたマツキに窓ぎわのテーブルの方向を示した。

「あの手の高校生のカップルに知り合いは？」

「この街にはいないはずだが」

何の気なしにそちらを見たマツキの目がすうっと細くなった。思わず煙にむせたりして、あわててスーツの胸ポケットからサングラスを出す。

「例の女の子だ」

「なに？ 誰だって？」

「君の同類だ。あれが今回の騒ぎの元凶になってる娘だ。ノブ・コマキだよ」

「へえ、あれが。博士から写真見せてもらったはずだが」

遠慮も何もなしに、マイクがぶしつけな視線をノブに向けた。

「東洋人の探偵とかが<sup>ルナベース</sup>月からシャトル乗り逃げした時のエスパークか。男子高校生の方は？」

「コマキの誘拐<sup>キッドナップ</sup>作戦の時に見た覚えが……ヘリにまぎれこんできた奴だ」

「ふーん」

マイクは、ほんの冗談のつもりで、こちらを見たノブに派手なウィンクを送った。

「あー！」

とたんにノブが大声を出して立ち上がる。

「やばい、ばれた」

カウンターの上に札を投げ出したマツキは、サングラスをかけたまま素早くマイクを引っ張り出した。

「思い出した、ヘリコプターに乗っていた少佐みたいな人！」

彼女は軍人というと『エロイカより愛をこめて』などの少女マンガしか思いつかない。

「SCFだあ！」

ノブの一言でやっと思い出した榊がテーブルから飛び出す。

「早く乗れ！」

とつづく喫茶店の外に出たマツキは、道路に停めておいた愛車メツサーシユミットKR200のドアを風防<sup>キャノピー</sup>ごと右側にはね上げた。二〇〇cc単気筒のスクーターもどきのエンジンをかけながら前後<sup>タンデム</sup>配置の座席にマイクを押し込み、戦闘機のようなキャノピーを右からかぶるように閉めつつ急発進する。

お客さんと呼び止めるウェイトレスの声も無視して榊が外に飛び出したころには、メツサーシ

ユミットの赤いシルエットは遠く大学通りへ消えるところだった。

「——にしても、何しに来たんだ……」

段も踏まずに飛び降りた赤レンガの階段から店の中に戻ろうとして、榊は出口に立っているノブに気づいた。

「どうしたの？」

「出よ。……はずかしい」

歩道へ降りてくる。

チャンバーを装備したRGV250Γのエンジンが猛烈な悲鳴をあげていた。

カウリングをすべてはずされた、銀色のアルミフレームに抱かれた二ストV型二気筒のガンマがレース用のセンタースタンドで立ったまま、すさまじい勢いで白煙を噴き出している。

「何か言ったかあ？」

二連装のCRキャブレターから手を離れた沖田が、口にメガホンを作って喚いた。全開音に顔をしかめて、わざとらしく耳を塞いでいた榊が怒鳴り返す。

一応聞くふりをして耳に手をあてていた沖田は、セパレートハンドルのスロットルを全開にしていた南部に親指を立ててみせた。そのまま親指を地面に向け、アクセル全開のサインをする。上野のアメ横で手に入れた米海軍の空母の艦上作業用ヘッドフォンをしている南部がうなずいて、そろそろとアクセルを閉じかけた。

「何言ったか、全然聞こえねエ」

油のついた手を雑巾ぞうきんでふきながら、沖田は立ち上がった。

「鈴鹿のコース持ち込むんなら、エンジンよりギア改造やった方がいいんじゃないかねーか？」

「クロス・ミッションなんかあるか。スプロケ換えるだけで何とかならんか？」

「予算はどこに行った？」

「圧縮比上げるのとチャンバーで消えた。バックステップは部員から提出させたし、カウルは予算ねないからノーマル使おーって話もあるんだぜ」

「参加する事に意義があるってか？ そりゃ腕次第で三〇秒台前半出せるかもしれないけどF3で勝つつもりならやっぱり四気筒を……」

「どこにそんな金あるんだっての。レース一回でいくら飛んでっちゃうか知ってるか？」

「聞かないでおこー」

「何をやるおっての？」

素人にはまったく意味不明の会話に、榊が訊いた。横のノブはまだガンマのエンジン全開の耳鳴りが残っているらしく、首を傾げて耳をとんとたたたいている。

「自動車部で鈴鹿の耐久四時間出るんだと。F3クラスで250のニストが勝ったって話は聞いたことないんだが」

「金がないんだっての」南部が歯をむき出す。「GSXRやVFRなんて改造してたら、年間予算が赤くなって飛んでいくわい」



「よーするにレースですか」

「二ストで勝つのはむつかしーと思うんだが」

「マッハの750乗ってる奴が何をゆー」

「るせー。で何だ榊、彼女連れて」

「あのな、えーと……そうだ。SCFがうろついでる」

「なに!？」

「SCF? なんだそれは?」

事情を知らない南部が訊くのも無視して、沖田は榊に詰め寄った。

「どこで、誰が! なんでうろついてんだよー」

「えーと、駅前で、この前さらわれた時へりに乗ってたのが、妙な外人と一緒に——理由なんかオレが知るか!」

「だから不用意にうろつくなとゆーといたはずだ。——小牧ちゃんは無事か」

くしゃみなんかしてるノブを見てほっと息をついた沖田に、南部がかみついた。

「事情を説明せんか事情を! 何の話だいたい?」

「個人の貞操に関わる重要な問題なのであとで説明する。榊ちょっと来い」

わけのわからない事を言って南部を煙けむに巻き、沖田は榊をひきずって駆け出した。ひきずられていく榊は南部にぱたぱたと手を振り、マフラーを巻き直したノブがそれを追う。

「個人の……あいつ何と吐ぬかした?」

アイドリングを続ける裸のガンマとともに取り残された南部は首をひねった。  
「何なんだ、いったい」

「それじゃ転校生以外にもSCFが動き出してんのか？」

「さあ？」

そんなことを知るはずもない榊は肩をすくめた。

「こっちの顔見るなり逃げ出したけど」

夕食時までにはまだ時間がある。男子部の食堂には人影はない。

「どうする？ あの探偵に連絡しとこうーか」

「あのエロ探偵、今いちアテになんねえんだよな」

食堂の隅のテーブルで、沖田は自動販売機の紙コップに目を落とした。

「まずいなー、日本にいるSCFの連中なんて知らんぜ」

榊は、隣に座っているノブを見た。テーブルの上のカフェオレに両手をそえているが、あまり表情がない。

「どうする？」

「はん」

沖田はコーヒーを持った。

「今回は地元だし、まださらわれた訳でもねえ。この前のリターン・マッチだ。現代高校生の怖

さ教えたろーじゃないか」

「怖いのは沖田だけだと思うが」

「るさい。手はじめに転校生でも誘拐するか」

「転校生？」ノブが顔をあげた。「それ、なあに？」

沖田はあわてて口を押さえた。

「ノーコメント！ 個人の貞操に関わる重要な問題ゆえ」

「ふーん」

「ほーお」

405号室の机の上に地図帳を拡げた真田がしたり顔でうなずいた。

「かなりやばいんでないかい？」

「やばい」

沖田はあっさり認めた。

「つまり、下見もなしで逃げ出してきたわけだ」

「いやー、彼女、風邪がひどくって」

榊が笑ってごまかそうとする。真田は沖田を半眼でにらんだ。

「おぬし、どーすんだ、日曜のおデート？」

「当然決行する、なんなら逆に人質にとるか？ あの転校生」

「たわけ。決行すんのは当然じゃ。おぬし女の子誘っついて、本気で市内ですますつもり?」  
「どこかまずいところでも?」

「市内でそーゆー事して、沖田が出し抜いた男どもに申し訳が立つと思っとなのか」  
「言える」

榊が腕を組んでうなずいた。

「抜け駆けの罪は海よりも深くブラックホールよりも重い。やっぱり場所変えたら」

「立川とか八王子にでも行くか?」

「どーして発想が二十三区から離れるんだよ。行くなら吉祥寺とか新宿とか、渋谷原宿六本木くらい言ってみろっての。車借り出して海岸行くとか」

「探偵に頼んでクラシックカーでも借り出したら」

沖田は、目一杯暗い顔をして額に手をあてた。

「女の子とどっかに一緒に行くってのに、こんな暗い気分になるとは思わなかったよ」

運命の朝は、いつもドラマチックにはじまる——わけがない。

死んでもいやだ、あんなの着て歩くくらいなら地雷抱えて自爆してやるとの必死の抵抗で、何とか白のタキシードでの外出を免れた沖田は、二年生になって四回目の模擬試験に出撃していく  
榊と真田を部屋から見送った。

一年生では二回、三年になると前後あわせて六回行われるこの学校主催の模擬試験は、成績に

は直接の関係はない。にもかかわらずおいそれとエスケープできないのは、付属高から大学への進学の際、模試の結果が推薦入学の判断基準として用いられるためである。

だから、特に結果が重要視される三年後期の模試ともなると、これをパスするのは進学をあきらめるかそれとも成績優秀で保証付きになったかで、そうでなければ自殺行為である。

「ほんでは、しっかりと結果を報告するよーに」

「うちこそしっかり解答二枚出しとけよ。将来がかかってんだ」

「大義名分掲げてサボるんだからゼータクいわないの。ではお達者で」

「うっかり手エ出して吹き飛ばされても当局は一切関知しないのでそのつもりで」

無責任なはげましの言葉を残して、榊と真田は部屋から出ていった。

テスト開始時間まで粘ってから、誰もいないはずの金紺館から抜けだす。

待ち合わせ場所の裏門に時間ぴったりに行くと、和紗結希は先に来ていた。

そして同時刻、グリニツ<sup>N</sup>標準時<sup>T</sup>で午前零時をもって、SCFの各基地は同時多元通信システムを使用した重要度<sup>A</sup><sub>トリプル・ユー</sub> A Aの会議を開始した。

運営本部のあるスイス・ジュネーブ、統合作戦司令部のある実質的な地上本部である北大西洋バミューダ海底基地、南太平洋アレキサス諸島基地イエローサーチ、南極大陸クインモードランド基地ホワイトサーチ、そして地球衛星軌道上ラグランジュ点の機動要塞ブルーサーチ、月面へヴィサイドクレーターのルナベース。火星クリュセ平原上のレッドサーチは、火星が遠日点にあ

るため二〇分以上のタイムラグがあったが、それでも双方向通信で参加していた。

その他、各国の軍事基地を使っている各支部の主要メンバーや、各海域——といっても現在、大部分の艦艇は南回帰線以南の南太平洋、南インド洋、南大西洋におり、一部の特殊艦はウェッデル海、ロス海などの南極圏にまで入り込んでいた——で作戦行動中の艦艇に乗り込んでいるシンクタンクまでが、衛星回線通信基地の中継で同時参加している。

SCFは、その戦略体系上、各地区ごとに独立した指揮系を持っている。基本システムに従った各基地ごとの独断専行がその主なシステムであり、これは緊急迎撃任務を主眼とするSCFの性格上最も有効なシステムとされている。そのため、全軍合同の作戦会議というものは非常に珍しく、今回のような全部署の所轄責任者まで集めたような会議の前例はなかった。

『さて』

二週間も前から、自身が司令官であるルナベースから機動衛星ブルーサーチへ飛び、そこに詰めつきりだったキーラーは、TV回線を通じて前置きもなしに口を開いた。

彼の画像と音声は主要数カ国語の同時通訳と猛烈な暗号変換をかけられて地球上の各基地及び月面ルナベース、そして光の速度の分だけタイムラグをおいて火星有人基地、太陽系惑星軌道上の有人観測基地にまで中継されている。

『今回の話題は、異星人との接触の結果と、それに伴う、場合によってはSCFそのものの存続に関わる、戦況の変化である』

諜報畑の出身であるキーラーは、必要最低限の地味な言動とできる限りのすべての事をなすと

いう主義の強引な行動で知られていた。その「氷細工の死神」がいきなりこう切り出したものだから、出席者たちはキーラーが宗旨<sup>しゅうし</sup>換えをしたのかと驚いた。しかし後に、彼らはこの表現が充分に控え目なものであったことを知ることになる。

落ち着いたクリーム色のプッシュホンが、やわらかな音色のベルを鳴らしている。コール二回で、ゆったりしたガウンをまといグラスを持った沙織が受話器をとった。髪の上から耳にあてようとしてから髪の下に受話器をくぐらす。

「はい？」

耳を傾ける。

「います。ちょっと待って下さい」

サイドボードに受話器を置いて、沙織は居間へ戻った。ソファに斜めになって寝息をたてている平沢の横へ腰をおろし、肩をやさしく揺する。

「……んん？」

薄目をあけた平沢の前に、紗織はグラスに満たしたトマトジュースを差し出した。

「お電話よ」

「ありがとう」

グラスを受け取った平沢が、こめかみに手をあてて顔をしかめる。

「くっそお、酔いつぶしてやろうと思ったのに、な」

ガラスのテーブルの上に、空からになった酒のビンがいくつも並んでいる。平沢は頭を振ってジュースを一口だけ飲んだ。

「うっふ」

悪戯いたづらっ子を見守るような目付きの沙織にグラスを返し、平沢は慎重に立ち上がった。

「うえ……床がアクロバット飛行してるぜ」

「墜おちないように気をつけて」

一挙動ごとに内臓が渦を巻いて腹の中をかき回す。平沢は地獄の釜かまの気分を味わいながらのろのろと受話器をとった。

「はい、三途さんずの河原、本日は死者の受け付けはしておりません、またのお越しを——」  
「どうやら失敗したようだな」

まるで平沢を目の前にしているように、マスターが笑いを含んだ口調で言った。

「るせえ。余韻楽しむ間も置かずにコール入れやがって、何の用だ」

「飲み過ぎは体に毒だぞ」

「二ガロンや三ガロンでおかしくなるようなやわな体はしとらん。用件を早く済ませろ」

「いい知らせだ、作戦名カーニバル・ナイト、作戦起動は今日の夜八時」

「なんの作戦だ？」

『おまえの相手だ。SCFが星南学園を中心として、物量作戦に出る』

不快感が一層強くなった。平沢は顔をしかめて受話器を持ち換えた。



「違約金の計算と後継者の選定を頼む。おれは今夜最後の西回りでハネムーンに出掛けるから探さないでくれ」

『夜逃げのセンチメンタル・ジャーニーにならんように』

風呂敷包みに着のみ着のまま成田空港の北ウイングにいる自分を想像して、平沢はひどい頭痛に襲われた。

「情報はそれだけか、切るぞ」

『もう一つ。二、三日中にCETIセチの成功に伴うSCFの動きがつかめるはずだ』

「デカ目のモンスター相手の長電話なんぞに興味はない」

『商売仇の経営方針くらい知っておけ。コンタクトの結果次第では地上部隊の配置や戦略にかなりの変更が出されるかもしれん』

「不可侵条約でも結んで世の中が平和になるように伝えてくれ」

平沢は電話を切った。

キッチンの方から音が聞こえてくる。平沢は痛む頭を押さえてキッチンに行った。

スイングドアを体で押し開けると、沙織がフライパンで何かをいためている。

「死刑囚に判決が下った。今夜までの命だ」

「洗面所はあっち」平沢に背を向けたまま、沙織はタオルを放った。「すぐ朝御飯作るからいらん」

また腹の中がのたくりはじめた。食欲などあるはずがない。

「だ・め」肩ごしに振り向いた沙織が、平沢を優しくにらみつけた。「戦争おしごとやるんでしょ。負けでもいいの？」

「だんだん人生に未練を感じてきたよ」

「見えるか？」

「んと、あれだろう？ ちょっと双眼鏡貸して……おー、見える見える」

「っけど、何て女の子と座ってるのがサマにならない奴なんだろ。ムードってこと全然考えないんだから」

「は・は・はあ——」

「スッストップ息とめて！」

くしゃみの前兆を見せたノブの鼻と口を、つばさが素早く押さえ込んだ。

「大丈夫？ だから部屋で寝てなさいって言ったのに」

熱っぽい顔をしたノブが二、三度うなずいた。ティッシュを渡し、つばさは椅子の間から首をのばして観察にもどる。

籐製とうの椅子とスモークドガラスのテーブルが、明るい窓ごしにいくつも並んでいる。レジのあるカウンターをはさんだ反対側、隅に近いテーブルに向かい合って、沖田と和紗結希が座っていた。

「何話してる？」

榊が聞こえもしない会話に耳をこらした。

「聞こえるわきゃないだろうが」

「盗聴マイクでも付けときゃよかつたわ……わ！」

首を出していた三人があわてて身を伏せた。ぼーっとして遅れたノブを、榊があわてて椅子の陰にひきずり込む。

「転校生がこっち見た……見られたかなあ」

くしゃみしそうなノブの頭を押さえたまま、榊が首をすくめる。手鏡を取り出したつばさが手をのばして沖田と結希を映そうとする。

「見ーえまーすかあ」

「やっぱー……沖田あのかこっち見てやがる。しっし、誰もいないよ」

「あよいしょ」

真田が頭を低くして椅子から顔を出した。ローアングルから沖田たちを視界に入れようとゆっくり頭を上げる。

「気をつけて……見つかるわよ」

「承知の上……おー、額などよせて何ぞ話しとる……おー、ポケットに手を入れてタバコの箱出した。灰皿に手をのばして……あちゃ」

真田が首をひっ込めた。

「あー危ね。あやうく目線があうところだった」

「ばれたら苦勞が水の泡だ」

「わあっとるわい。では変装して……」

おしぼりをマスク代わりに口にあてて、真田がゆっくりと顔を出した。

「うわ！」

分厚いガラス製の灰皿が唸りをあげて飛んできた。ものの見事に真田の額を直撃して榊の胸に飛び込む。

「あた……」

「悪い、手が滑った」

向こうのテーブルから、椅子に横座りした沖田が手をあげた。額を押さえてのたうっていた真田は、榊がキャッチした灰皿をもぎって大きく振りかぶり、沖田めがけて投げ返す。

「どー手が滑りやここまで飛んで来るんじゃない！」

「怒るな、わざとだ」

飛んできた灰皿を受けとめた沖田が、素早くサイドスローで投げ返す。思わず椅子から滑り落ちてよけたつばさを素通りし、ノブに命中寸前で榊がキャッチした。

「んな所でキャッチボールをはじめな！」

コーヒーシュガーのポットを構えていた沖田と、タバスコをドイツ軍手榴弾風につかみ上げていた真田の動きが一瞬止まった。

「危ないじゃないバカ！」

電光石火の早業で、つばさが塩の小ビンをはね飛ばした。さっとよけた沖田の横を飛び抜けて、思わず硬直した結希の顔の横の壁にぶちあたる。

「何しゃあがる、こん人間凶器！」

「うわっうわっうわっ」

狙いを真田からつばさに変えて、沖田がポットを投げつけた。散弾よろしくコーヒーシュガーの粒を撒き散らしつつポットが飛ぶ。

「に、逃げようか」

お互いにさっとテーブルの下に隠れた榊とノブが顔を見合わせてうなずいた。あっという間に戦場と化した店内から脱出を計って動き出す。

「ほら見なさい」

スタジャンのポケットに手を突っ込んだつばさは、よたたり気味に歩いている。

「追い出されちゃったじゃない」

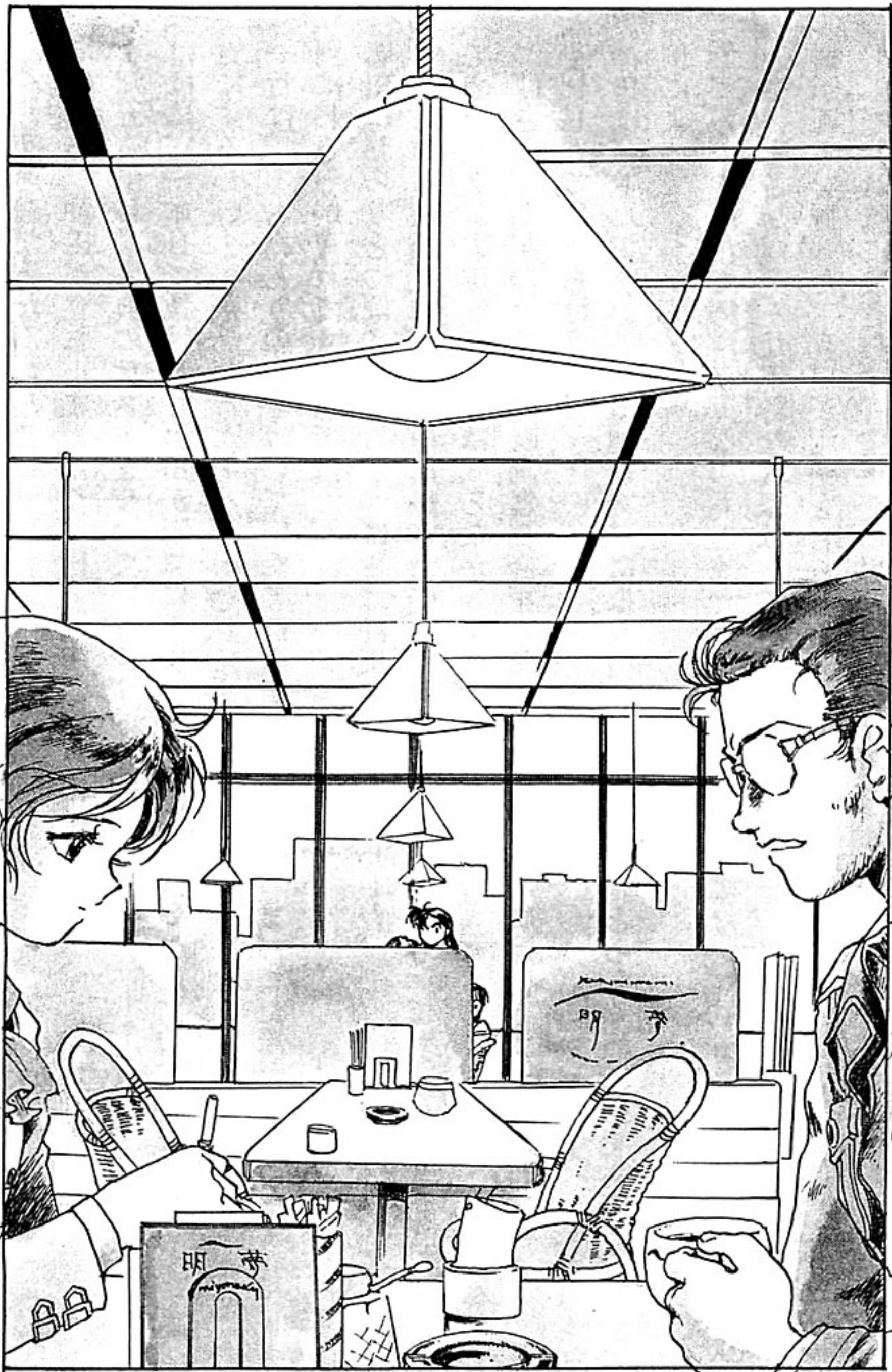
「普通、追い出されると思う」

ノブと二人で一団から離れて歩いている榊がぼそつと言った。

「はん、てめエのせーだ」

沖田が、つばさを横目気味ににらみつける。

「また行けない店が出来ちまったぜ」



「ほんと傍迷惑な男なんだから」

「てめェら」沖田が立ち止まるなり、榊と真田に振り向いた。「テストはどうした！」まだ五時限目、古典のテストをやっているはずの時間である。

「ははは、一本目で抜けた」真田が陽気に手をあげた。「細かいことは気にするな」  
「気にするわい！ 余計なもんぞろぞろ連れて来やがって！」

一行は、冬も終わりの街を歩いていた。商店街に吹く風は、まだまだ冷たい。

「別にわしらが連れてきた訳では」

真田はちらりとつばさを見る。つばさは沖田から顔をそらした。

「ヒマだから映画見に来たら沖田がいたのよ。何してるのかなと思って」

「てめェが文芸大作好きだとは知らなかったよ」

つばさは、二年のはじめの映画鑑賞会を「たるい」の一言で抜け出したクチのはずである。  
「それじゃてめェらは？」

沖田は、並んで歩いている榊とノブに振り向いた。榊がわざとらしく額に指をあてる。

「例によって、つかまった」

「で、どーすんだてめェら。このあとまだ、ずらずらついてこよってのか」

「いや、まさか、そんな不粋な真似はとてどもとてども」

榊が両手を振った。真田が両手を合わせる。

「どーぞ、お気になさらず、空気だと思ってお続け下さい」

「失せろ！」

沖田は喚いた。

「それとも何か、邪魔しに……」

それまで一言も口をきいていなかった和紗結希が、沖田に顔をあげた。

「ん、なんだ？」

「もう帰ります」

「え？」

「今日は楽しかったです。ありがとうございました。でも——」

結希は目を伏せた。沖田はかすかな既視感を感じた。

「本気だったら、もっとうれしかったな」

軽く会釈して、結希は来た方へ歩き出した。

「ちょ、ちょっと……」

一同の間を抜けて、歩み去る。

「あら行っちゃまった」

なんとなく啞然として小さな後ろ姿を見送った沖田が、額に手をあてたつばさにいやし目をく  
れる。

「てめエのせーだ」

「っさいわねえ」



つばさは、手首の内側の電算機付き腕時計を見た。二時を少し過ぎている。

「で、どーだったの、彼女？」

「どーもこーもねェわ」

沖田はげんなりした顔で頭に手をあてた。

「あんな無口なの、はじめてだ。全然口きかん。つばさおまえ、少し見習え」

つばさは物も言わずに沖田の背をどやしつけた。

「それじゃ何も話しなかったの？」

榊が訊いた。

「ろくに会話が成立しねェんだよ。イエスかノーかぐらいは動作でわかるけど、おかげでさんざん喋らされた。目一杯疲れた」

「あのチタンの神経と複合装甲の面の皮を誇る沖田が疲れたって」

榊は真田と顔を見合わせた。

「あな珍しや」

「疲れるわい！ あんな気イつかわされたのはじめてだ」

「結局まともなデートではなかったみたいね」

「はじめっから尾けてたんならご存知なんじゃねェんですかあ」

「何話してるかまで聞こえないもん」

「じゃあしやあと、こやつ……」

「いやー」

面白そうに沖田とつばさのやりとりを眺めていた榊が真田と握手する。

「どつき漫才はこの二人に限りますなあ」

「今度何とかしてこの二人、くつつかざるを得ない状況に追い込んでみよう」

「ンなおぞましい事たくらむんじゃねえ！」

「やってごらんなさいよ。二度と街ん中歩けないようにしてやるから」

「ひえー」「こわー」

「結局、収穫は何もなし？」

「あるか。ありゃ取調室に連れ込んだって落とすまでに時効になるタイプだ」

沖田はぶつぶつ言いながら歩き続けた。

「ったく、あれやっぱり探偵の冗談だったのか、どーも本気でエージェントやってるとは思えん」

「ねえ」

榊の袖を引っ張って、ノブが顔を上げた。

「沖田くん、本気じゃなかったの？」

「えーと……」

突然、答えにくい事を訊かれた榊は口ごもった。

「つまりその、個人の貞操に関する重大な隠し事なわけで、だからその、ほら、何て言うかつま  
りえっと……」

「あの人もSCFなの？」

「ちゅどーん！」

予想外の事をぼろっと言われて、榊はぶっ飛んだ。

「知ってたの!？」

ノブは目を伏せてうなずいた。

「やっぱ、そうなの……あは、そうかもしれないう思ってたあ」

顔を上げてかなり無理のある笑いを浮かべてみせる。

「でなきゃ、探偵さんや秘密組織の人たちがうろつくはずないし、沖田くんが本気でもない相手誘うはずもないもんね」

「意外と鋭いよーで」

沖田が突然、立ち止まった。

「俺やっぱ帰るわ」

「なんで？」

「疲れた。帰って寝る。それに」

沖田は一同を見渡した。

「このメンバーが揃ってる時はろくな事が起こらないように出来てんだ」

言ったとたん、けたたましい急ブレーキ音とともに小さい赤のミニクーパーがすぐ横で停車した。

「すばらしい運転テクニックだ」

前日の酒が抜けきっていない平沢が助手席で頭を抱えている。

「今度一緒に北米大陸横断ラリーにでもエントリーしないか」

のろのろとドアを開ける。小径のステアリングを握った沙織は、長いストロークを持つシフトノブをローギアに入れた。

「また今度ね」

歩道に降り立った平沢が、身をかがめて運転席を覗き込んだ。

「付き合わないか？ 昼には少し遅いが」

「遠慮しとくわ」

「そいつは残念。それじゃまた」

平沢がドアを閉めると、沙織は軽く手を振りながらミニクーパーの前輪を空転させて急発進した。ほっと息をつきながら、平沢は電柱に手をついた。

「女の運転はこわい」

「えー、重要な用事を思い出した。俺はすぐ帰るから、そーゆーことで」

よく訳のわからないシチュエーションで出現した平沢に手を上げて、沖田は歩き出した。

「そう急ぐな。大した用事じゃない」

「やだ、俺は帰る。この最悪の面子が揃って何も起きないはずがない」

「何も起きんよ。まだ今のところはな」

平沢は苦笑した。とたんにノブが立て続けにくしゃみをする。榊は寒けを感じてふるつと震えた。

「また何か騒ぎでも起こるとゆーのか」

「探偵、あの車<sup>クルマ</sup>運転してたの誰だ？」

沖田が時間稼ぎに平沢に訊いた。

「ガキは気にせんでよろしい。それよりお前たちこそ顔揃えて、何をやっつたんだ？」

沖田はにやりと笑ってみせた。

「ちよっとした作戦」

## ACT・8 戦闘前

「転校生を誘い出しただど!？」

平沢のおごり、という条件で入ったピザハウスで、平沢は叫んだ。自分自身の声が響いて、頭を抱える。

「SCFなんだろ、彼女。どうしても、そー見えないけど」

沖田はミックスピザの切れはしを口に放り込んだ。

「何てことをしてくれたんだ、おまえたちは」

「ろくな情報、教えてくれないんだもん」つばさが軽く言ってココアを飲む。「自分たちで動き回るしかないじゃない」

「お前らな……」

低い声で言った平沢が、そのまま言葉を詰まらせる。

「何ぞまずい事でも?」

沖田はレモンスカッシュに手を伸ばした。

「安心しろ、こっちで勝手にやったことだ、バイト料出せなんて言わない」  
「言わせてたまるか！　んなこっちゃんない、あいつはテレパスなんだぞ！」  
「え！」「うっそお！」

榊とつばさが声をあげた。沖田は思わずスカッシュを吹き出す。

「てればすとは何ぞや？」

一人フライドポテトをくわえた真田が訊いた。榊がぼんやり答える。

「以心伝心で相手が何考えてるか全部わかってちゃう人」

「ホントに？」

平沢はうなずいた。沖田が平沢にくっついてかかる。

「爆弾のプロだとしか言わなかったじゃないか！」

「手を出すなとも言ったはずだ」

暗い声で平沢が言った。

「まったく、テレパスを偽装デートに誘い出すとは」

「それじゃ転校生、気がついてたのに気づかない振りしてたのか」

沖田は転校生の最後の台詞を思い出した。

——本気だったら、もっとうれしかったな。

沖田は顔を伏せて目を覆った。

「はじめっからわかってたのか……」

「そんな」つばさがトーンの定まらない声をあげた。「それじゃあの子……どうして……」  
原稿を頼むのを口実にはじめて彼女の部屋を訪ねた時の、無表情な人形のようなだった転校生。つばさは絶句した。

「はん……それでか、探偵」

沖田が平沢に顔を上げた。

「SCFがうろついてるってのにどーも姿見ねえと思ってたら。テレパス相手じゃ、そばにもよれねえか」

「接近しても、あれじゃ手が出せん」

「テレパスならテレパスと、なぜはじめからそー言わん！」

沖田が平沢にくっつかかる。

「こちとら何も知らんと思っただけで転校生ひっぱり出したんだぞ！」

「まったく」

ただでさえ二日酔いの平沢が、さらに暗い顔して、アゴをなでた。

「下手にしゃしゃり出てこられると面倒だと思っただけ何も言わなかったのは正解だったぜ。とんでもない所から情報もれ起こされるところだった」

平沢は、沖田の顔を見上げた。

「忠告してやる。あいつは全部わかっている。だから、これに懲りておとなしく黙っている。知らんぷりして、何もするな」



「言ってくれるじゃねエか」

ほとんど無意識に、沖田の手がテーブルの上のナイフをつかんだ。

「やめなさいっての。一日に二回も騒ぎ起こす気？」

つばさがあっさりと沖田の手からナイフを抜きとる。沖田がつばさに向き直って何か喚わめこうとした時、榊がゆっくりと口を開いた。

「彼女は——あの転校生は、どの程度のテレパスなんですか？」

「秘密兵器の性能は、トリプル・エーAAAクラスの重要機密事項だ」

ノブが、榊にはっきりそれとわかるほどびくりと肩を震わせた。

「それじゃ、もう一つ」

ひざの上から落ちたノブの手をテーブルの下で握りながら榊は身を乗り出した。しっとりした細い手が小刻みに揺れている。

「あの転校生は——あの転校生の能力は、テレパシーだけ？」

探偵の、予想外に鋭い視線が真正面から榊を射た。首を振る。

「超心理学は管轄外だ。二つ以上の能力を同時に持ち合わせているエスパーというのは、ありふれた存在なのか？」

「知らないよ。いるかも知れんけど」

TNT換算で火薬二〇トン分に相当する力を持つエスパー。一人の人間が持ち歩ける兵器としては、あまりに危険な威力である。しかもその爆弾は、どんな信管で爆発するかわからない。平

沢は不快感が増すのを覚えた。

「とにかく」

平沢はテーブルに手をついて立ち上がった。

「今後一切、あいつに近づくな」

「そーゆー訳にもいかないんですけどね」

つばさが平沢から顔をそらす。

「それなら、自分の頭の中に気をつけるこったな。何を考えようと、あいつには筒抜けなんだから」

「便利でいいわね」

平沢は口をゆがめたただけだった。

「それともう一つ。一週間くらいはおとなしくして、出来る限り学校から出るな」

「ご冗談でしょ。なしてまた？」

沖田がしかめ面つらで平沢を見上げた。

「連中に妙な動きが見える。あいつらだけでも厄介なのに、お前たちにまでちよろちよろ動き回られたら仕事がやりにくくていけない。わかったな」

レシートを取って、平沢が消えた。後に、何となく気まずい沈黙が残る。

「テレパスだったなんてね」

耐えきれなくなったように、榊が言った。沖田は椅子に深くもたれかかった。

「聞かない方がよかったな」

何も見ていないような眼でテーブルの上を見る。

気の強い南部娘を演じていたヴィヴィアン・リーを息もつかずに見ていた結希。優しくはかなげなオリヴィア・デハビランドに何度もまばたきし、キザなどハンサムのクラーク・ゲートルにうっとりしていた転校生。

映画に見とれる結希を、沖田は幾度となく盗み見ていた。疑惑と、いささかの邪念を持って。あれは映画に見入っていたのではなく、気がつかないふりをしていただけなのだろうか。

「大した演技派だ。完璧にだまされた」

「だまそうとしてたの、こっちだけど」

つばさがココアをかきまぜる。

「さすがプロねー。すっかりだまされちゃった。すごいわー、ははは」

「無理に陽気にしよーとせんでもよろしい」

「は」

低い音量で流れていたはずのジャズが、やけにやかましく聞こえてきた。

「テレパスか……」

沖田は、テーブル中央の各種調味料の載っている木の皿をにらみつけていた。

「榊、あの転校生、どれくらいのテレパシー能力持ってると思う？」

「さあ」

榊は、心配そうな顔でノブを見ていた。

「わからない。ただ、秘密兵器になるほどのテレパシー使えるなら、その時々には相手が何を考えてるか、くらいは楽にわかると思う」

沖田は重い溜め息をついた。

「心理戦だの神経戦だのが通用する相手じゃねえな……厄介な奴だ、ったく」

「沖田」

つばさが気のない声で沖田を呼んだ。

「あんだよ」

「あんだ、まだ何かやるつもり？」

「あたりまえだ。今さらあと戻りできるか」

つばさはぎょっとして椅子から身を起こした。

「何考えてんのよ！ 手のうち全部読まれちゃってるのに、何やろうっての！」

「事情説明する手間が省けていいわい。エスパーだろーが超国家規模の宇宙軍だろーが、こーなりゃ徹底抗戦してやる！」

「野蛮人！ テレパスなんて器用なの相手に何が出来るっていうのよ！」

「何だっしてしてやる！ 断りもなしに人の頭の中覗かれて黙ってられるか！」

沖田は乱暴に立ち上がった。

「先帰ってるぞ」

「あ、わしも」

あとを追って真田が立つ。

「テレパス相手にどんな対策立ててるのか、見せてもらいましょー」

じゃあねーと手を振って、つばさが消えた。後に榊とノブだけが取り残される。ふたりはなんとなく顔を見合わせた。

「ろくに片づけずに行ってしまった」

榊はテーブルの上に残された六人分のピザを見渡した。

「晩御飯の分まで浮いちゃいそうね」

ノブが力なく笑った。

「――転校生のこと」

「なに？」

ノブが黒瞳がちの瞳を榊に向ける。榊はノブの顔をまともに見れずにテーブルに目をそらした。

「いつごろから気がついてた？」

ノブは軽く目を見開いてみせた。悪戯いたずらっぽい笑みを浮かべる。

「ついさっき」

「え……」

「だって、そんなこと考えもしなかったもん」

ノブはジュースを手元に引き寄せた。

「探偵さんも動いてるし、学校の中まで超能力持ってる人を連れてくるなんて、あたし意外とすごい組織に狙われちゃってるんだ」

榊はどっと疲れを感じてテーブルに突っ伏した。

「確かに、そーですけど……すごいのに狙われちゃってる……うーむ、本当にそうなんだろうーか」

「何かの間違いだったりして」

あは、と笑ってノブがジュースを飲んだ。肘をつけてその横顔を見ていた榊は、うんうんとうなずいた。

「テレパスって、どういう気分なのかなあ」

ジュースを置いたノブが、わずかに首を傾げて椅子にもたれかかった。

「まわりの方が何考えてるか、全部わかつちやうって、どーゆーのなのかなあ」

「さーねー」榊は考えこんだ。「混信だらけの海賊放送聞いているみたいなものかな。うるせーだろーに」

「かわいいそうね」

榊は、え？ とノブを見た。

「だって、誰かを好きになっても、その人が自分のことどう思っているかすぐわかっちゃうんですよ。そういうのって、淋しいね」

「どう思ってるかわかんねーから苦勞すんだけれども」

榊は、自分のピザを片づけにかかった。

「かわいそーだのさびしーだの、そこらへんがどうも理解に苦しむなあ」

「どおしてえ？」

ノブが口をとがらせた。榊はピザを口に入れたまま肩をすくめた。

「月に行く途中で言ったろ。オレはエスパーの超能力コンプレックス信じない主義だって。他人より便利な能力もってるのに、どうしてかわいそーだのさびしーだのゆー話になるわけ？」

「だって……」

「それに、どんな事情か知らんけど、相手は武器代わりピストルにテレパシー使ってるんだぜ」  
気休めにしかなくてないな、と思いつながら榊は続けた。

「相手の心配する前に、自分が狙われる心配しよーね」

「うん……」

ノブは別のことを考えながらうなずいた。

「でも、誰も、望んで超能力者になつたわけじゃないのにね」

「その発想から離れろとゆーのに」

榊はうんざりした顔で皿の上にフォークを放り出した。

「それなら、超能力者だって凡人だって同じだぜ。生まれる前に何考えてたって、いつ、どこで、誰として生まれてくるかはわかるわけねーんだから」

「……………」

ノブは考え込んでしまった。

「生物で、遺伝のこと習った？」

「い、遺伝？ えーと確か、二年のはじめにちらりとなでたような気が——いや、一年の二学期だったっけ、メンデルとか右巻きとか左巻きとか……………」

あわてて定かでもない記憶をひっくり返す榊に、ノブは顔をあげた。

「超能力って、やっぱり何かの間違いで、てきとーな確率で偶然生まれてきちゃうだけの、ただの突然変異体なのかなあ」

「暗い……………あまりにも暗い」

榊は耐えきれずにテーブルに突っ伏した。

「ひどい……………そーゆー言い方ってひどい！」

「だって、そーゆー事考えながら授業受けてたの？ それはあんまりにも暗い」

「どーせ暗いですよーだ」

「たしかに真っ暗だったもんなー」

「わーん」

ノブは笑いながら榊の肩をたたいた。

「ねえ、これからあと、なんか予定あるの？」

「予定？」 榊はノブに顔をあげた。「別にないけど？」



「ならさ、遊んじやおーよ」

「なんでまた突然に……別に反対はせんか」

「だって……」

言いかけて、ノブは自分で頭を傾<sup>かし</sup>げた。

「今日は、大丈夫なんでしょう？」

「別に用事ないからいいけど……OK、それじゃ今日は目一杯素敵なデートにしてやるお」  
「わあい」

「沖田！　こら沖待てい」

男子寮、金紺館の廊下をずかずか歩いていく沖田に、真田が走って追いついた。

「どこへ行くんだよ」

「ドクトルだ。あの天才マッドサイエンティストなら何か手を考えてくれるはずだ」

真田は頭を抱えた。

「どーして沖田、そームキになるわけ？　感応能力者相手に、どーしよーってーの」

「何かしてねェと気が狂いそうなんだよ！」

沖田は真田に振り向きざま叫んだ。思わず耳を押さえた真田を壁ぎわまで追いつめる。

「とにかく動いてねェと、ろくでもない事考えそうなんだ」

息をきらしながら、沖田は壁に手をついた。

「わ、せまらんどいて」

「いいか、事情は何であれデートの名目で、とにかく女の子と一緒にいたら、正常まともな男は何考え  
る？」

「と、時と場合によると思いますが」

「言っとくが、俺は正常だ。あることないこと色々考えたよ。それが筒抜けになってるなんて考  
えもせずにな」

「なんと悲惨な……」

「それ全部知ってて、あのヤロー転校生最後まで知らんぷりしてやがったんだ」

沖田は壁をなぐりつけてから歩き出した。

「つたく、女が魔女だって今日ほど思い知らされた日はないぜ。人が何考えてるか全部わかっ  
て、どうして平静保ってられんだ！」

407号室——自然研にその人ありと知られる大幹部、「マッド」ことドクトル松田の部屋の  
ドアを、沖田は立て続けにノックした。

「人が何を考えてるのかすぐわかる……ねえ」

パソコンのキーボード、モニター、プリンター、ディスク、レコーダーにCB無線まで接続し  
て、他所よそのコンピューターと電波回線で同期リンクさせているらしいシステムを背にして、松田は考え  
込んだ。

「さとり」でも相手にするのかい？」

「さとりって何だ？」

新聞部に出払っている和田と、自動車部に詰めている南部の椅子に陣取っている沖田が真田に訊いた。

「日本古来の妖怪。まあそんなもんですな」

「ぼくは心理学も精神医学もやったことないから。大脳生理学はちょっとかじったけど、比較民俗学は専門外だし」

「なんとかならんのか？ 自然研じゃESPシールドとか造ってないのか？」

「正真正銘のちよりのりよく者もないのに、対超能力対策なんかする必要ないもん」  
言いながら、松田は立ち上がった。

「えーと、前にSF研や電研なんかと協力して試みた、未来戦争のシミュレーション・ゲームの手引書がどっかに……」

分厚いファイルや専門書、正体不明の資料などが詰まった大きなスチール棚から、えいこのつと苦労して力まかせにファイルを引き抜いた。

「未来戦争だ？」

「うん、熱核戦争から生化学兵器、気象兵器から宇宙兵器まで、とにかく現在<sup>いま</sup>にあるもの、計画中のもの、ウワサから理論から何からとにかく一応ありそーなもの全部ぶち込んでシミュレーション・ゲームを作ろうとしたんだ」

「またムボリーなことを」

綴じたファイルの分厚さに真田があきれる。沖田が、ドクトルの見せてくれた書き込みだらけのコピーのページに驚いた。

「全世界規模で？ ゲーム盤、並の世界地図じゃ収まらんぞ」

ドクトルはうれしそうに、にへら、と笑った。

「衛星軌道まで範囲に入るから、標本室で一番大きなリプルーグルの地球儀にフィックスを刻んでやるはずだったんだ」

「あれ？ ありゃ直径一メートル以上あるぜ」

沖田は、コモドトカゲの剝製はくせいと帆船模型の間に埋もれていた古い外国製地球儀を思い出した。

「先進諸国間と、資源狙いの発展途上国の三つともえの全面戦争を想定して、各国の情報収集力や生産能力まで組み込もうとしたんだ」

「で、どうなった？」

沖田は身を乗り出した。ドクトルは照れたような笑いを浮かべた。

「手間がかかりすぎて、マニュアルのラフとシナリオの構成シナプスまで行って中断しちゃった。ただ、その時に、超能力っていうのを、兵器運用システムに組み込もうと思って、あれこれやってみたんだよね」

ドクトルは二人にファイルのページを示した。

「超能力はテレパシーと透視クレヤウオヤンスとサイコキネシスの三つに限定して、未来予知フレイグニシヨンとか瞬間移動テレポーターシヨンな

んかははずしたんだけど、それでも結局入れられなかったんだよね」

「どうして？ 気象兵器まで持ち込んでるなら、超能力入れるくらい楽なものだと思いが」  
「便利すぎて、ゲームにならないんだよ」

ドクトルはファイルを沖田に渡した。

「超能力なんていう要素をゲームの中に導入すると、戦争そのものが成り立たなくなっちゃうんだ。ウルトラマンやスーパーマンが戦争に介入してきたら、どうなる？」

「はあ……」

真田は訳のわからない顔をしている。

「たとえば、テレパシーだけど、アメリカ軍は三〇年も前に実験してる。けど、それは北極海の海底を航行している原子力潜水艦と、東海岸の間で、直線距離にして二〇〇〇キロも離れてるんだ」

「ノーチラス号か……」

ファイルに目を落としたまま、沖田はつぶやいた。ドクトルはうなずいた。

「北極海からメリーランド州まで、衛星中継も電離層の反射も使わないとすると、ほんとうに直線的に、直接にコンタクトしてることになるんだけど、その間に何も無いわけじゃない。潜水艦の外板、並の電磁波じゃ減衰しちゃって使いものにならなくなるような海、それから地殻、マントル対流層。地球を貫ける粒子って、ニュートリノくらいしかわかってないけど、テレパシーもそうだとしたら？」

「まいったねこりゃ」

沖田は額に指をあてた。

「放射能なんかより、よっぽど厄介じゃないか」

「だから、鉛のヘルメット作ったって、多分シールドには使えないんだ。そうすると、透視ってものすごい事になってしまふ。地球の裏側まで見える人が一人いれば、軍事偵察衛星いくつ飛ばすより、どんな情報網より確実に役に立つし、念動力者<sup>サイコキネ</sup>なんか組み合わせたりしたら、どんな弱小国家でも無敵の軍事力を持っていることになってしまふ」

「まア、ゲームにならんわね」

プリンターの紙をコピーしたらしいページをめくりながら、沖田は溜め息をついた。

「化け物だね。秘密兵器の性能が極秘事項になるはずだわ」

「だから、超能力だけはゲームからはずしたんだ。——で、さとりって、何のこと？」

「それらしき妖怪が学園内某所にとりついているらしいんだよ」

沖田はページをめくった。超能力の設定だの説明だの上にも、赤のサインペンで「計画中止」と大書してある。

「その手の妖怪退治に効果的な方法は、何かないか？」

「脳波でも合成して、できるだけ強力な無線機で発振してみる？　人の頭にECMかけるなんて無理だと思うけど」

「脳波ってのはどの周波数帯<sup>バンド</sup>で発振されてんですかね」

沖田は自分の頭をなでた。

「だいたい一〇ヘルツから五〇ヘルツくらいだけど、脳波ってのは電位的差位で、別に頭から電波出してるわけじゃないし……」

「一〇ヘルツ？ そんなに低いのか？」

普通、長波といわれるのが一万ヘルツ以上である。一〇ヘルツというと極超長波の部類に入り、使い途は軍事目的、それも海中にいる潜水艦との通信に限られている。そこまで考えて、沖田ははたと思い当たった。

「それだけサイクルが長い電波なら、かなりの長距離通信で間に色々と障害物があってもあんまり減衰しないな？」

「海中くらいならともかく、地球そのものが間に入るとなるとねえ。相当にパワー上げないと。どうして、脳波測定にあんな大きい機械が必要なのか知ってる？」

「うんにゃ」

「脳波っていうのは、すごい微弱なんだよ。だから、増幅するのにあんな大掛かりな機械が必要になるんだ。もし超能力者が脳波飛ばしてテレパシーやってるんだとしたら、そんな強力な電波出すだけで脳が焼き切れちゃうよ」

「さいですか。んじゃ脳波流しても……」

ドクトルはうんとうなずいた。

「あんまり効果ないかもしれない。騒音でごまかすんなら、できるだけ混雑してる所に連れ出す

っていう手もあるけど、本人が目の前にいるんなら——ねえ」

「隣の奴と話をするだけなら、かなりうるさい騒音の中でも言ってることわかるからな。そのさとりとやらゆー奴は、どーやって退治されたんだ？」

「衝動で、だよ」

ドクトルは、沖田が渡したファイルを閉じてディスプレイの上に置いた。

「むかーっときた時の無意識な行動とか、反射的な動作なんていうのは、いちいち考えてやるわけじゃないからね」

「すると何か、いきなりむかっとなら来たのにやられて退治されちゃったのか？」沖田は気の抜けた顔をした。「そらまたやけにあっさりやられたもんだな」

「応用すると……思考コントロールかなあ」

「なんだそれは」

話の见えない真田が訊く。

「催眠術で暗示かけて、キーワードか何かで発動するようにしとくんた。きっかけは何でもいい。音でも、相手の顔見たらでも。全部わかつちやう人が相手でも、本人が覚えていない暗示までは読めないと思うんだけど」

「そりゃ悪くない手だがな、ドクトル」

沖田は身を乗り出して人差し指をたてた。

「誰がその催眠術かける、ん？」



ドクトルは嬉々として自分自身を指差した。

「実はずっと練習してたんだ。ぼくが君にかけてあげよう」

ドクトルは白衣の懐から糸に下げた五円玉を取り出した。沖田はふらふら揺れる五円玉をじつと見つめる。

「成功例は？」

「君が記念すべき成功例の第一号となる」

とたんに沖田は椅子から立ち上がった。

「熱意はひじょーにうれしーんだけど、また今度にするわ」

「ちょ、ちょっと」

「それまでに誰か実験台見つけて、たっぷり腕磨いといってくれ。じゃあな」

引き止めようとするドクトルにつかまらないうちに、407号室から逃げ出す。

「どーすんの」後から追いかけてきた真田が、ドアを閉めた。「他に、アテあるん？」

「ない」沖田は間髪入れず断言した。「んなもん、はじめっからあるか」

つばさは、枕に顔をうずめてベッドに突っ伏していた。密閉型の大きなヘッドホンをかけている。

女子寮桂木荘432号室に、つばさ以外の人影はない。廊下や校庭の喧騒が聞こえてくるほどに部屋の中は静まり返っているが、ヘッドホンのコードの先の霧野深雪所有のミニコンポステレ

オの音量<sup>レベル</sup>メーターは、レッドゾーン一杯で踊っていた。

愛用の大きな羽根枕に完全に頭を沈めて、セミロングヘアが散っている。時々手をにぎりしめるくらいで、死んだように動かない。

「部屋にも教室にもいないもの、ここだと思うけどな」

言いながら、姫こと霧野深雪はドアを開けた。女子部の校舎で姫をつかまえてつばさの行方を訊いた沖田と真田が、遠慮しながら部屋の中を覗き込む。

「沖田くんがつばさ探すなんて、珍しいね。やっと仲直りしたの?」

「あのね……」沖田は頭を抱えた。「奴と仲直りするくらいならハリネズミとベッドインする方選ぶ」

「はずかしがらなくてもいいのに」

笑いながら、姫は部屋に入った。

「どーも根本的なところで誤解を買ってるよーだな」

「あれ? いるよ」

ベッドで死んでるつばさを見つけた姫が、部屋の外の二人に呼びかけた。

「ねえつばさ、お客さん」

「どーせ親密になるなら姫との方がいい」

「あら、浮気はだめ。どーぞ」

男二人をあっさり部屋に招き入れて、姫はベッドで動かないつばさを示した。

「あれ。どーにでもしていいよ」

「うえ？」

「寝てるみたいだから、どーぞご自由に。まだ用事残ってるから、じゃあね」

にこやかに手を振って、姫は部屋から出ていった。沖田は真田と顔を見合わせた。

「何でもしていいってさ」

真田はあわてて両手を振った。

「沖田どーぞ。わしゃ見てるから、目覚めのキスでも、その次でもその次でも」

沖田は額に手をあてた。

「こーゆー事態とでもなけりゃ白木の杭でも打ち込んでやるんだが。やいつばさ、起きろ！」

反応なし。

「起きろっての。んなら、本当に何かブチ込んでやろーか」

沖田は、つばさの肩を揺すろうとして、イヤホンのコードの先を目で追った。作動中を示すライトがいくつか点いているコンポステレオでカセットが回っている。沖田は真田にステレオを示した。

「ジャック抜いてくれ」

「ジャック？ えーと、これかいな——と」

いきなり大音量のヘビーマタルが部屋に響き渡った。音割れ寸前のシンセサイザーの高音が窓

ガラスを振動させ、ベースやドラムの重低音がびんびん腹に響いてくる。

「ババカとめろ！」

「え、どれだどれだ」

やたらにボタンやダイヤル、スライドスイッチなどが並んでいるのを、とりあえずいくつつか動かしてみるが効果がない。はたと思い直して真田は握りしめていたヘッドホンジャックを元の所に差し込み直した。

元の静寂が戻ってくる。

「何をやっとするんだ、こ奴は……」

沖田は、二段ベッドの下段でうつぶせに寝ているつばさを見下ろした。乱れた髪の間からヘッドホンをもぎ取る。ヘッドホンから縮小された音が聞こえてきた。

「つばさ、起きな」

つやのある髪が、九〇度ばかりのろのろと回転した。髪の間から、うつろに開いた瞳が覗く。沖田は顔をしかめて片眼を閉じた。

「起床！ いつまで死んでる気だ、この……」

いかにもかかったるそうに顔を戻すと、つばさは今度は体ごと寝返った。ベッドの上に半身起こして体の向きを変え、脚を出してベッドに座る。一言も口をきかない。

沖田は頭に手をあてた。

「また暗い落ち込み方する奴だな」

「陽気な落ち込み方とゆーのは至難のワザかと思いますが」  
不穏な空気を感じて、真田がそろーっと身を引く。

「座ったら」

怒ったように短くつばさが言った。言われて、真田と沖田が机から、きれいなカバーがかけられた椅子を引っ張り出して腰をおろす。

つばさの挑戦的な視線が、まともに沖田に向いた。沖田は溜め息をついて顔に指をあててそらした。

「なんて顔してるんだ」

つばさの視線が心持ち細くなった。

「単刀直入にいこう」

いかげん面倒になって、沖田はすぐ本題に入った。

「もう一度奴を連れ出せ」

つばさの目が見開かれた。

「あの転校生を!」

沖田はうなずいた。

「今日、天満宮で縁日やってるのは知ってるな。夕方——夜でもいいから、あいつを引っ張ってこい」

「あんたって何考えてんのよ!」びっくりするような大声で、つばさが喚いた。「自分が何言っ

てるかわかってもの言ってるの!？」

「一から十までわかつとるわい」

沖田は窓の外に顔をそらした。

「理由も手段もまかせる。引っ張り出してくりゃ、あとはこっちで全部引き受ける」

「テレパスってのが、どういふんだかわかってるの? もうペテンもガセも、何も通用しないのよ」

つばさの声は悲鳴に近かった。沖田は顔をしかめた。

「はじめっから通用してねェんだよ」

「じゃどおしよーってのよ! 相手はテレパスよ!」

「ぎゃーすか喚くんじゃねェ! いちいち口に出して説明する手間が省けていいじゃねェか!」

「自分でやりなさいよ」

つばさはベッドの上でぐるりと沖田に背を向けた。

「あたし、もう、絶対、やだからね!」

「……わかったよ」

沖田は両手を上げた。

「もういい」

意外なほど静かな口調で言って、沖田は立ち上がった。

「邪魔して悪かったな」

椅子を戻して、真田と一緒に部屋を出る。

ドアが静かに閉められても、つばさは壁に向いたまま動かなかった。やがてのろのろと、閉じられたドアを見てソックスの脚をカーペットにおろす。

「異様な迫力がありましたな」

桂木荘の、女の子らしいドア飾りがかけられている廊下を歩きながら真田が額の冷や汗をぬぐった。

「いやーおそろしかった」

「あーゆーところをちよつとつついてやれば。再起不能の致命傷与える事ができるんだが」

「やりゃよかったんじゃん」

沖田は真田から顔をそらした。

「つくづく惜しい事に、こっちがその気分にならねエの。一生後悔のネタになるな、これは」

「はい、ご注文の品」

真田は、つばさの部屋の机の上に置いてあった誰かの——多分、姫の——レポート用紙から無断拝借したまっさらの紙二、三枚を取り出した。沖田は上着のポケットからペンを出した。

「代筆しろ。文面は——」

真田が窓ガラスにレポート用紙を押さえつけた。沖田はちらりと真田を見た。

「今晚暮れ六つ、谷保天境内にて待つ。用件は貴殿がかねてよりご承知のこと、余計な小細工は

一切無用……」

「今晚暮れ六つ、と、また古風に出ましたな。まるで果たし状」

「待て、やっぱ飯喰ってからにしよう。それからちゃんとそれらしい文面に直せな」

机ではなく、床のグレーのカーペットの上にスケッチブックを拡げて、和紗結希は床に座って絵筆を動かしていた。使いこんだ傷だらけのパレットに絞り出した青い水彩絵の具を太い筆で水に薄め、空の青にしていてねいに画用紙に塗る。

突然、部屋のどこかで目覚まし時計のような電子音が聞こえた。顔を上げて机の上のトラベルウォッチを見た結希は、今日の定時連絡が午後五時だったのを思い出してカーペットから立ち上がった。空いているベッドの上の、木製の絵の具箱のフタを開ける。

フタの裏側のはめ板をはずすと、薄型の電子機器が現れた。10<sup>テン</sup>キーボード、液晶ディスプレイなどがマイクロコンピュータよろしく配置されている。SCF御用達の通信ユニットである。

異常なしを示すコードナンバーを送信しようとして、結希は高速通信でメッセージが入っているのに気づいて内容を呼び出した。

液晶ディスプレイの上を、文字が流れ出した。

——今夜八時、<sup>オペレーション</sup>作戦カーニバル・ナイト起動。<sup>パターン</sup>P04の手順により任務を遂行せよ。ノ

ブ・Kとの正面衝突は可能なかぎり避けるよう。I・ジルベスター。

メッセージを読んでいた結希は顔を上げた。肩越しに振り返ってドアを見る。とんとんと、二



回ノックの音がしてドアの下から紙片が滑り込んできた。足音が駆けるように遠ざかる。

立ち上がった結希は、きれいに折りたたまれた白い紙片を拾い上げた。表に、和紗結希殿と書いてある。結希は簡単に四つ折りにされたレポート用紙を拡げた。

メッセージを読んで、結希は一瞬、息を止めた。窓の外に目を向ける。夕陽が、遠い街並みを赤く染めていた。

ぎっしりと住宅やビルが建ち並んだ副都心の向こうで、空にまで赤い透明な光を染み込ませた巨大な夕陽が沈もうとしていた。

「うっわあ、すごい、わあ」

まるで子供みたいにはしゃいで、ノブは展望室の窓に手をついていた。

「ねえ、国立ってどの方向かなあ」

脇で苦笑しながらノブの横顔を見ていた榊は、え？ となって窓の外に向いた。

「えーと、中央線があっちの方向に走ってるから、この方向のはるか彼方だと思うけど」

新宿超高層ビル街のはずれ近く、住友三角ビル五階の展望ルームである。

「超高層ビルで陽が沈むところを見たい」というノブの唐突かつ脈絡のない発言により、二人は国立から電車で飛び乗った。車中で外と時計と交互ににらめっこをしつつ新宿につき、東口から駅の外に出たりして遠廻りをした挙げ句やっとな超高層ビル街にたどりつき、日没に間一髪で間に合ったのである。うろ覚えの方向音痴（つまり榊）と必ず裏目に出る野性のカン（ノブ）が組み

合わされると、こうなる。

「青梅街道があれで、あの黒いのが中野サンプラザだから……」

榊の説明につれて、ノブが右へ顔をめぐらす。窓の横の柱に張ってある鏡に映った風景を窓のつづきと勘違いしたりしながら、夕陽が奥多摩の山の向こうに沈むまで、ノブはそこから離れようとしなかった。

同時刻、国立――

放射状通りの大衆食堂で、平沢は一万分の一の国立市地図を横目に、重い頭を抱えつつレバニラ定食と格闘していた。

「まだ調子が悪い……」

もとより、食欲などあるはずがない。無理にでも食べておかないと、あとの仕事に差し支えるのである。

「肝心な時に二日酔いとはね」

自嘲しながら、平沢は定食を詰めこんだ。うわばみだのザルだのタンカーだの言われ、無敵の肝臓を誇っていた男である。平沢はふっと幹本沙織の顔を思い出していた。

「ありゃ、落とすのが大変だ」

占い師は、酒場の片隅のテーブルで、カードを一枚ずつめくっていた。

「パブ『カウンター・ミラー』は、まだ開店前である。テーブルの上に椅子が上げられたまま  
で、店には沙織一人しかいない。」

沙織は、封を切ったばかりの新品のギャンブル用カードを、無表情にめくっていた。スピード  
の7、ハートの5、ダイヤのキング——

沙織はカードをまとめると、<sup>ディーラー</sup>胴元じみた手つきでもう一度カードをよくきった。チェッカー模  
様のカードをテーブルに置き、その手で一番上のカードをめくる。沙織は目を閉じて椅子にもた  
れ、テーブルの上にカードを放り出した。

カードの中で、<sup>ジョーカー</sup>道化師が笑っていた。

夕闇を縫うようにして、AC-130H2ガンシップは東京郊外の米軍横田基地の四〇〇〇メ  
ートル滑走路へ着陸脚を接地させた。あつという間にスピードを落として誘導路に入る。

あとを追うように、米軍所属のF-16Cファイティング・ファルコン四機が見事なダイヤモン  
ド編隊を組んだままアプローチに入った。

「さすが、マツキ・サーカス」

先頭のF-16Cの<sup>サイドステイック</sup>操縦桿を握るマイク・ウォーレンはひゅうと口笛を鳴らした。マイクの斜  
め後方と、真後ろにつけたF-16Cのパイロットたちは機をぴたり等間隔でつけたまま、着陸し  
た。

「アクロバットに転向しても充分やっていける人材が揃ってるぜ」

機体は青森の三沢基地から空輸フエリーしたものだが、パイロットは正規の米空軍士官ではない。元は海軍で艦載機乗りをしていたのも一人混じってはいるが、あとはマツキが地元カリフォルニアでスカウトしてきたエアレーサーと、イギリス空軍ロイヤル・エア・フォースのスピニアウト組である。

「こちら黄金時代ミレニアムのファルコン、ファラオ・リーダー応答せよ」

マイクは、はずしていた酸素マスクを口にあてて、まだ厚木基地にいるはずのUH7SC型司令ヘリコプターを呼び出した。

『こちらファラオ・リーダー』

涼やかな声の女性オペレーターが答えた。

『ファルコン・リーダーどうぞ』

「マツキ司令官殿に伝えてくれ。ミレニアム・ファルコンは全機横田基地に無事到着、一休みして補給をすませたら時間通りに出撃の予定、以上オーバー」

『了解しました』

## ACT・9 国立市街戦

学問の神様として、受験の季節には学生で一杯になる谷保天満宮。二〇号線沿いの参拝者専用駐車場に愛車カワサキ750SSを入れた沖田は、うさん臭そうな目をしたままジェットパイロット用のヘルメットをとった。

さして大きな駐車場ではない。年中行事の祭りのために提灯ちようちんで飾られた駐車場には、どう見ても似つかわしくない重量物運搬用の超大型セミトレーラー・トラックがかなりのスペースを占領して停まっていた。

「何を運んできたんだ？」

大型の特殊車両でも運ぶような、二軸のトレーラーに八組もダブルタイヤをつけた頑丈な荷台の上には、何も載のっていない。

「トラックの方運んでるんでない？」

例によって南部からヤマハRZ350Rを借り出した真田がヘルメットを脱ぎながら言った。

「そーいや大学通りにも何台かバカでかい、ドラゴンワゴンみたいなトレーラーが停まってるな」

「そーだっけ？」

答えずに、沖田は手袋をとって腕時計を見た。午後七時五〇分。

「行くか」

手袋を放り込んだヘルメットを持って、沖田は歩き出した。

砂利を踏んで、石畳の参道に出る。大学・高校の入試の季節と重なっているため、まだ春には遠い季節なのに人通りは多かった。

「さて問題は……」

参道の両側に立つ、灯の入った石燈籠いしどうろうを通り過ぎながら沖田はつぶやいた。

「この人混みがどれだけECM代わりになるかって事だが」

拝殿の正面、口を真一文字に閉じて玉を前脚で押さえた狛犬こまいぬの下にもたれて、和紗結希はぼんやりと参拝する人混みを見ていた。

彼女にとってはエキストラでしかない参拝客を、結希は何の表情もなく見つめていた。やがて、夜空を見上げる。裸電球やスポットライト、提灯などで満艦飾の境内けいだいからは、星はあまり見えなかった。この時間は低い位置にあるため、月も見えない。

突然、気配を感じて、結希はわずかに頭を巡らせた。感じ慣れた気配とともに、聞き覚えのあ

る声が沈んだ感情と一緒にあって聞こえる。

「いろいろと考えたんだが——」

何から話をはじめればいいのか、わからない。狛犬の石積み台の横で、沖田は結希の背後から口を開いた。

「正攻法しか思いつかなかったんでな」

結希がびく、と肩を震わせてうつむいた。沖田は余計なことを考えないように頭を振った。

「単刀直入に行こう。おまえは——」

きみ、としか呼ばなかった沖田がはじめて結希をおまえと言った時、彼女はすでに質問の内容を理解していた。同時に質問が耳から聞こえる。

「何をしに来た」

わかってるんでしょ、と沖田に背を向けたまま結希は声に出さずに口を動かした。もう、全部、知ってるんでしょ、と。

屋台の出店の陽気な呼び込みの声と人混みの喧騒に混じって、誰かが持ち込んだラジオから流れる歌謡曲が遠くに聞こえる。沖田はそれきり口を開かない。

沖田が見ている自分——種々入り混じった様々な思惑や混沌こんとんとした感情の中に映っている、狛犬の台にもたれている自分が、結希に見えた。頭の中の合わせ鏡は、揺れるばかりで動かない。沈黙に耐えきれなくなって、結希は体ごと沖田に振り向いて顔を見上げた。

沖田は目をそらさなかった。台に手をついたまま、わずかに目を細めて結希を正面から見る。

意外なほど近くで、花火を打ち上げるような爆発音が聞こえた。しかし、二人とも目を合わせたまま動かない。

SCF、超能力、テレパス——いくつかの言葉が、沖田の頭の中を飛んだ。合わさって、質問の形になろうとする。台詞せりふになって口から出るのを待たずに、結希は軽く目を閉じてうなずいた。

——SCFのエスパーなら、小牧ノブの誘拐に来たんだな。

しかし、次に沖田が考えたのは、結希にとっては意外な質問だった。どう答えればいいのかわからないうちに、沖田はそれを口にした。

「どうしてテレパスなのに——どうして、おまえ、平気な顔をしてられるんだ」  
目を見開いたまま、結希は自分でも気がつかないうちに後退あとずさっていた。ゆっくり首を振ろうとする。

その時、だしぬけに激しい光がフラッシュのように降ってきた。瞬間的に人影や狛犬が境内の中にハイライトで浮かび上がる。沖田は思わず空を見上げた。

どう見ても花火とはケタ違いの光量を持つ、白熱した超新星が中空に出現していた。

「また派手な……照明弾？」

沖田は啞然あぜんとしてつぶやいた。結希の顔を見返す。マグネシウムの白光に照らし出された白い顔は、沖田の声を聞いてなかった。

「何なんだあれは！」



沖田は結希の腕をつかんだ。結希はぼんやりと首を振る。彼女は作戦内容を知らされていない。

衛星高度からの鋭い眼が、東京都下の学園都市を見つめていた。

平均対地高度約二二〇キロを、軌道傾斜角度六二度で回る米軍偵察衛星、ビッグバードⅣ。衛星軌道から、地上の個体識別が可能——俗に、天の上から鼻毛の数が数えられるといわれる超高解像度の電子の眼が、国立市星南学園を中心とする、わずか十キロ四方ほどの地域に向けて絞り込まれていた。

赤外線、可視光線、レーザー स्क্যানなど幾通りもの方法で走査されたデータは、一度厚木基地に送られ、コンピューターによる解析をうけて高密度データ化され、ほぼリアルタイムで国立市街に待機するマツキ・チームに送られていた。

一番大型のディスプレイに、国立市を中心とする一万分の一の地図に重ねられた配置図が出ている。下の二つのディスプレイには、和紗結希と小牧ノブをそれぞれ画像の中心とする、簡略化された周辺百メートル四方ほどのパターン図が映し出されていた。

腕時計サイズの発振器と、ウォーキングステレオ型の通信機を携帯している結希のトレースはさほど難しくない。小牧ノブのトレースは、楽な仕事ではなかった。

例によって上空一万二〇〇〇フィートに滞空しているツタンカーメン型司令ヘリコプターの探査・索敵システムをビッグバードからの走査データとあわせてコンピューターにぶちこみ、やっ

と谷保天満宮参道にいるノブを発見、これをトレースしている。結希とノブの間は、直線距離にして五〇メートルも離れてはいない。

「問題は、あの壊し屋がどこにいるか、だ」

数度にわたるスキャンにも、平沢はひっかからなかった。上空からの探査では、カムフラージョネット一枚でも、あるいは屋内にいるだけでも発見はできなくなる。

「まあ、いいか。こちらから仕掛ければ向こうで動き出してくれる」

メルセデス・ベンツの特殊トラック、ウニモグにごっそり電子機器を積みこんだ戦闘情報司令車の、ディスプレイとコンピューターだらけのキャビンからマツキは手を上げた。

「作戦開始だ。フェーズ1の全待機車両に出動命令を送れ。動き出せば、レッドバグは向こうから飛びこんできてくれる。花火を上げろ」

ウニモグは、運転席の後ろに擬装された発射筒から二発目の照明弾を撃ち上げた。空中で点火して、すさまじい光を放つ。次の瞬間、スキヤニング中のディスプレイの前のオペレーターが叫んだ。

「スケールG-7にレッドバグ出現！」

間髪を入れず、マツキの手元のディスプレイに平沢の現在位置が示された。中央高速国立インターチェンジの支道から二〇号線に移動、平均時速を含むデータが表示される。

「やっと出てきたか……七四MBTに追撃命令を送れ。——これで役者が揃ったぜ」  
予定通りに開始された作戦に、マツキは笑みを浮かべた。

「あとは、レッドバグの相手役が足りるかどうか、だ」

フラットツイン特有の力強いトルクで路面をけとばして、サイドカーは道路に飛び出した。平沢は、二〇号線めがけてタイヤを滑らせながらサイドカーを片側二車線の街道に乗り入れた。右手一本の片手運転で車体をコントロールしながら米陸軍仕様の携行用対戦車ミサイルランチャーを肩に上げる。スロットルを全開にして、長距離トラックの前に出た。

今夜のサイドカーは、前回とは打って変わった重装備だった。風防を取り外して代わりに支持架をつけ、MG34機関銃が載っている。リヤの両側にも弾薬ケースを取り付け、ロケット弾やグレネードをはじめとする物騒な道具を満載していた。

M72A2型ミサイルランチャーの内側の砲身を後ろに引き出して発射準備をしながら、平沢はつぶやいた。

「今夜は、ちょっとハードだぜ」

そのとたん、背後から全開にした二サイクル大排気量ディーゼルの悲鳴のような轟音が聞こえた。鋼鉄とコンクリートが擦れる咆哮ほうこうのような走行音とともに、七四式自衛隊主力戦車が二〇号線を突進してくる。

「さっそく出て来やがった」

左右のフェンダー上のヘッドライトが、ダークグリーンの車体に反映している。砲塔の一〇五ミリ砲が仰角をマイナスにまでおろして平沢のサイドカーを狙おうといていた。

「おーお、物騒な世の中だ」

平沢は左肩の上でミサイルランチャーを背後に反転させた。道路のコンクリートを削り散らしながら迫る七四式戦車に、バックミラーと盲射ちのカンで狙いをつける。左手一本でランチャーを支えたまま、プッシュトリガーを押した。

夜目にもあざやかな炎と白い煙の軌跡をひいて、後ろ向きにロケット弾が飛び出した。一直線に飛んで七四式の前面に命中、大爆発を起こす。

平沢は使い捨てのランチャーを道端へ投げ捨てた。後方の混乱を無視して赤信号の交差点を突破する。

「さてと……どこから片づけるか」

「何の騒ぎでしょー?」

裸電球に照らされた、夜店のおめんや派手な彩色の安手のおもちゃを見ていた榊は、明るくなった夜空へ顔をあげた。さして遠くない所から、花火の打ち上げにしては迫力のありすぎる爆発音が聞こえた。

「すっごおい花火」

つられてノブも夜空を見上げる。

「ちょっと単調だけど……えー?」

轟音を聞いたような気がして、ノブは露店の後方に続いているうっそうとした雑木林に目をこ

らした。

「な、なんだア？」

金切り声のような、すさまじいエンジン音がした。と思う間もなく、真っ暗だった森の中からいくつもの光の束が走る。左右二連装ずつのヘッドライトとフォグライトが、怪物の目の光のように木々の幹を透かして浮かび上がった。

凶悪な威圧感を覚え、ノブは思わず倒れるように退いた。背を柵に抱き止められる。

「どったの？」

答えは、押し倒される大木と全開にしたエンジン音でかき消された。森の中から露店の並ぶ参道めがけ、木も草も目に入らぬように戦車は全力前進をはじめた。

根元からなぎ倒された杉の木が、隣のタコヤキ屋を看板ごと押しつぶして参道に横たわる。それまで事の成り行きにあっけにとられる参拝客で一杯だった参道は、瞬時にしてパニックに陥った。

「戦車だあ!？」

長大な砲身を振り立てる国防<sup>カーキ・グリーン</sup>色の七四式戦車を何かの間違いだと思いつつ、とにかく柵はノブの手を引っ張って逃げ出した。

ゆっくりと高度を下げた照明弾が、どこかに落ちていった。空がやっとな夜にふさわしい暗さを取り戻す。しかし、あまり聞き慣れない大出力エンジンの轟音や爆発音とおぼしき炸裂音が鳥居

の下の参道の方から聞こえてくる。

「何がはじまったんだ？」

騒ぎ、というより事故でも起きたような喧噪けんそうを聞きながら沖田は首をめぐらした。

考えるまでもなく、答えが出現した。拝殿の裏から玉砂利を蹴散らして、二一・五リッターV一二ディーゼルエンジンの音もやかましく急旋回した戦車が、そのままの勢いで前進を開始した。

「陸上自衛隊の七四式戦車だ……!？」

境内の人込みが一瞬、シーンとなる。その中で、戦車は拝殿脇の社務所に車体をひっかけた。社務所から、アルバイトの巫女みこや宮司みやうじが悲鳴をあげて逃げ出した。簡易プレハブの臨時社務所は、戦車の接触に、ひきずられてあっけなく崩壊した。

「ほ、本物だ……」

敷き詰められた玉砂利にくいこんだキャタピラの圧倒的な重量感から見て、パレード用に擬装ぎそうしたものではない。七四式戦車は七二〇馬力のディーゼルエンジンを咆ほえさせて、沖田たちのいる狛犬めがけて突進してくる。

「うそだろ」

目の前の真偽はともかく、本能的に身の危険を感じた参拝客が逃げ散ろうとする。沖田も、ぎっしりと絵馬の掛けてある奉納御板へ駆け出した。

「——と」

急ブレーキで立ち止まり、振り向く。狛犬の下に、逃げるのも忘れてぼんやり立っている結希が見えた。

「逃げろバカ！」

迫り来るキャタピラの轟音を聞きながら沖田は叫んだ。しかし結希はうつろな方向を見上げたまま、動こうともしない。一瞬ほっとこうかと考えて、沖田はUターンしてダッシュした。

「死ぬ気かこの！」

ぼんやりしていた結希の首根っこをつかまえて、元来た方向へ逃げ帰る。やや遅れて、古い石造りの狛犬を石積みのお台座ごと踏み散らし、かなりのスピードで七四式戦車が通過した。

絵馬に背をぶつけて体を止めた沖田は、息を切らしながら戦車の後ろ姿を見送った。引きちぎれた裸電球などの電線がゆっくり落ちてくる。

二発目の照明弾が、宙空に輝いた。白光が降り注ぐ。沖田は傍らの結希に目を落とした。結希は、驚いたような目で沖田を見上げていた。

「逃げる！」

きっぱり断言して、沖田は参拝客をかきわけて駆け出した。と、前方から新手のエンジン音が迫ってくる。

「なに!？」

人混みをよけながら、サイドカーで突進してくる平沢が目に入った。ゴーグルをつけた平沢は、沖田を認めて片手をあげた。





「よう学生、まだ生きとったか」

「探偵！ てめエ、ンな所で何しとる！」

「仕事だ。お前も逃げた方がいいぞ」

リヤタイヤで玉砂利をはね上げつつ、平沢はじゃあなと手を振って通過した。階段も無視して下の参道へ降りていった戦車を追って鳥居をくぐる。腰をひいて重心を後ろにかけ、サスペンションを信じて男坂の石造りの階段の上から飛び出した。

宮の森の中を一直線に延びた縁日の参道が照明弾に白く照らされている。道の中ほどを、砲塔を回転させながら疾走する七四式戦車が小さく見えた。

階段の踊り場めがけて降下する。降ってくるサイドカーに驚いて、詰まっていた参拝客が踊り場から散る。だが、中に一人、佇たずんだまま動かない細い人影が残った。

「なにー!？」

着地と同時に自らサイドカーをスピンさせて人影をよけつつ踊り場に停止させた平沢は、声を上げた。

「お……おま……何でこんな所に……」

ドレスの上にコートを羽織ってポケットに手を入れた幹本沙織は、平沢に首を傾げてニコッと笑ってみせた。

「援軍が到着したわよ」

「……………」

平沢は、タンクに肘をついて頭を抱えた。

「なんとも、心強い限りだぜ」

斜面に突入した七四式戦車が、立ち木や植木をなぎ倒しつつ階段の横をエンジン音をあげて駆け降りていった。平沢は顔を上げた。

「気持ちだけありがたく頂戴しとく」

沙織の肩に手をかけて抱き寄せる。

「仕事が終わったら行くから、ベッドメイクして待っててくれ」

顔を引き寄せてキスしようとしたら、沙織はくるりと身をひるがえ翻してよけた。

「やだ、あなた何食べたの？」

「ドラキュラよけスタミナ料理」

平沢は思わず口を押さえた。

沙織は、BMWのヘッドライトの前を回ってサイドカーの横に来た。

「そんなの食べてると、嫌われるわよ」

頭を抱えている平沢の返事も待たず、サイドカーのシートの上に放り込んであった機関銃の弾帯の束を重そうに抱え上げて乗り込んでくる。

「待ておい！」

喚き出そうとした平沢の口に人差し指をあてて、沙織は微笑んだ。

「私が誰だか、忘れたの？」

「目下のところ東洋一のいい女だと思ってたよ。ったく……」  
「はい、お仕事」

眼下の戦車を示して、沙織は発進に備えて腰を浮かせてグリップハンドルに手をかけた。

「占いの結果は確かなんだろーな」

半分あきらめて、平沢はハンドルを握り直した。ギアをニュートラルから一速へ入れる。

「しっかりつかまってるよ！」

R100CSサイドカーは、急発進した。男坂の急な石造りの階段を、サスペンションに悲鳴を上げさせながら駆け下りる。

「沖田、おきたーあ」

逃げる参拝客の流れに逆らい、人垣をかきわけて真田が出てきた。

「あ、いたいた」

息をきらしながら、坂の下の参道の方向を指し示す。

「今、下の方で戦車が出てきて……あ——！」

「戦車はわかってる。探偵が追っかけてった……ん」

沖田を見て口をぱくぱくさせている真田が、やっと声をあげた。

「どーして転校生連れてんだよ！」

「んえ？」

言われて振り返った沖田は、狛犬の所から引っ張り出した結希の手をつかんだまま逃げてきたのを思い出して目を覆った。連れられてついてきた結希が、困ったような顔をして視線をはずす。

「えーと、あのこれは、なんとゆーか……」

真田に言い訳しようとして、沖田はあらためて斜め上を向いている結希の顔をしみじみと見直した。

「おまえ、本当にSCFか？」

結希はうなずくように目を伏せた。腹に響くような七四式戦車の一〇五ミリ砲の発射音が照明弾の空に響いた。真田が思わず耳を塞ぐ。

「とりあえず、逃げよ」

「どこへ？」

真田が訊いた。沖田は結希の手をつかんだまま歩き出した。

「学校へ戻る。——探偵が出てきてんだ、ここらへん一帯は間違いなく焼け野原になるぜ」

「はあ。草一本残りませんか」

「残んねエだろな」

「で、どおして転校生連れてくんだよ！」

ついてくる真田がまた喚いた。沖田は真田の胸ぐらをつかんでぐいと引き寄せた。

「そこらへんに放しとくより手元に置いといた方が何かあっても対処しやすいだろうが！」

耳元に小声で喚いてから、突き放して歩き出す。

「そんなもんですか」

「んなもんだ!!」

「いいけどね……」真田は、沖田を追って歩き出した。階段を降りはじめると。「沖田あ」

「まだ何か言いてーのか!」

「おぬし、絶対長生きできないぜ」

「うるせい」

疾駆する戦車の振動が地面から伝わってくる。ノブの手をひいて必死に全力疾走する榊は、ちらりと後ろを見て、血の気が失<sub>う</sub>せるのを感じた。

「なに考えてんだ、んとに!」

棍棒<sub>こんぼう</sub>代わりに主砲の一〇五ミリ砲を振り回して参道の両側の露店を次々に破壊しながら戦車が走る。キャタピラが参道の石畳に乗ったり、玉砂利や土の上を走って車体を揺らせても、砲身の仰角は獲物を探し求めるようにあまり動かない。完全にエレクトロニクス化された射撃管制装置のため砲身へ伝わるはずの動揺がキャンセルされるのだが、その生きものじみた動きが不気味だった。

走るより戦車の方が速い。榊はノブの顔を見た。ただでさえ風邪気味のところへ、顔を真っ赤にして息を切らしている。いつ転んでもおかしくない。

榊はスニーカーを滑らせて止まった。ワントempo遅れてぶつかってくるノブを抱き止め、左手の金魚すくい用のビニール池を飛び越えて雑木林に飛び込む。ノブをかばったまま二、三度まばらな雑草の上を転がり、巨大な松の根に背をぶつけて止まった。

「っ……」

「だ、大丈夫？」

おどろいたノブが体を起こす。榊はノブを連れて松の木の陰に飛び込んだ。

背後を、ものすごいキャタピラの音をたてて戦車が通過した。肩で息をしながら様子をうかがっていた榊は、そのまま松の根元にへたり込んだ。ノブへ顔を向ける。

汗でほつれ髪をまとわりつかせたノブが、上気した顔の汗をぬぐいながら片目を開けた。はあはあ息をきらしながら、無理に笑う。

「ね、素敵な、デート、ね」

榊はどてーっと木の幹からずり落ちた。

「本気で言ってるのかよお」

ノブは、幸せそうな顔をしてうなずいた。榊はげんなりした顔をして、握ったままの手を上げてノブを引き寄せた。

「何考えてんだよ、おまえ」

榊に抱き寄せられたノブが、胸に顔を埋める。ノブは目を閉じた。

「時間がこのまま止まっちゃったら、いいなって」

背後を、石畳を踏み砕きながら二台目の戦車が走り抜けた。乱れた息をととのえるために何度も深呼吸しながら、榊は胸のノブの重さと髪の甘いにおいを感じていた。

「うーむ、女つつのは何考えとんのかわからん——んわあ！」

戦車砲塔上の一二・七ミリ機関銃の掃射が頭の上を抜けた。後方威嚇<sup>いかく</sup>用に旋回したついでに流れ弾丸が何発か森の中に飛び込んだらしい。ぶっとい幹を紙みたい貫通した機関銃弾に、思わずノブごと体を伏せる。

三台目の武装サイドカーが加速しながら通過した。こちらにも機関銃を乱射しているらしい。ノブと榊は、至近距離で顔を見合わせた。お互いに一瞬黙り込んでしまう。

「えーと……」

確かに、このまま時間が止まっても悪くはないな——なんて考えながら、榊は非常な努力をしようと言った。

「場所変えよ」

無理矢理ノブから視線をはずして、付近を見渡す。照明弾のおかげで見通しが効く。

「んな所で戦争の巻き添えくらいたくない」

「うん」

またも、何かの爆発音が地震のように伝わってきた。二人は、急いで立ち上がった。参道に戻ろうとするノブを榊がつかまえて止める。

「また何か出てきたら怖いでしょ。森の中通ってこよう」

「弾丸の無駄づかいをするなあ！」

平沢が喚いた。支持架に載せられたMG34のストックに肩をあてて、いささか危なっかしい手付きで二段トリガーをひいていた沙織がしぶしぶ指を離した。

「だって、すぐなくなっちゃうんだもん」

「こりゃショットガンじゃなくて機関銃だ！ トリガー引きっ放しじゃすぐ弾丸がなくなるのは当然だろうが！」

「ちゃんと当ててるもの」

沙織がふてくされてそっぽをむく。

「そりゃね……」平沢は認めた。「前面装甲じゃ歯も立たんが、ケツ——後ろからかませばなんとかなるようだ」

「だったら、いいでしょ」

「H&K特製の高速徹甲弾使っとるんだ。パワーが並の高速弾と違うんで、銃身の命数がかなり落ちてんだよ！」

沙織は火器には詳しくない。目をぱちくりさせた。平沢はMG34の銃身をはじいた。

「弾丸が強すぎるから、銃身がどれだけ保つかわからねえんだ。今晚一杯保たせなきゃばいの」

「ふうん、意外とちやちやに出来てるのね」



「ちゃち……」

シートから腰を浮かせて車体の振動を殺していた沙織が長い髪をなびかせて腰をおろす。サイドカーを走らせたままタンクに突っ伏した平沢は、はっと気がついて急ブレーキをかけた。

「どうして停まるの？」

「手元に無線機があるだろう？」

言われて、沙織は目を落とした。ボンネットの下に、強力そうなマルチバンドの無線機がスイッチオンのままセットされていた。

「4-26を押して、左から三番目の赤のボタンを押してくれ」

言われた通り、プッシュキープボードを押して沙織はボタンを押した。

「これ、なに？」

「この先の参道に埋めといた無線信管の地雷の安全装置を解除した。引っかかってくれりと後々楽になるんだが……」

「あ、あの、じらいつて、あの地雷？」

訊くまでもなく、照明弾で照らされた空に火柱が立った。爆発の震動がここまで伝わってきてサイドカーを震動させる。続いてもう一度。

思わず耳を塞いだ沙織が、あきれたって顔で平沢を見上げた。

「まさかと思ってたけど、ほんと危険な人ね」

「ほめ言葉と思って受けとっとく」

平沢はサイドカーをスタートさせた。

「あの調子なら二両とも移動止めるくらいはできたはず……」

「今度は、どこへ行くの？」

沙織が訊いた。平沢は沙織を見やって、肩をすくめた。

「決めてない。どこへ行きたい？」

駐車場は、大騒ぎになっていた。

クレーン付きの、戦車を運んできたらしいトレーラーは素知らぬふりをして静かに駐車している。しかし、他の一般車は出口に殺到して一刻も早くこの場から逃げ出そうと数珠繋ぎじゆずつなになっていった。出る先の二〇号線も、乗用車から長距離トラックまでぎっちり詰まって渋滞じゆづつなしており、動く気配がない。

「道路封鎖でもやってるんかね」

エンジンを始動キックしてアイドリングをはじめた750SSの横で、沖田が言った。

「真田おまえ先行って、南部とドクトルつかまえといてくれ。正面玄関で待ち合わせだ」

「あいよ……どーして？」

「もし学校に大戦車軍団が攻めてきたら、お前ならどーする？」

「暴走族の頭アタマと気違い博士で何とかなるたー思えませんが」

「他にどーしろゆーんだ！ 俺は様子見てから帰る。わかったら行けー」

「ほいほい、お達者で」

RZ350Rの排気煙を残して、真田は上下車線ともびっちり詰まった二〇号線に飛び出して行った。二輪の小さな車体を利して、車と車の間を縫うようにして学校へ向かう。

入れ違いに、カン高い金属音とともに見覚えのあるスクーター「必殺トレーシー」が駐車場に入ってきた。

「また厄介なのが来た」

出入り口にぎっしり並んだ車の間を乱暴に抜けて、銀のスクーターは沖田の横で急停車した。足をついたつばさがジェットヘルを一気に脱ぐ。

「やっぱりここにいた。沖田あんた……」

額に手をあてている沖田の後ろの結希を見つけて、つばさは後の台詞を呑み込んだ。

「何しに来たんだよ、この忙しいのに」

沖田がうさん臭そうな目でつばさを見る。

——聞いてない。

「どーやらこの騒ぎが全然気になってないらしいな」

「な……なんで……」

その時、激しいエンジン音とともに、駐車場の草むらからBMWのサイドカーが飛び出した。スピンして、沖田らの前で急停車する。つばさと沖田に、平沢が喚いた。

「まだこんな所でうろついていたのか。早く帰れ。こんなもんじゃ済まんぞ！」

それだけ言って急発進する。体をサイドカーの反対側にぐっと乗り出して浮かせ、バイク側のみの二輪走行で大きく車体を傾かせて二〇号線へ出ていった。

「忙しいやっちゃな」

沖田は、同乗者に髪ハツセンジャーの長い女性を伴って斜めになって走っていったサイドカーを見送った。それから平沢の言葉の意味に気づいてぞっと体を震わせる。

「こんなもんじゃ済まんだと？ これ以上何が……早いとこずらかる。おいつばさ。お前まだ遊んでくか？」

「——え？」

「あ、そーだ、榊と小牧ちゃん帰ったか？」

つばさは結希に目を据えたまま首を振った。

「まだ帰ってない？ どこで遊んでんだ、あの連中は」

ぶつぶつ言いながら、沖田は結希にヘルメットをかぶせた。びっくりしている結希と目を合わせないようにしてストラップを締める。

「お前、本当にこの作戦知らないんだな」

結希は目を閉じただけだった。

「命令系統が違うのか——まーいい、それ、信じるぞ」

結希は目を見開いた。確かに、こんなに簡単に敵を信じるようでは長生きはできないと自覚しながら、沖田は750SSにまたがった。回転計タコメーターの指針は1000RPM前後を保ってぴりぴり

震えている。

その時だった。鋭いジェット音とともに梢こずえにひっかかりそうな超低空を二機の細身のヘリコプターが、無茶苦茶に光量の多い地上照射用サーチライトを点けたまま通フライ・パス過した。風を巻いて飛び去る細身の機体を見送った沖田は目を覆った。

「A H ー1 S だ……対地攻撃用のヘリまで出て来やがった」

沖田は眼鏡を額に上げてヘリの飛び去った方向に目をこらした。思わず声を上げる。

「あの方向……学校だ！」

「なんなのよあれー!？」

喚くつばさを無視して、沖田はあわてて後ろタンデムに結希を乗せた。

「榊と小牧ちゃん捕まえてかくまっとけ！」

わからない顔しているつばさを放つといて、沖田は駐車場から飛び出した。

「だからブルジョワな組織は嫌いなんだ！」

文句を言いながら、平沢はアクセルを戻してハンドルをきった。左側のサイドカーが慣性で回り込むのを利用して急旋回する。

谷保交差点の下り車線は、直進車と右折車が用を成さなくなった信号機の下にぎっちり渋滞していた。反対車線に車体をはみ出させながら無理に市道に右折すると、ばかでかいトレーラーが駐車して道を占領していた。

「しっかりつかまってるよ！」

もう一度サイドカーを浮かせて、歩道に突っ込む。アクロバットのテクニクでサイドカーを操る平沢に、沙織が言った。

「上から来るわ」

「だから嫌いだって言ってるんだ！」

文句をたれているそのそばに、二〇ミリバルカンの砲火が突き刺さった。カン高いジェット音をたてながら、A H - 1 S が超低空をバンクしたまま飛び過ぎる。長いトレーラーをやっと追いついて、サイドカーが歩道から車道に戻った。

「クレール射撃の経験は？」

バックミラーを上向きにして、後方上空の攻撃ヘリを見た平沢が沙織に訊いた。  
「え？ どうして？」

「飛んでるものを狙い撃ちしたことはあるか？」

沙織は平沢の言葉の意味をやっと理解してうなずいた。

「機関銃でヘリコプター撃ったことなんかないわ」

二機目のコブラが機首の三銃身バルカン砲を撃ちながら飛び越していった。機関砲弾をくらったアスファルトにクレーターのような大穴があく。

「いい機会だ、やってみな。今、射線をあわせる」

言いながら、平沢はBMWのギアを、特注で組み込んだバックにたたき込んだ。

「射撃用意！」

サイドカーから立ち上がった沙織が、ストックを肩にあててMG34を構えた。しがみつくように体を支える。

「行くぞ！」

コブラのローター音が後方から接近してくる。軽くブレーキをかけて、平沢は自らサイドカーをスピンさせた。

「きゃあああ！」

「撃て！」

車体が後ろを向くと同時にクラッチをつなぎ、後進全開。サイドカーは後ろ向きのまま今までと同じ進行方向に走り出す。超低空を進むコブラと正対した。沙織は、まともに見ていられないようなコブラのサーチライトめがけて機関銃を発射した。体を横にして後ろを見ながら右手一本の片手運転でサイドカーを走らせる平沢が、サイドキャリアから地对空ミサイルランチャーを選び出す。

通常弾よりはるかに高い破壊力を持つ高速徹甲弾がコブラのサーチライトを砕いた。コブラは至近距離からサイドカーめがけて、両翼のポッドに抱いたTOW対戦車ミサイルを発射する。夜の道路にすさまじい白光を放って、立て続けに爆発が起こる。

「まっすぐ走って！」ジグザグにバックで走るサイドカーに振り回されて、爆風にあおられながら沙織が叫んだ。「当てられない！」

「こっちが直撃されるっての」

フライパスしたへりにあわせて、平沢が、ぐいっとサイドカーをターンさせた。クラッチをはずしに加速しながら、左肩にかついだランチャーのプッシュトリガーを押す。あざやかな発射炎の帯を長く引いて、口径六六ミリの小型ミサイルが放たれた。JR南武線の点滅中の踏切を突破して、警笛を鳴らして急ブレーキをかける電車の前を走り抜ける。

天体観測の名目で、星南高自然研地学班の面々は男子部校舎屋上の観測ドームから南天に、虎の子の三〇センチ反射望遠鏡を向けていた。しかし、まともに天体観測している者はいなかった。

「西南西の方向——ほら、また」

鉄筋コンクリート五階建て校舎の屋上から月明かりに照らされた夜景が見える。道路の街灯、街明かりや車のヘッドライトの点在する中に、時折、爆発煙らしき光が、低空で花火のように花開くのである。砲火らしいのも見える。

「地震計に震動波出てるってさ」

屋上に出ている連中に、観測ドームの構内電話で連絡をとっていた中堅部員が叫んだ。

「爆発の震動じゃないかって言ってる」

三発目の照明弾が、宙天高く撃ち上げられた。白光に照らされた屋上で、観測の指揮をとっていたドクトル松田はつぶやいた。



「市街戦でもやってるのかな？」

遠く、超低空を強力なサーチライトをつけて旋回するヘリコプターが見えた。  
「ふむ……」

「攻撃ヘリに戦車、自走砲まで出て来てやがる」

住宅地の細い裏道を750SSで飛ばしながら沖田は喚いた。

「SCF<sup>ヤっら</sup>関東の自衛隊全部集めたのか!？」

言うてから、沖田は関東だけではないことに気がついた。実戦用のAH-1S<sup>コブラ</sup>は北海道と九州の基地にしか配属されていないはずである。

「なんて組織力だ」

表通りに出る寸前で、キャタピラの音を聞いた沖田は750SSを急停車させた。目の前を、金属音をぶちまけながら七四式戦車が通過した。

沖田は後ろの結希を見た。目が合って、結希は目を伏せた。

「だんだん読めてきたよ。これはあの探偵相手の攪乱<sup>かくらん</sup>作戦だろう」  
結希は沖田から目をそらした。

「末端には作戦の理由なんか、教えられないか？ なら、おまえの任務は——」  
結希が顔を上げた。続く言葉を聞くことに耐えかねて目を閉じる。

「作戦の混乱に乗じて小牧ちゃんかっさらって、どうだ？」

うなずくことはできなかつた。目を閉じたまま、結希は上を向いた。沖田はタンクに肘をついて目に手をあてた。

「まあ、あの探偵相手だからわかるよーな気もするが、たかが攪乱作戦にこんな大掛かりな機材投入とはね。で、おまえはどうするんだ？」

沖田は肩越しに結希を見た。表情のない大きな瞳が、沖田を映していた。結希は首をゆっくりと左右に振った。

「じゃあねえな。そばにいてもらおう」

沖田は750SSをスタートさせた。

「なあ、おまえ、どうしてこんな所に来たんだ？」

「レッドバグ、スケールF-五からE-四へ移動、平均移動速度毎時八〇キロ」

「七四MBT-三及び四、スケールF-六にて中破、作戦より離脱」

国立市上空一万二〇〇〇フィートに、SCF所属のUH-7SCツタンカーメンが滞空し、戦闘情報を司令車へ送信している。哨戒機並みの能力を持つセンサー・サイトをフルに使い、眼下の閑静な住宅地に展開される市街戦をモニターしている。

『データ入りました。転送します』

ツタンカーメンのオペレーターの声と同時に、マツキが持ち込んだ液晶ディスプレイに国立市街の航空地図が出た。

『カズサ少尉はオートバイでC-四からC-三へ、N・コマキはアベックでE-四を移動中』  
説明につれて、偵察衛星からのデータをリアルタイムに拡大投映した粗い映像がディスプレイに示される。

「まあ、こんなもんだろな」

マツキは、ツタンカーメンに指示をとばした。

「レッドバグがC-三に入ったら、マイクたちに攻撃命令を出せ」  
『了解』

先行する七五式一五五ミリ自走榴弾砲の側面に機銃を乱射しながら、平沢はサイドカーを加速させた。

「自走砲相手なら何とかなるな……」

沙織のMG34だけでは心もとないから、ついでのことに横腹にロケット弾を撃ち込む。右のキヤタピラを砕かれた自走砲は、残った左側をむなしく空転させてコンクリートを削りながら停車した。

自走砲と戦車の差は、事実上、装甲の有無だけである。自走砲、それも固定砲塔の七五式が相手なら、戦車ほど苦勞することはない。

国立駅前から南に向かう、広い大学通りに出た。

「ちょ、ちょっと、どこ行くの？」

いきなり車道から歩道に進路を変えるサイドカーの中で沙織が訊く。

「すぐそこだ」

色レンガが敷き詰められた歩道に上がり、平沢はサイドカーを急停車させた。車道と歩道の境にある、幅の広い植え込みの一部分にかけておいたシートをとる。

「なにそれ？」

沙織が目丸くした。三本脚の大きな支持架の上に、バズーカ砲みたいな機関銃が載っている。

「速射式のグレネードランチャーだ」

平沢は、HE弾十発装填のマガジンをつけた大型のグレネードランチャーを、大学通り上り口の十字路に向けた。縦列を組んで突進してくる戦車群めがけ、連続発射する。ものの二秒とかわらずに全弾が撃ち出され、市道を走る戦車にHE弾が降り注ぐ。

腹に響くアフターバーナーの音が大群になって聞こえてきたのは、その時だった。

サイドカーの沙織が、耳を塞いで身を縮める。見上げる平沢の頭上を、かっちりダイヤモンド編隊を組んだファイティング・ファルコン四機が高速で通過した。

「地上部隊の次は空戦部隊か」

再びサイドカーに向かって歩き出しながら、平沢はニヤリと白い歯を見せた。  
「ずいぶんと待たせてくれたな」

常識をわきまえない七四式戦車二台の追跡を、前に横須賀までへりを追いかけた時以来の乱暴な運転で振り切った沖田は、学校前の楡通りエルクから男子部の正門を抜けた。照明弾の照り返しを浴びつつ一直線に校庭を横切り、バイクのまま階段を駆け登ってそこだけ明かりがついている正面玄関に突っ込む。

「わわ、わあ！」

土間で停まるはずのブレーキを効かせ損ねて廊下まで飛び込んだ沖田は、待っていた真田を危ういところでよけてやっとバイクを停めた。

「なんと危ない運転を……」

「南部とドクトルはどうした」

「南部は格納庫、ドクトルは屋上うえで天体観測だって」

「じゃ放送部の奴いねエか？ 五ノ井でも角田でも誰でもいい」

言いながら、沖田は後ろの結希を気にして振り返った。硬直して息を切らしている。

「うーむ、やはりこ奴も耐え切れなかったか」

「沖田の運転で耐えられるのなんて誰もいないよ。えーと……今日は放送部何も予定入ってないから寮の方ではないかと……」

「んじゃこれ頼む」

後ろに手を回した沖田は、結希をバイクから降ろして真田の横に置いた。

「こ、これって、どーすんの」

「寮戻って放送部の奴連れてくる」

沖田は、<sup>ひとけ</sup>人気のない夜の廊下に白煙を残してウィリー気味に発進した。後に残された真田は排気煙に咳き込みながら、茫然としたままの結希を見た。

「えらいもん置いてってくれちゃったな。どーしよ」

「戦車が街にやってきた？——って、何のことだ」

「いーから来いっての！」

バイクで一気に男子寮の四階まで駆け上がり、その脚で寮の個室になぐり込みをかけた沖田は、運悪く部屋にいた放送部員の角田をつかまえることに成功した。

「しっかり乗ってるよ」

「いやだ、沖田の後ろなんか乗りたくない」

「もー遅い」

激しい金属音とともに、何の騒ぎだとドアから覗く寮生にピースサインを出しつつ、沖田は発進した。

「三、二、一、ファイア」

平沢の声にあわせて、沙織は人差し指で汎用無線のボタンを押した。

路面を疾走する戦車めがけて、大学通りの両側から滝を噴き上げたように迫撃砲が大量斉射し

た。流星雨のように戦車群に降り注ぐ。

「さてと」

平沢は夜空を見上げた。

「そろそろ空のやつうえの相手をしてやらんと」

「飛行機まで持って来てるの？」

平沢は肩をすくめた。

「F-16Eか、最低でもF-20タイガーシャーク用意しろって、例の武器屋のじーさんに言ったんだけどね。ろくなの用意しやがらねえ」

「な……」

裏道を通って学校前の楡通りエルムに飛び出そうとしたつばさは、その寸前であわてて急ブレーキをかけた。眼前に展開されている異様な光景に絶句する。

楡通りエルムは、さほど車幅があるわけではない。完全な直線ストレートで、間に一つ押しボタン式の信号があるだけだから間道もいところである。そこに、どこをどう通って集結したのか、何台もの戦車や自走砲が動いていた。

先頭の一台が、一年中開きっ放しの正門から男子部の校庭に入ろうとする。

「こんな所まで……」

つばさは唇をかんだ。戦車のキャタピラが門を越えて土にめり込んだ。

まるで待ち伏せでもしていたように、校舎に灯が入ったのはその時だった。照明弾が落ちた夜空をバックにして、すべての教室に一齐に照明が点灯した。

「戦車が攻めてくる？ んじゃあの騒ぎ、市街戦でもやってんの？」

格納庫でレーザーの改造をしている最中に引っ張り出された南部は、成り行きで持ってきてしまったメガネレンチをくるくる回しながら訊いた。放送室に引っ張りこまれたドクトルが、間延びした調子で腕を組む。

「機甲部隊の相手するって、あんまり楽な仕事じゃないんだけどなあ」

「知らないうちに奇襲くらって、あっさりやられるつもりかてめェら！」

はったりをかましながら、沖田は放送室のミキサールーム側のマイクをスタンドごと手に取った。

「放送の範囲、どれくらいにする？」

スイッチを入れながら、無理矢理引っ張り込まれた部員の角田が訊いた。

「全部だ。女子部の方まで入るか？」

「同じ系統使ってるから、出来ないことはないけど……やるの？ やばいなあ」

「やれ、非常事態だ。ボリューム最大にして」

「いいけど、スピーカーいくつか飛ぶんじゃないかなー」

言いながら、角田はいくつか回路をつないでダイヤルを回し、音声のメインスイッチに手をか



けた。

「いくよ。三、二、一、キュー」

『全校生徒に告ぐ、全校生徒に告ぐ』

最大限に拡大された沖田の声流れ出した。

『非常事態だ。繰り返す、非常事態が発生した』

人気のない教室、校舎の廊下、そして戦車が進入をはじめた校庭にまで、スピーカーから声が響いた。

『現在我が校は、正体不明の敵の攻撃にさらされておる』

突然の校内放送の意外な内容に、男女の寄宿舎は一瞬シーンとなった。

『嘘だと思うんなら外を見ろ、すでに校庭の一部に敵が侵入をはじめてやがる』

侵入を開始した戦車までが、あっけにとられて停止している。

『いいか、野郎ども、戦争だ！ みんな、出てこい!!』

メインエンジンに点火した。最大推力二トンのワルター・ロケットが青白い炎を長く引く。

「あのじーさんはこーゆー骨董品を抱えてるんだから」

無尾翼機のラダーを動かしながら、平沢は自嘲した。目を丸くして見ている沙織に手を振って風防を閉じる。

「今どきMe163だと……F16フルコン相手に勝負になんのかね」

大学通りを滑走路代わりに使って、メッサーシュミットMe163Bコメートは舞い上がった。大戦末期にナチスドイツが実戦に投入した、史上唯一の実用ロケット機である。

「さー、短期決戦いってみよー！」

軽い機体のため、コメートはあっという間にスピードに乗った。急上昇して四機編隊のF-16に飛び込む。

沖田はマイクを置いた。

「はったりじゃあ時間稼ぎくらいにしかならんが……」

「あれ壊していいんだね」

「え？」

一同がドクトルを見た。ドクトルは不気味な笑みを浮かべていた。

「地質調査用とか、固体燃料の試料とか、使ってない爆発物が大量に残ってるんだ。この際全部使っちゃおーっと」

嬉々<sup>きき</sup>として放送室から出て行く。沖田は背筋に冷たいものを感じて南部と顔を見合わせた。

「まずいのを刺激しちやっただんでない？」

「うーむ、学校ごと吹き飛ばされるかなあ」

ぞつと肩を震わせて、沖田は放送室から出た。ドアを出た所で、壁に結希がもたれていた。何とはなしに目が合う。

「あれま」

続いて出てきた南部が結希に気づく。

「女子部の転校生？」

「そーゆーわけだ」

沖田は廊下のはじめにサイドスタンドで立っていた750SSを起こして、言った。

「南部、そいつ頼む」

「沖田どーすんの？」

沖田はエンジンをキックした。二スト特有の白い排気煙が校舎一階の廊下に吐き出される。

「校庭で攪乱してくる」

「攪乱て？ おい待て」

沖田としてはなるべく静かなつもりで、750SSをスタートさせた。

「……行っちゃった……戦車軍団相手に、何やるつもりだろね、あのバカ」

横の転校生に言ったつもりでそちらを見ると、姿がない。

「あら……おい待て？」

沖田を追って駆けていこうとした転校生を見つけて、南部は声をかけた。

「どこ行く」

一瞬振り向いた転校生が照れたような笑顔を見せた。そのまま走り去る。南部は指を鳴らした。

「ちー、沖田めうまくやりおって……」

反対方向に歩き出す。

「さーてこっちも何かやるか」

表玄関で、ヘッドライトをハイビームに切り換えた。校庭にライトを点けた戦車が入ってくる。

「そろそろ命の危険を感じてきた」

一〇五ミリ砲と一五五ミリ榴弾砲の群れを見て、沖田は目を閉じた。ゆっくりスロットルを開き、回転を上げる。

「待ってるかい？」

口の中だけで誰かの名前を短くつぶやいてから、沖田はアクセルを一気に全開してクラッチをつないだ。前輪を大きくあげ、ジェット機のような金属音とともに750SSが飛び出した。

何発目かの照明弾が、校庭を煌々と照らし出した。

「うわっわあ！」

同時に、校庭のド真ん中に、すさまじい火線が立った。天から地上へ向けて戦車砲を撃ち込んだような爆発が激震となって校舎を震動させる。

「くっ、この！」

無理矢理カウンターをあてて車体のバランスを保ちながら、沖田は白光の舞う空を見上げた。

太い胴体の四発大型機が、まるで翼手竜のように翼を拡げて上空をゆったりと旋回していった。

「上空支援用にガンシップでも持って来やがったのかよ！」

頭痛を感じながら、沖田は校庭を横切って750SSを走らせた。

一番はじめに侵入した七四式戦車が、五〇メートルプール沿いに低速で走っている。他の戦車、自走砲も次々に校門から進入してくる。B29に特攻する零戦パイロットのような気分で、とにかく攪乱のために戦車群の中に突っ込もうとした沖田は、横から走ってくるライトに気がついた。二輪車、二スト単気筒のエンジン音が追いつがってくる。

「二輪部隊まで出してやんのか!？」

喚いてから、沖田はその正体に気づいて急ブレーキをかけた。

「つばさ！ てめえなんでこんな所にいやがる！」

750SSにぶつかりそうになってリヤタイヤを滑らせながら、必殺トレーシーが停車した。キャタピラとエンジン音の中でつばさが喚き返す。

「あんたこそ何やってんのよ！ さっきの放送、正気!？」

「雑念を混ぜんじゃねえこのド悪魔！」

沖田はSSの車体をぐいっと傾けてパワーアクセラレーターをかけて後輪をすべらせ、戦車群に向き直った。発進方向を見たつばさが声をあげる。

「何バカやるつもり!？」

さすがに反論する気も失せて、沖田はつばさを横目でにらんだ。

「おまえ早く帰って寝てろ」

「え？」

「でないと、本当にケガするぞ」

つばさを残してスタートする。蛇行して突っ込もうとして——沖田はついてくる必殺トレースに悲鳴をあげた。

「帰れってんだこのバカ！」

夜風に髪をなびかせながら、つばさは白い光に照らし出された顔で悪戯いたづらっぽく笑った。

「勝手にしょあたしの。ムシヤクシヤしてたからちよーどいいわ！」

「やめろバカ！」

叫ぶ沖田を無視して、つばさはSSを追い越した。先頭の七四式の鼻面をかすめ、進軍方向から戦車群に突っ込む。

「あちゃー」

続いて、沖田も土煙を立てて進軍する軍団に突入した。砲塔のハッチから顔を出した車長の顔が意外なほど近くに見えた。何か喚くと同時にキャタピラを軋きしませて急停車する。

「おーお」

土の校庭のためパワースライド、二輪ドリフトと秘技を尽くして駆ける沖田は、先行するつばさの無茶苦茶な振り回し方に舌を巻いた。

「二度とあいつのバイクの側には近づかないようにしよう」

ほんの一時、走り回るバイクに戸惑ったように戦車隊の動きが止まった。

だが、それだけだった。全部の車両が停まらないうちに、戦車隊は二台の暴走バイクへの対応を開始した。砲塔を転回させた七四式が、油気圧回路まで動員して車体を傾斜させて仰角をマイナスにすると、主砲と同軸の七・六ミリ機銃を撃ちはじめたのである。

「やっ、やばい！」

はじけるような発射音を聞いた沖田は、どこか他の所を走っているつばさに退却の意志を伝えようとしてホーンを鳴らした。群れの中なら、どう発砲しても同士撃ちとなると考えたのは甘かったらしい。

のろのろと後退する七五式自走砲の後部をかすめて土煙を抜けた時、だし抜けに目の前に人影が出現した。

「おわあ！」

思わずブレーキをかけ過ぎ、両輪を滑らして停止する。とたんに足元に機銃弾がはじけた。

「誰だんな所にぼけっと立ちやあがって」

台詞の勢いが後半、尻すぼみになった。迷子のように戦闘車両の間でよろけるように沖田をよけた小さな人影は、和紗結希だった。結希が、困ったような目で沖田を見た。

「校舎にいろつたろーが！」

意外な至近距離で、機銃弾がはじけた。弾着の方向に立つ土煙に一条のヘッドライトがさす。続いてもう一連射。

「——！」  
つばさだった。斜めに疾走してきた必殺トレーシーの前輪が機銃弾で砕かれ、つばさがスクーターごと地面に転がる。タイミングをあわせたように、直交する方向から砲塔を回して全力加速する七四式が迫る。

「つぶされる!？」

沖田は瞠目した。二転、三転するつばさにキャタピラが迫る。視界の隅に、離れた戦車の動きを止めようとするかの如く腰を落として両手を上げる結希が見えた。

次の瞬間、沖田は信じられないものを見た。結希の手から、鋭い衝撃波が放たれて戦車の前面に炸裂した。カウンターをくらったように、突進する戦車がすさまじい力で押し戻された。

——奴は爆発物のプロだ。

目の前の状況をあれこれ考える前に、沖田はスタートした。左方から出現した七四式の砲塔が、あきらかに結希を狙ってダウンしたのである。

後輪を空転させながら、沖田は一杯に伸ばした手に結希を抱き止めて加速した。左腕が体ごと持っていかれそうになるのを意地でこらえ、結希をタンクの上に引っ張り上げる。驚きと困惑の入り混じった眼が、沖田を見上げていた。

「知るかよ……あつやば！」

逃げにかかった750SSの進路を遮るように、自走砲の角ばった車体が出てきた。あわててハンドルをこじってカウンターをあてながら横をすり抜ける。と、その先の校門の横で定点旋回



中の七四式が車体の向きをゆっくり回していた。

「っそお！」

レッドゾーン寸前の七〇〇〇で回っているタコメーターを一目見て、沖田は結希を抱えて後ろへジャンプした。金属音を残して、750SSは旋回する戦車のキャタピラに特攻した。

結希をかばって校門の前に転がりながら、沖田は火柱を上げて爆発したカワサキ750SSを見ていた。

「はは、やっちゃまった」

ホコリだらけになって、立ち上がる。ひざをついた結希に手を差し伸べて立たせながら、沖田はまわりの戦車軍団を見回した。

「これで終わり……か——ん？」

沖田は、キャタピラの音が途絶え、妙に静かになった校庭を見回した。ライトを点けた戦車と自走砲が、エンジンをアイドリングに保ったまま獣のように息をひそめて停車している。その上空を、四発の大型機が意外なほどの超低空で悠々とフライパスした。

「あれ？ 沖田じゃない？」

緊迫感からほど遠い声が背後からかかった。思わず結希ともども振り向くと、<sup>エルム</sup>楡通りの向こう側から榊とノブが横断歩道も無視して車の来ない車道へ駆け出した。

気配が変わったような気がして、沖田は隣の結希を見た。結希は、一瞬だけ辛<sup>つら</sup>そうな目で沖田を見た。

「バカ戻れェ！」

沖田は叫んだ。声を聞いた榊が中央車線で止まる。すぐ後ろで、結希に気づいたノブが立ちすくんだ。

すっと、幽霊じみた動きで結希が一步前に出た。

「やめろ」

呻くような声で、沖田は結希の肩に手をかけようとした。ちらりと左肩を見やった結希は体を硬くした。

肩に手が触れるか触れないかのうちに、沖田は手のひらに衝撃を受けた。びくっとして手を止める。結希は、無表情な目で路上の榊を——その後ろのノブを見た。

「ESPレベル急上昇！」

榊エルム通りのはじめに停車したウニモグ司令軍のオペレーターがマツキに告げた。

「プラス三から五……八、戦闘域に入ります！」

マツキは、ヘッドホンの航空無線にかみついていた。

「そう、フェーズ3、こいつがこの作戦の真のターゲットだ！ 校庭に着陸しろ。繰り返す、ガンシップ、星南高の校庭に強行着陸だ！ ——グレナダ以来だ？ 対空砲火もないのにぐだぐだ吐かすな、行けー！」

校庭内に進攻した車両には、あらかじめ長方形の校庭の対角線上に幅五〇メートルの直線を作  
って停車するよう指示が出されていた。全長三〇〇メートルもないにわか造りの滑走路めがけ、  
ガンシップは校舎側から機体をひねってアプローチに入った。

「いいか」

自分の後ろに立つノブをかばうように、榊は結希をにらみつけた。肩で震えているノブの手に  
自分の手を重ねる。

「転校生はオレがひきつける。逃げろ」

「え……で、でも……」

「逃げろ。転校生は何とかする」

結希は、自分に向かって身構える男を見ていた。放射される感情の中から、ストレートな敵意  
が自分に向けられる。結希は天を仰いで目を閉じた。

「行け！」

背後にノブを突き飛ばし、榊は目の前のエスパーに飛びかかろうとダッシュした。結希は手を  
上げた。

榊の足もとのコンクリートが小さく爆発した。

「なに!？」

思わず榊は立ち止まった。

「そーゆー超能力か……」

結希が、榊の足元に向けていた手をまっすぐ上げる。

「やめて！」

立ちすくんだノブが叫ぶ。榊はもう一度走り出した。

接近してくるターボプロップの轟音に、沖田は一度振り向いた。巨大な輸送機らしいシルエットが降下してくる。

「そーゆーことか……」

榊が結希に飛びかかる。同時に沖田は小柄な転校生になぐりかかった。

「！」

消えたかと思うような素早さで結希は身を沈めた。飛んできた榊のその下をくぐり抜けて道路へ転がる。

「ンなる！」

かわされた沖田と、続いて着地した榊が反転して追う。

「いや」

ノブは両手を顔にあてて叫んだ。

「いやあー！」

瞬間、みんなの動きが止まった。

「来ないで！」

「ノブ・コマキのESPレベル急上昇します！」

それまでほとんど数値に出ていなかったディスプレイのESPレベルが、狂ったような急上昇をはじめた。

「何を手間取っているんだあの少尉は！」

マツキは、ノブと結希が対峙たいじしている状況を示すディスプレイをにらみつけた。

「測定不能のエスパーが暴発したらどうなるのか、わかってるのか!？」

土煙をあげて、タンDEM配置のガンシップの主脚が校庭に接地した。

——脱出機が来た……

首を曲げて着陸してきたガンシップを見た結希は、低い位置からノブの顔を見上げた。

「どうして、どうしてなの!？」

怒り、悲しみ。負の方向の感情が奔流のように放出されて結希の中ではじける。耐えかねて、結希は心を閉じた。

「SCFってこんなことしていいの!？」

ノブは叫んでいた。

「宇宙開発って、そんなに大事なの。SCFって、こんなことしていいの!？」

結希の中の、訓練された闘争能力が危険を告げた。ノブの中に潜んでいた力が、無制御に解放

されかけている。

「超能力持ってるって、そんなにすごい事なの!？」

臨界を越した感情が、爆発しかける。ノブの問いに、結希はうなずいていた。信管に火が点く

次の瞬間、結希はノブに向けて衝撃波を放った。

「!」

榊は、悲鳴を聞いたような気がした。

ノブが、ぼろきれのように土煙をあげて吹き飛ばされた。目を見開いたまま、声もなく歩道まで飛ばされて電柱にたたきつけられる。悲鳴もあげずに、ノブはがっくりと首を落として地面に立ち崩れた。

「んのやろお!」

榊より早く、結希は気絶させたノブめがけてダッシュした。二、三步もいかないうちに路面に足をとられた。

「!」

コンクリートの路面が、細かく砕かれて砂のような微細粒になっている。その中心が、確かにノブが今まで立っていた場所であることに気づいて結希は息を止めた。

轟音とともに着陸したガンシップが、校庭の端までいって機体をターンさせた。

結希は、歩道に倒れたノブを一気に肩へかつぎ上げた。

「行かせるもんか！」

榊がすさまじい形相で飛びかかる。結希は、ほんの少し方向を曲げて榊に向けて力を放った。ジャンプした榊が、体一つ分斜めに押し戻される。その間隙を縫って、結希は校庭へ駆け出した。

「妙な能力使いおって！」

入れ違いに沖田が結希の前に出てくる。足元に衝撃を与えて沖田の姿勢を崩し、結希は一人かついでいるとは思えない素早い動きで校門に駆け込んだ。

「どこ行くの？」

校門の裏から、いきなり誰かが結希の肩をつかんだ。結希はびくっとして振り向いた。スクーターごと転倒して、あちこちズタボロになったつばさが、門柱の後ろにもたれていた。

「どこへ行くの？」

とがめるでもなく、諭すでもない口調で、つばさはじっと結希を見た。

校庭のど真ん中に停まっていた七四式戦車の左半分からすさまじい火柱が立ったのは、その時だった。校庭が昼間みたいに照らし出される。

「むっふっふ、さすがに一〇キロ爆弾は手応えが違う」

校舎玄関に陣取ったドクトル松田は、至福の笑みを浮かべていた。

「おっそろしーもん作ってるな」





愛車RZ350Rを駆って戦車のそばにドクトル手製の大型爆弾を放り出してきた南部が玄関前から火柱を眺めている。

「では、派手にいこーぜ」

つばさの手を振り払うようにして、結希は四発ターボプロップのプロペラを回しながら待機するガンシップめがけて駆け出した。

「待ちやあがれ！」

あとを追い、榊が走る。

その時、まるで火柱が立つのを合図にしていたように、男子部校舎のすべての出入り口と、一階の窓という窓が開かれた。雄叫びおたけをあげて、男子生徒たちが校庭に流れ出してきた。

「なに？——何事だあ!？」

正面の二〇インチディスプレイに示された男子部の校庭に、まるで洪水のようにあふれ出てきた生徒たちを見たマツキは、思わず立ち上がった。あわてて通信システムの横の、壁に作りつけの梯子はしごに手をかけて登り、司令車の屋根のハッチを開けて首を出す。

「……いかん、逆襲をくらった……」

マツキは、手元のマイクに喚いた。

「急げガンシップ！二〇秒後に、作戦行動中の全戦闘車両を撤退させるぞ！」

開け放たれていた後部ハッチから、ノブを抱えた結希が飛び込むと同時にガンシップは四つのスロツトル全部を最大戦闘出力域へ突っ込んだ。さらに、機体の両側に四本ずつ装備した緊急離陸用のロケットブースターに点火する。

なだれのように校庭に飛び出して来る生徒たちが離陸スペースを埋める前に、強力な合計八発のロケットブースターは鈍重なガンシップの機体を力まかせに加速した。あっという間に離陸速度に達する。

ガンシップの車輪が、校庭を離れた。

機体をひねって校舎をよけ、あざやかなロケットの炎をひいて上昇するガンシップを自分の眼で見たマツキは、やっと安心したようにハッチから首を引っ込めた。

「作戦終了だ。全軍に撤退命令を出せ」

司令車内のスタッフに指示してから、もう一度ハッチから首を出す。マツキは生徒たちで埋められた校庭と、取り残された戦闘車両を見て苦笑した。

「もつとも、あれじゃ引き揚げるのが大変だほねな」

ガンシップ後部の一〇五ミリ砲の横のハッチから、結希はぼんやりと遠ざかる校庭を見つめていた。

「はい、ご苦労さん」

背の高い砲手が来て、ハッチを閉めた。風の音が途切れ、四発ターボプロップの震動音だけが伝わってくる。

結希は、弾薬ケースにもたせかけたノブを見た。ノブはぐったりとしたまま目覚めない。

照明弾の消えた空から、ブーメランのようなスタイルのMe 163B コメットが滑るように大空に降りてきた。燃料を完全に使い切ったための滑空着陸である。

道端でサイドカーと一緒に待っていた沙織の所まで超低空飛行で機体を持って行き、平沢は滑走用のソリでふわりとコメットを着地させた。キャノピーをはね上げて道路に降りる。

沙織が、軽く首を傾げてニコッと笑った。

「ね、勝てたでしょ？」

「今日はな……。占い師から幸運の女神に商売替える気はないかい？ できれば専用の……。」「言いながら沙織に近づいた平沢は、素早く彼女を抱き寄せた。全神経と全精神を集中して、じつと瞳を見つめる。

「あ・だめ」

その後のセリフを、平沢は唇で消した。

やがて、平沢の首が沙織の肩に落ちてきた。目を閉じている沙織の耳元にささやく。

「どっと疲れた。メシ食おう、メシ」

「もお！」

鼻にしわを寄せてイーと舌を出す沙織の頭をぽんとたたきながら、平沢は夜空を見上げた。

「今度はあの和紗結希を押さえにゃならんな」

沙織が、あっと小さく叫んだ。

「いなくなってる」

「え？」

「二人とも、このそばにはいないわ——どっか、行っちゃった」

平沢は肩をすくめた。

「それも占いか？」

校庭は、去年の秋の文化祭をしのぐ盛り上がりを見せていた。めったに体験できない非常事態に加え、自然研の爆弾を出火点にした派手な破壊行動のため、ほとんど狂騒状態である。

その中で、榊は一人、ノブを乗せて離陸したガンシップが消えた虚空の一点をにらみつけていた。

「待ってる……どこまでだっけ追っかけてくから……」

## どんちゃん騒ぎの夜のためのあとがき

本来の路線に戻っての、第三作をお届けいたします。

笹本があとがきを苦手としているのは、今に始まった事ではありません。

この仕事を始めたばかりの頃は本文に全力を投入するあまりあとがきを書く体力が残らず、最終原稿を入稿してから本になるまでに何度か本文のチェックがあるのでその時に一緒にあとがきを入れようと思っても、そのチェックに再び体力を食われるため、結局あとがきが入らない。

最近では、体力はともかく書くことがない。疲れたとか遅れてごめんなさいなんてのは後から読む読者には関係ないし、同様の理由で二、三年遅れで読んでくれる人の事を考えると時事ネタは避けるべきである。

いやね、ひとのあとがきを読むのは好きだし、書いてる最中はあとがきにあれも書こう、これも書こうとか考えてるんだが、だいたいそういうネタは締め切りに追い詰められるとどっかへ飛んでいってしまうのです。

この原因はどこにあるのかと考えると、あれだ。笹本というのは、実は、かなりの筆無精なのです。小学校時代につけさせられていた日記は苦痛でしかなかったし、作文の授業は最低枚

数しか、それも最後の一枚は二、三行だけとか、こいつが将来文章でメシを食うなんて誰が考えるだろう。

今でも、年賀状すら無礼する筆無精なのは変わっていません。あとがきが未だにすら書けないのは、きっとこれが原因だな。

それはともかく、三冊目です。

何事にも学習効果はあるものでして、それまでに二冊も自分の活字になった本を見てみると、それなりの書き方というものを覚えてまいります。

たとえば、出て来る機械の型式を、細かいところまで指定するのは半分趣味みたいなものでしたが、この頃からはつきりと意識してやるようになっていきます。

同じ戦闘機を出すにしても単なるトムキャットでなく、F-14Aか、それともスーパートムキャットと呼ばれるF-14Dで、しかもアメリカ海軍通常動力空母インディペンデンスの搭載機にしてみるとか。はたまた、F-16を出そうと思うと、これは日本のそばでは青森の三沢基地か、韓国の釜山に配属されているとか。

カーチェイスをするのに、区分地図や道路地図を二、三冊、原稿のそばに置くようになったのもこの頃からです。なぜ一冊で済まないかというと、縮尺や発行年月日にもよるのだが、ものによつて細かい地名や道路の名前が書いてあるものとなないものがあり、しかも、道路の周りの状況となると最悪の場合地図ごとに違ったりするので。さらに、地図のほとんどはそこに何があ

るのか描いてあっても、その建物がどう見えるのか、煉瓦造りなのか鉄筋コンクリートなのか、建物の構造や外装の色などは描いてありません。しかたないから、行ける場所の場合はロケハンに出掛ける事になります。後半、国立市街戦の場面は、谷保から中央線の国立駅まで歩き回りました。話が詰まってたせいもあるんだけど。

この方法には、物理的境界と時間的境界が存在します。

物理的には、行ける場所が限られる事。月には、どうやら一九七二年以来誰も行ってないらしいし、海外の行った事のない場所というのは物理的に行けても経済的に行けない事が多い。そういうやこないだ、雑誌に南極に砕氷客船で行くってツアーが載ってたな。

もし経済的に許されても、時間的に許されない事も多い。これがうっかり舞台を未来や過去に設定してしまうと、もういけません。未来予測と口先三寸でごまかす未来はともかく、過去の方は資料や地図と格闘する事になります。未来は待つてればそのうち来るけど、過去に取材に行くためにぼーっといつ起きるかわからないタイムスリップを待つてたら、みんな怒るだろうなあ。

これだけ苦勞して書いても、リアルでしょなんて言われてられるのはいいところ三年です。昔から万物は流転するものと決まっております、早い話が軍の装備は技術革新と用兵思想の変化によって予算の許す限り更新されていくものだし、その基地だって世界情勢の変化によって出来たりなくなったりします。

地図を横にして書いたリアルな町の様子にしても同様、変化の激しい東京では町並みも店の並

びもあつという間に変わってしまいました。

道行く人の服装も、走る車も変わっていく。場合によっては、国までなくなったり出来たりする。

機械だけなら、まだ対処する方法はありまして、それはこの作品の中でも使われております。最新鋭の機械を出すから、より新しいものが出た時に慌てるのであって、初めから中古品を使っていたら、少々古くなっても心配はない。

平沢探偵がモーガンプラス8に乗っているのは、作者の願望。プラス初めっからクラシックカーなら古びる事はあるまいという計算ですし、同じ理由でSCF極東支部の日系三世松木くんの愛車はメッサーシュミット、占い師幹本沙織はモリス・ミニ・クーパーを乗り回すという設定になっています。

ただ、これにも盲点は存在するわけで、学生どもがスクラップから再生するというホンダCB七五〇も、カワサキ七五〇SSも、どういうわけかいつの間にか中古車市場での値段が高騰し、今や高価で貴重なクラシックバイクとなっています。

時代を明示しない現代物の宿命、はたまた古くないふりをしたがるための悪あがきとでも申しましようか。いずれにしても、作品そのものがクラシックになるか、作者があきらめるかしない限り、現代という時代との追っかけっかが続くのでしよう。この場合、時代の方が逃げてくわけやね。ああ、いつまで続くどたばたよ。



ちなみに、いまだに同じ事やっています。  
ではまた、次回作でお会いしましょう。

OCT・17、1994

笹本祐一

ISBN4-257-76702-2

C0193 ¥485E



定価：**本体485円** + 税

星南高校の女子部の構内で、私立探偵・平沢の姿を見かけた沖田や榊らは色めきたった。またSCFがノブを狙って動き出したに違いない。

予想は的中した。作戦名“カーニバル・ナイト”——すなわち小牧ノブ誘拐作戦のために、SCFはサイコ・クラッシャーを転校生の形ですでに送り込んでいたのだ。その転校生の名は和紗結希<sup>かずさゆき</sup>。沖田らは早速、彼女に接近をはかった。